

(表紙)

| | | |
|---------------------------------|----------------------------|---|
| 追 舊 記 雜 録 卷 四 | 光 久 公 網 久 公 | 自 慶 安 三 年 至 同 四 年 |
|---------------------------------|----------------------------|---|

光久公御譜中

(義弘女)千鶴 初伊集院忠真室・後島津久元室
御下様役人江可申聞條々

- 一 御道具無聊尔様ニ堅固ニ可申付事、
- 一 御知行方之儀萬事此中之役人取納首尾可申付事、
- 一 隠州様御前方御知行如此中可申付事、
- 一 女房衆御暇可被下人并一代御養可被下御約束之人於在之ハ、可為其分事、

一 御屋敷之番無緩可申付事、

付 火之用心之事、

一 御屋敷中置目之儀、猥無之様ニ可申付事、

右御下様役人江申付候、具承届下、

慶安三年 正月十六日

鎌田源左衛門判

北郷 佐渡判

鳴津 筑前

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢 兵部殿

御文庫貳拾番箱四拾八卷中

態令啓候、

(家久) 黃門様御十三年忌之為御香奠、銀子十枚・焼酒二壺
御靈前江進上申候、宜預御取成候、恐惶謹言、

三月六日

琉球國司

尚質判

御老中

末ニアリ

御老中

琉球國

尚質

家久公寛永十五年ヨリ慶安三年マテ十三年也、四年迄滿十三年ナリ、

新納忠秀譜中

慶安三年庚寅春

公使忠秀為在番奉行如琉球國、大口士伊駒主殿・市來長左衛門并以附衆從既至、代諏訪神左衛門尉正兼鎮成之、五月八日以病客死、年三十四、葬于清泰寺、法諡悟心全了庵主、時所隨大口士田代諸右衛門及家僮源兵衛者自刃殉之、而訃告至乃招其魂、埋諸深國院、初其渡也家臣西田龜右衛門得罪不從、至是亦自刃殉焉、

313 御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々清右衛門方へハ披状ニ仕遣り間、其趣をも被成御覽御心得御尤存り、右之本大坂へ参着次第隱岐様御藏元方継飛脚ニある爰元へ被召寄答ニり、それほと御急用ニり間、以其御心得早々被召上肝要ニ存り、以上、

態令啓入り、然老御書物之内ニ書本之東鑑一部有之り、近キ比迄ハ平田清右衛門方へ御文書為引合被預置り、若返上被申りハ、自德里村造酒介可被存り間、早々被仰渡此方へ一刻も急可被差上り、右老酒井讚岐守様方隱岐様迄被仰遣りニ付、被召寄り事ニり、多分是ハ御城之御用ニる可有之哉と被思召り由り、少も遅参不仕様ニ誰そ

輕キ衆宰領被仰付、其上御道具衆をも被相付、中途も聊尔ニ無之様ニ可被申付由 上意ニあり間、其御心得を以可被仰渡り、乍重言彼之御本不相知りハ、平田清右衛門被召出、巨細御尋り可然存り、圖書方よりも清右方迄状遣り間、其御心得可被成り、恐惶謹言、

朱カキ 慶安三年 卯月十一日 新納右衛門 久註判

伊勢兵部 貞昭判ナシ 嶋津圖書 久通判

嶋津筑前殿 北郷佐渡殿 鎌田源左衛門殿 人々御中

314 光久公御譜中

慶安三年庚寅四月二十九日

家光公 家綱公以ニ松平伊豆守信綱・松平和泉守乘壽一、為ニ上使一、給レ告惠給之品物如レ例矣、五月二十二日發ニ江

末ノ封面ニアリ、名ハ略ス 慶安三年卯月十一日之状卯月廿六日ニ飛脚持下候、一御書物之内ニ書本之東鑑可召上せ之由候事、

封面左ノ如シ、名ハ略ス

都一、從レ大坂乗船、歷ニ赤間關一、著ニ薩西津一、六月晦日、歸ニ于魔城一、奔ニ島津中務久茂于東武一、奉レ謝ニ給レ暇歸レ國之辱一、獻ニ上猩々皮十間・御樽肴一矣、

315 御文庫廿番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

急度令啓外、只今松平伊豆守殿・松平和泉守殿為御上使、如例年首尾能御暇被成御給、御祝物御拜領ニ而御家中上下之大慶可被成御察外、此等之御左右為可申入、以早飛脚如此外、當地御發足日限ハ来月四日之由被 仰出外、自然替儀外ハ、重而可申入外、先々為御心得御座外、恐惶謹言、

宋カキ 慶安三年 卯月廿八日

新納右衛門 久詮判

伊勢兵部 判ナシ 貞昭

鳴津 筑前 (圖書カ) 久通判

嶋津 筑前殿
北郷 佐渡殿
鎌田源左衛門殿

人々御中

慶安三ノ卯月廿八日ノ状同五月十六日九ツ半時ニ到来、
一卯月廿八日ニ薩州權御暇給之由候事、
一右 上使松平伊豆守殿・松平和泉守殿御屋敷へ御出候事、

316 光久公御譜中

正文在文庫

為端午之嘉儀、帷子単物数十到来歡思召外、委曲酒并讃岐守可申外也、

宋カキ 慶安三年 五月三日 家光 墨印

薩摩侍從とのへ

317 慶安三年庚寅

五月八日田代諸右衛門 新納刑部大輔忠秀に、源兵衛り、忠秀小者なく、
殉死、大口衆なり、
殉、西田亀右衛門 忠秀家臣にて、
死 同しく殉死

318 御文庫拾一番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

去歳奉祝継目之慶詞、使具志川當初夏中旬之比着岸當國、則兩 上様拜領物欽頂戴仕候、誠 尊公御威光件之及御高恩者必矣、殊更使者被召殿中俯奉拜 公方様、剩賜白銀・衣服及其從僕賜若干之白銀者、琉國之普恐悦不少

外、就中 御書到来弥以不知所奉謝外、將亦拜領物品、

如目錄致拜受、芳惠不淺多幸々々、然者國中^{本マ、故カ}之政道被

仰下趣諸士に申觸不可有緩疎外、仍不腆之方物奉録于別

楮外、猶餘慶追可奉得 尊意候、誠惶誠恐敬白、

朱カキ

慶安三年 六月八日

琉球國司

尚質判

進上 光久尊公

319 綱久公御譜中

正文在文庫

態呈一翰外、然者 (綱久)久平尊君様御繁昌之趣承候、千秋万

歳目出度奉存外、各御喜悅之程令察外、仍兼城差上申 (親方呈正)

外、萬々以御取成

御前可然之様奉頼存候、猶委細者兼城附于舌頭不能詳候、

恐惶不宣、

朱カキ

慶安三年 六月八日

琉球國司

尚質判

御老中衆

御文庫式拾番箱四拾六卷中

光久公御譜中ニ在リ

猶以申入外、(能勢頼盛)小十郎様方御内證被仰聞外通、又此方

御領内境目御覽不被成外、御沙汰無之^{本マ、故カ}其御心得可

被成外、猶替儀外ハ、追々可申入外、鹿兒嶋家老

衆へも可申入外へとも、此使急立せ申外故無其儀

外、貴老前より可被仰越外、以上、

急度令啓入外、

一能勢(頼盛)小十郎様・蒔田数馬様今日廿八日七ツ半時ニ限元 (限)

へ御着外、城内へ被成御宿外、朽木民部(前綱)太輔様・兼松

弥五左様(巻五左衛門正直)ハ明日廿九日ニ限元へ御着之由外、道中ニ

申外故如此之由外、

一 小十郎様へ御書并御進物持参仕外、

一 民部(巻カ)太輔様・弥五左衛門様此方御領内境目可被成御覽

哉之由、小十郎様へ得御内意外へハ、此方御領内へ御

越之儀ハ曾有之間敷之通被仰聞外、肥後之内袋迄被 (本袋)

成御越、肥後と薩广之境を御覽外て長崎之ことく可有

御通之由被仰外、袋へ然々之人被遣、薩广守殿御下着

外ハ、何月何日ニ御下着外、肥後被相廻領内近邊迄

御越外、御大儀ニ存外通被仰可然之由被仰聞外、使者

前よりも薩广守領内も近く御座外条被成御越御一覽外

ハ、下々迄も忝可存外通あいしらわれ外可然被思

召之由、被仰聞外、御みかたの儀を右之通御内證被仰

儀いかゝりつれ共、源左衛門儀ハ前々御存知被成

たるもの、儀々間、被仰聞之由り、併源左衛門校量次

第可申越由被仰り、民部様御方御使なと被進儀者御

無用ニ可被成由被仰り、御領内境目近邊御通り

を、菟角不被仰り、者成合申間敷儀と被仰り、御進物

者必可被召置之由被仰り、

(出水)

一米之津へ何かし罷居り哉と小十郎様御尋り間、山田民

部少輔罷居之由申上りへハ、民部少罷出右之趣被申上

可然之由り、今度江戸方申越りハ、かろきものを御案

内者ニ差出り様こと申下り通申上りへハ、民部少も被

罷出、又かろき御案内者も罷出可然之由被仰り、

一民部太輔様・弥五左衛門様明日廿九日ニ限元へ御着り

ゐ、明後卅日ハ被成御滞留、朔日にハ八代之ことく御

越之由被仰聞り間、袋へ貴老御越之儀、其御心得可被

成り、殿様御光着りハ、鹿兒嶋へ被得 御意、御下

知次第可被成儀ニ可有御座りへとも、御返事被相待

りハ、はずこあい申間敷り、先御越りゐハいかゝ可有

之哉と存り、未御光着無御座りハ、日方も能り間、

三日中ニハ其地へ可為御下着かと奉存り間、被得 御

意尤り、袋へ御越之日限ハ、上使様御宿賦ニ御見

合可被成り、恐惶謹言、

朱力キ 慶安三年

六月廿八日

山田民部様

人々御中

鎌田源左衛門(政有)

判本マ、

321

御文庫廿番箱四拾六卷中

光久公御譜中ニ在り

御孫様今日七ツ時分御逝去、笑止千萬御力落絶言語申り、

隱岐様・河内様ひたと御付添被成御座、御療治之行を御

盡り、御祈禱之儀者不及申り得共、如此之御仕合とかう

を可申上様無御座り、昨晚俄ニ御煩出如此り儀不及是非

次第ニり、恐惶謹言、

朱力キ 慶安三年 六月廿八日

町田勘解由 久則判ナシ

嶋津圖書 久通判ナシ

伊勢兵部殿

嶋津筑前殿

北郷佐渡殿

山田民部殿

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

参人々御中

封面ニアリ、名ハ略ス

六月廿八日ノ状七月十二日ノ晚御道具衆持參、

御孫様御逝去ノ事、

按ルニ前年十月朔日御誕生ノ御女子様ニ当レリ、左アレハ御誕生ヨリ九ヶ月目御天亡ナレトモ御系圖載置カレス、

御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

就益滿新兵衛下向申入、

(稱カ)

一又三郎様御姫様御死骸、去廿八日之晚泉岳寺へ取置上、御幼少ニ被成御座、何之作法も無御座、

遠山三郎左衛門殿・竹内久右衛門殿・菅五郎左衛門殿

右三人へも内談仕、彼之御仕合ニ付、方々より御状

参、間、可被差上、

一御立前、先物奉行座之算用之儀、誼方(兼利)右衛門・喜入吉

兵衛方主取仕、様こと被仰付置、大形首尾仕、巨

細之段者、兩人前方高崎惣右衛門・猿渡大炊迄被申遣、

間、可被致披露、

(願重カ)

一去廿六日松平右京殿又者と此方御門番出合有之、巨

細ハ書物見得申、大形相濟へとも向之相手捕不申

、故、ちと口能ニ罷成、隠州様へ得御内意其上、

可然様相調可申、間、濟場之儀重可申上、

一井上筑後守殿末之御孫殿去廿四日刀さやはしり、心本

ニ當、御果、御状とも可被遣人ニ、間、申上、

(直孝)

一井伊掃部頭殿御煩火急之由承、頃者腫氣ニ、食事も

無御座、様ニ物沙汰、御在国之衆御使被進仕合も、

ハ、其心得可仕、恐惶謹言、

朱カキ

慶安三年 七月朔日

町田勤解由

久則判

鳴津圖書

久通判

鎌田源左衛門殿

新納右衛門殿

山田民部殿

北郷佐渡殿

鳴津筑前殿

伊勢兵部殿

人々御中

末ノ封面ニアリ、名ハ略ス

慶安三、七月朔日之状同十九日ニ益滿新兵衛持下候、

一又三郎様御姫様御死骸去廿八日晚泉岳寺へ御取置ニ、候由候、

一御立前ニ先物奉行之儀算用之儀誼方左右衛門殿・喜入吉兵衛殿被仰付候、大形首尾仕候由候、

一松平右京殿又者と此方御門番出合候事、

御文庫拾二番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

尚々海路御無事ニ御帰国被成、御堅固ニ御休息被成
 外哉、承度存外、爰元御屋敷中替儀無御座外、御氣
 遣被成間敷外、拙者儀無吳にて罷在外、未御暇之沙
 汰も無御座外、定る御移徒迄ハ在府仕にて可有御座
 外間、御用等御座外ハ、可被仰越外、猶期後音之節
 外、以上、

一書致啓上外、御上以来御左右も不承無御心元存外、道
 中海上無吳儀御国元御着岸被成外哉承度存外、爰元御發
 足以来弥別条も無御座外、兩御所様御機嫌能被為成御
 座外、公方様此比一兩度御城廻へ被為成外、紀州大納
 言殿・水戸中納言殿も去廿七日ニ被致御目見外、御氣色
 残所も無御座外、御氣遣被成間敷外、西之丸御作事過半
 致出来外、御移徒之儀弥九月之様ニ相聞之外、就其早々
 為御名代御一門中被差遣御尤存外、酒讚岐守殿も内々其
(酒井忠勝)
 通ニ思召外、御移徒之御進物之儀最前御支度之通御簾御
 上ケ被成可然之由各被申外、若其外ニ御太刀・折紙・御
 樽肴ニあるも上り申外ハ、爰元にて間合差上申外様ニ可
 申付外間、御心安可被思召外、随而朽木民部少殿・兼松
(正徳)
 弥五左衛門殿去廿五日ニ豊州鶴崎迄参着之由承外、定る

此比ハ肥州へ可被致着と存外、蒔田数馬殿・能勢小十郎(長俊)

殿ハ熊本御横目ニ彦年替ニ被 召置外間、折々御心を可
 被添外、將又尾張宰相殿先月末ニ御當地参勤被成外、御
(徳川義直)
 家督無相違被 仰出外、併未継目之御礼ハ相濟不申外、
 定る頓る 御目見可有御座外間、御使者可被遣外、此表
 為何跡敷儀無御座外間、無御氣遣緩くと御休息可被成
 外、委細者嶋津圖書方(久通)可申上外、恐惶謹言、

慶安三年 七月九日

松平薩广守

定行判

松平薩广守様

人々御中

324

御文庫日番箱四拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

態令啓入外、然者去ル五日上使石川弥左衛門殿にて御鷹
 之雲雀被成御拜領外、追付被遊御登城御礼被仰上外、誠
 以千秋萬歳目出度御仕合ニ奉存外、其御元より之御礼と
 して此元へ被罷居外御陸衆差出可申と存外間、飛脚ニ而
 御書早々可被指下外、いつれ共承合御并次第致談合可然
 之様可相調外、將又御暇被成御給外御礼之御祝物昨日嶋
(久通)
 津中務致登城首尾上り申外、御奉書出次第急度可被罷下
 外間、其時分具ニ可申入外、猶期後音之時外、恐惶謹言、

慶安三年 八月八日

町田勘解由 久則判

鳴津圖書 久通判

伊勢兵部殿

鳴津筑前殿

北郷佐渡殿

山田民部殿

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

參人々御中

封面左之如シ

伊勢兵部殿

鳴津筑前殿

北郷佐渡殿

參

久通

慶安三、八月八日ノ状同廿三日ニ
飛脚持下候、

鳴津圖書

町田勘解由

一 八月五日上使石川弥左衛門殿にて

御鷹之靈雀被成御拝領候由候事、

一 鳴津中務殿も八月七日ニ首尾能登城ニ而候由候事、

綱久公御譜中

綱久

女子三人

久定

忠長

久岑

虎松丸・又六

慶安三年庚寅八月九日誕生、母家臣救仁郷大神房頼

重女、

家臣島津又六久近後嗣、

326

御文庫拾二番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、兩上様弥御氣色能被成御座外哉、被承
度由得其意外、一段御機嫌好去八朔御白書院出御、如例
年以大刀目録御札有之外、其以後大納言様には又御札御
座外間、可御心安外、入念外趣及 台聴外、恐々謹言、

朱力キ

慶安三年 八月九日

阿部對馬守重次判

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

松平薩广守殿

327 全上 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、兩上様弥御機嫌能被成御座外間、可御心易外、將亦今度首尾好御暇道中無吳儀、六月晦日帰國忝之旨得其意外、因茲被差越使者、殊猩々皮拾間・御樽看被獻之外、遂披露處入念外段御満足之御事外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年
八月九日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩广守殿

328 御文庫拾一番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、兩上様弥御機嫌能被成御座候之間、可御心易外、將又今度首尾能御暇其困々參着忝被存之旨得其意存外、依之被差越使者御目錄之通被獻之外、遂披露外處一段之仕合外、委曲使者可令洩達外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年
八月九日

松平和泉守

乘壽判

松平薩摩守殿

329 御文庫廿三番箱廿一卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、兩上様御機嫌能被成御座、去比公方様御城廻被為成候之儀、息又三郎被相達目出度被存之由得其意外、依之被差越使者入念之段可及上聞外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年
八月廿三日

阿部對馬守
重次

阿部豊後守
忠秋

松平伊豆守
信綱

松平薩摩守殿

330 御文庫拾一番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

以上

薩州鹿兒嶋山下居所巽之方石垣崩外付、被築直度由繪圖之通得其意外、如元普請可被申付外、恐々謹言、

慶安三寅
八月廿八日

松平伊豆守
信綱判

阿部對馬守
重次判

松平薩广守殿

阿部豊後守
忠秋判

御文庫式拾番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

一 書申入外、仍有馬郷兵衛儀去十六日御當地へ参着仕外、御判紙并繪圖儘相届申外、繪圖之事書等隠岐守様へ得御意相調差出申外、今日御奉書出外間、書写昨日四内内藏助ニ差下外、本書考此度(島津久卿)中務持参仕外、今度何そ口上之替たる儀考無之外、併最前被仰聞外儀以書付大舩申上外、巨細ハ口上ニ申合外、以来御心得可入外間、能々各可被聞召置外、

一 朽木民部殿・兼松弥五左衛門殿去ル十五日當地へ被成御着外、去月廿日郷兵衛便ニ御越之御書認直外御進物相添進入申外、何方も右之通ニ御座外由相良主計・(定直)三雲太郎左衛門申外ニ付如此外、御返事差下外、(勝俊)一 水野美作殿へも同便ニ御状被進外、御報差下外、
一 又三郎様若御前様、大御前様より御下国御祝儀之御轉看其地ニ有惣奉行調被差上外通、御書面之趣得其意外、
一 御堀廻ニ被為成外御祝儀之為御使、有馬郷兵衛被為差上外へとも、餘方之使乗馬ニ有外、甲斐少介差出申外

彼御奉書も、昨日出申外間、写内藏助便ニ差上外、
一 西之御丸御移徙ニ付、御進上之御簾も最早出来外御座外、是又可御心易外、恐惶謹言、

朱力半慶安三年 八月晦日 町田勘解由 久則判

嶋津圖書 久通判

鎌田源左衛門殿
山田民部殿
新納右衛門殿

嶋津筑前殿
伊勢兵部殿 御報

封面ニ左之如ク、名宛等略ス
慶安三年八月晦日之状、九月十七日ニ嶋津中務殿被持下候、
一 御城破損之繪図隠岐守様へ被為得御意相濟候事、
一 御移徙ニ付御進上之圖出来候事、

332 綱久公御譜中

正文在文庫

御用之儀外之間、唯今可有御登減外、恐々謹言、

朱力半慶安三年 九月朔日 阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守
信綱判

嶋津又三郎殿

333 光久公御譜中

正文在文庫

為重陽礼儀、小袖五到来忻思召候、猶酒井(忠勝)讚岐守可申外也、

朱筆

慶安三年

九月七日

家印
墨印

薩摩侍從とのへ

334 御文庫式拾番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

態以飛脚申入候、

一 御移徙之日限来ル廿日ニ相究申外、御進物之儀者御並承合可申外、

一 大納言様に被進外御人分、去三日同四日兩日ニ被仰出外書付差上申外、右之御人分ニ付る、諸大名衆何れも四日ニ被成御登城、

又三郎様及御同前ニ御祝儀御申外、

一 右之就御祝儀、御在國之御衆者以使者被仰上由ニ外、

其分ニ留守居相談為申通相良主計・三雲太郎左衛門より承外、使之位者中小姓程之人ニ可有之と被申事外、

幸阿多勘解由可被参り間、彼人を差出可申外哉、若彼人者可惡と被 思召外ハ、誰そ被仰付可被差上外、

一 伊集院源介殿(久應)、去ル廿日比大坂へ御着外へとも、病病

氣ニ御座外、いまた此地へ参着不被成外、右ニ如申御移徙相濟外より之御使者ニ可仕り間、少く御遅参者不苦外、

一 神尾備前殿より三日ニ御人分之書立其晚ニ三雲太郎左方迄被遣外、此度為持申り間、隨ニ被届 御覽外由御状にて御礼被仰可然奉存外、

一 中村佐五右衛門方圖書召列りて、去二日ニ阿部對馬様(重次)へ参上仕、様子申上外へハ、御城ニ御惣御うち合外

四日ニ可被聞召上由り間、其分ニ召列、四日ニ御城へ罷登り外韃人使者帰帆之儀是申上外、此度罷渡り通事兩人之儀も申上外、戌之年之脇通事帰外ハ、左様ニ社可有之外、長袖之分ニ可然様有之間敷と被仰外、少及滞無御座外、急度御返事可有之外間、其刻佐五右衛門にて巨細可申上外、

一 従琉球去年使者之御礼之儀も先大躰申上置外、重陽相

過り得御意進上物等差上可申外、為御存外、猶期後
音之時外、恐惶謹言、

慶安三年 九月八日

町田勘解由 久則判

北郷佐渡 久加判

鳴津圖書 久通判

鎌田源左衛門殿

山田民部殿

新納右衛門殿

鳴津筑前殿

伊勢兵部殿

スリキレ
後々可有御披見候、

井上筑後守殿御惣領清兵衛殿、去月廿二日ニ被成御死去
外、筑後殿へ御状可参外間、御次ニ可被仰上外、以上、

九月八日

勘解由

佐渡

圖書

(鎌田)
源左衛門殿

(山田) 部殿
(新納) 右衛門殿
(伊勢) 兵部殿
(高津) 筑前殿

封面ニ左之如シ、名略ス

一中村佐五右衛門方圖書殿被召列、去ル二日ニ阿部對馬守殿へ御差出權人之權被仰
上候事、

一慶安三年九月八日之状同九月廿三日之夜之五ツ時飛脚持下候、

一御移徙之日限九月廿日ニ相究候、

一大納言櫻江被進候御人分之事、去ル三日、同四日同日ニ被仰出候御人分之番付神
尾備前殿より被過候間、御状ニテ御札可被仰上候、

一右之就御祝儀御在困之御衆者、以使者被仰上候由候、使者之位ハ中小姓程之人ニ

而可有之と、いづれも留守居相談之由候、幸阿多勘解由可被参候間、彼人被差出
可申候、又別人ニ可被差上候、

御文庫拾二番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、韃王之使者琉球到着外、書翰之写并從
琉球之返書、其外彼使者申分等之事、具書注被差越之得
其意外、入念外段御次外刻可達 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 九月十四日

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

336

御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

松平薩摩守殿

松平伊豆守
信綱判

猶く紙包ニ金銀之間相添被遣ハいと相見得ハ、其通も
書面ニ見得ハ様ニ可被仰渡ハ、以上、

一筆令啓達候、松平和泉守殿（乗老）方為御祈念（西諸縣郡）狗留孫嶽へ法花

經老部被成御奉納ハ間、此度遣ハ其通可被仰付ハ、左ハ

右和泉守殿家来衆今井加兵衛殿迄相届御祈念申ハ由、披
き状を以社家敷、座主敷首尾被申ハ様ニ可被仰付ハ、恐

惶謹言、

宋カキ
慶安二年
九月十八日

新納右衛門佐
久詮判

鳴津圖書頭
久通判

川上因幡守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

人々御中

封面左ノ如シ、宛名等略ス

一猪俣為右衛門尉殿寅十月十九日ニ被持下候、

一松平和泉守殿より為御祈念狗留孫嶽へ法華經三部被成御奉納也、

337 光久公御譜中

大納言家綱公以ニ今年慶安三年九月二十日、移ニ徙于西
丸一、因レ茲光久獻ニ上御簾三十間而后進ニ上御看三種・
御樽三荷ヲ于

家光公、御太刀一腰・馬代黄金十兩ヲ于

家綱公、奉レ祝レ之、

338 北郷久加譜中

慶安三年庚寅奉レ嚴命使レ武城、所レ見レ賀ニ於 大納言

家綱公西之丸御移徙一、奉レ拜ニ（家綱） 亞相公一、獻ニ上御太刀

一腰・御馬代一、拜ニ領時服六一、此行村岡宇兵衛清定・

大嶺少兵衛安親等從矣、

家久公 光久公 綱久公 綱貴公渡ニ御于久加亭一、奉レ

獻レ盛膳ヲ 數回不レ違レ枚筭、

339 十二番箱四十八卷中 光久公御譜中ニ在リ

就今度西丸御移徙被差越使者、殊御簾三拾間目錄之通被
獻之ハ、遂披露ハ處入念ハ段御満悦之御事ハ、委曲使者
可為演説ハ、恐々謹言、

宋カキ

慶安三年
九月十九日

阿部豊後守
忠秋判

松平薩广守殿

松平和泉守
乘壽判

340 光久公御譜中

去歳為王位繼目之祝詞、使者具志川(柳悠)到于此地令渡海之旨達 上聞矣、其以後於江戸遂御目見得之處

公方様御機嫌能為御返禮色々被拜領、剩至使者及從僕迄白銀・衣服等拜受之儀重疊忝之由細々得其意外、尤存外、且復其國政道之儀淳有之様可被仰付之由申越候之處、其越諸士に堅被相觸之条令承知外、弥以不可有緩疎外、猶委曲從老中可有演説之間、令省略外、恐々謹言、

朱力平慶安三年 十月九日 薩摩守光久御判

謹上 中山王

341 光久公御譜中

尚以其後老御床敷奉存外、長崎表弥相替儀無御座外、山權八氣色も忠庵葉之、此比ハ少々腹中之心持能様ニ御座外、然其長病之儀外、早速本復被仕儀ハ有之間敷と咲止ニ存外、以上、

預御札忝奉存外、其御地別条無御座御無事ニ御座外由、珍重ニ存外、殊御国之七嶋節一箱三百入被懸御意外、每度御懇志之段忝奉存外、將又御居城石垣去ル夏中之大雨ニ破損仕付外、御老中へ被仰入外、如元可被仰付

之由御奉書參外由被仰聞令得其意外、當年ハ度々之大雨風虫ニ御領地損亡之儀及承外付外、内々其段御老中迄申入外、余方も九州中大分損外得共、御国之儀ハ一入損外由承及外、扱々御咲止ニ存外、次一昨日從江戸次飛脚參外、

兩上様弥御機嫌能為成御座、去月廿八日ニ 公方様西之御丸へ被為成、三献之御祝ニ御機嫌残所無御座、天氣迄能御座外由御奉書到来、寔以目出度外、御同前奉存外、此外相替儀不申来外間、其元へ不申上外、自然此表御用等御座外、於被仰付者可忝外、恐惶謹言、

朱力平慶安三年 十月十五日 高力攝津守(忠房)判

松平薩摩守様 貴報

342 御文庫拾二番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

今度 大納言様就西丸御移徙、被差越使者、殊 公方様

に三種・三荷被獻之、遂披露候之處入念、段御機嫌能
外、猶使者可令演説、恐、謹言、

朱カキ
慶安三年 十月十六日

阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

343 御文庫拾二番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

従先年度、如被 仰出、外きりしたん宗門之儀、於諸國在
く所、弥以無油断可遂穿鑿之旨 上意、可被存其趣、
恐、謹言、

朱カキ
慶安三年 十月十八日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

344 拾二番箱四十八卷中 光久公御譜中ニ在リ

為今度西丸御移徙御祝儀、被差越使者、御太刀一腰・馬
代黄金十兩被獻之、遂披露之處入念之段御満悦之御事

外、猶使者可令演説候、恐、謹言、

朱カキ
慶安三年 十月廿二日

阿部豊後守
忠秋判

松平和泉守
乘壽判

松平薩摩守殿

345 御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶、嶋津兵庫殿御弓之役首尾能被相濟、次阿多勘
解由一昨日當御地へ^{スリキレ}着、外仕合、御座、乍不
申此使小兵衛追付此方へ可被仰遣、以上、

一筆令啓上、仍今朝巳之刻 (細久守) 若御前様へ御若子様御誕生
千秋萬歳、吉日と申誠以目出儀、御座、御産い
にも軽くと御座、一段御機嫌御能、此等之旨早
御悦為可申上、永山小兵衛進上申、間、可被仰上、猶
追、御吉左右可申上、恐、謹言、

朱カキ
慶安三年 十月廿四日

町田勘解由
久則判

北郷佐渡
久加判

嶋津圖書
久通判

伊勢兵部殿

鳴津筑前殿

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

參人々御中

封面名ハ略

慶安三年十月廿四日之狀聞十月八日ニ永山小兵衛被持下候、

一若御前様十月廿四日之巳之刻ニ若君様御誕生之事、

按ルニ
此御書大玄公御誕生之時吉報と相見得候事、

346 綱貴公御譜中

綱貴

初延久・虎壽丸・又三郎・從五位下修理大夫・侍從・從

四位下左近衛權少將・從四位上左近衛權中將・薩摩守

慶安三年庚寅十月二十四日誕生于江府芝第一母豫州松山

城主松平隱岐守定頼女也天和二年壬戌十一月七日逝去江戶芝館一、
法名真修院殿孝延妙栄日長大姉、體二牌於薩

之福昌寺中惠燈院一也、定頼之母世者島津家巨島津豊後朝久之女而当家十七代兵衛
頭宰相義弘入道惟新之嫡女、嫁于朝久一、所レ産之一女也、惟新歿レ之而娶三松平

隱岐守定行一、定行、
者乃定頼之父也、

○家臣島津兵庫忠平勅三鳴弦墓目之役一、

347 正文在琉球

覺

去年從韃王使者被差渡外刻、琉球國司之返事被仰様可有

之由外、新納刑部(忠秀)為御使其許に被差渡、其節之時宜相

調、船表致帰帆外、右之使者申外者、琉球方唐に禮儀之

事丑寅之兩年其使者前より可申達外、其過外者ハ重る使

者を可被差渡儀も可有之旨申由外、就其來年中ニ及使者

參儀も可有外、其時分如何様ニ返事あいしらひ可申哉之

由、中村佐五右衛門を以承外条、奉得御内意外処、去

年之口上ニ為相替意趣者可悪外、弥前々首尾ニ三司官相

談を以能様ニ返事被申可然之通被仰出外、委細佐五右

衛門可為口達外、以上、

慶安三年閏十月二日

鎌田源左衛門

新納右衛門

鳴津筑前

伊勢兵部

誼方神左衛門殿(正徳)

348 十二番箱四十八卷中

御札令拜見候、大納言様(家綱)に阿部豊後守其外御家人數輩

被附進之儀相達目出度被存之由得其意外、依之被差越使

者外、入念外段及 台聽外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月五日

阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩广守殿

349 御文庫拾一番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、(家光・家綱)兩上様御機嫌能被成御座外間、可被御心易外、将又 大納言様ハ阿部豊後守被為付之儀相達目出度被存之由得其意外、因茲被差越使者外、入念外段令言上外、御使者可令演説外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月五日 松平和泉守
乘壽判

松平薩摩守殿

光久公御譜中

大隅

(園分・高内)
正興寺住持職事、任先例可被執務之状如件、

慶安三年閏十月五日

侍從御判

守榮西堂

(の2) 建長寺住持職事、任先例可被執務之状如件、

慶安三年閏十月五日

侍從御判

守榮西堂

351 御文庫拾一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、就歸國被差越使者節、時服・御羽織等被下之儀忝被存之由得其意外、将又 兩上様御機嫌能被成御座之趣最前相達外之処、玆重之旨別紙之通承届外、入念外之段可及 台聞候、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月十二日 阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

352 全上 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、公方様九月十七日紅葉山ハ當年始カ御參詣被遊外之儀相達目出度被存之由得其意外、依之被差

越使者外、入念外段令言上外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月十二日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乗壽判

松平薩摩守殿

353 御文庫拾一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、(家綱)大納言様先月廿日西丸御移徙之儀相達

目出被存之由得其意外、依之被差越使者外、入念外之段可達 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月十三日

阿部對馬守 重次判

松平伊豆守 (信綱) 乗壽判

松平薩广守殿

354 全上 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、(家光)公方様九月十七日紅葉山江當年初

御参詣之義相達目出度被存之由得其意外、依之被差越使者外、入念外之段可及 高聴外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月十三日

阿部對馬守 重次判

松平伊豆守 信綱判

松平薩摩守殿

355 御文庫拾一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、大納言様西丸御移徙之儀相達目出度被存之由得其意外、依之被差越使者外、入念外段令言上候、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 閏十月十三日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乗壽判

356 十二番箱四十九卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、九月廿八日 公方様西丸江初 御成、

御機嫌能被成御座外儀相達、目出被存之由得其意外、依之被差越使者外、入念外段及 上聴外、恐々謹言、

朱力キ
慶安三年 十一月朔日

阿部對馬守 重次判

松平伊豆守 信綱判

御文庫拾一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、兩上様弥御機嫌好被成御座、去比公
方様始、西丸に被為成之儀相達、目出度被存之由得其意
候、因茲被差越使者、入念、段令言上、猶使者可為
演説、恐、謹言、

宋カキ
慶安三年 十一月朔日

松平薩摩守殿

阿部豊後守 忠秋判
松平和泉守 乘壽判

御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶、如被仰越、鳴津兵庫殿御弓之役首尾能相濟、
阿多六郎右衛門御誕生兩日前、下着申仕合能、以
上、

閏十月八日之御状、同廿五日ニ飛脚持下令披見、若
御前様御誕生御座、付、永山小兵衛を以御左右申上、
被達 上聞則御飛脚被仰付、御大慶ニ被思召之旨 久
平様 大御前様若御前様申上、早速御祝被仰越御満
足ニ被思召通被成御意、御前可然様ニ可被仰上、
虎壽様先月廿七日ニ御宮參被成、直 隱岐守様へ被成御

出、御祝之御振舞御座、首尾能相濟申、松平河内守

様より御宮詣之為御祝儀、鞍置御馬一疋・御道具二本

虎壽様へ被進、光久様被 聞召上、追、御礼可有御

座と存申入、御七夜之御祝之刻、從 隱岐守様御脇指、

河内守様より御腰物大小、京極山城守殿より御脇指 虎

壽様へ被進、是者佐州老御存知之儀ニ、間、定可被仰

上、將又 虎壽様 御前様別、御息災ニ被成御座、

可易御心、猶期後喜之時、恐惶謹言、

宋カキ
慶安三年 十一月朔日

町田勘解由 久則判
鳴津圖書 久通判

伊勢兵部殿

鳴津筑前殿

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

封面上ノ如ク

慶安三年十一月朔日ノ状飛脚同十八日ニ持下候、

一 虎壽様先月廿七日ニ御宮參之事、

一 右之御祝ニ付、鞍置馬一疋御道具二本松河内様ヨリ 虎壽様へ為被進申候、

伊勢兵部殿

一 御七夜御祝之刻隱岐守殿より御脇指、河

鳴津筑前殿

内様より御腰物大小、京橋山城殿より御脇さし、虎寿様へ為被進由候、

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

鳴津圖書

町田勘解由

此書ヲ按ルニ綱貫公慶安三年十月廿四日御誕生御母松平隠岐守定頼女トアリ、御幼名虎壽丸様ニテ當時之御書ナリ、綱久公ノ初ノ御名久平ナリ、翌四年十二月廿六日綱久ト改ラル、参照ニ供ス、

359

御札令拜見候、兩上様御機嫌之御様躰為可被相窺之、

舎弟伊集院源助當地被差遣由得其意、雖寒氣之時分

外益御氣色能被成御座外之間、可御心易、随而目錄之

通被献之外、被入念之段遂披露候之處、御満悦之御事、

恐々謹言、

十一月十八日

阿部豊後守

忠秋判

松平和泉守

信綱判

(付紙) 御譜中ニ無之
慶安三年ナルヘン

松平薩摩守殿

御文庫拾二番箱四拾九卷中

光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、

(家光・家綱)

兩上様御機嫌之御様躰被承度付、被

差越伊集院源助、益御平安被成御座、公方様切々御廳

狩被成、出御外之間、可御心安、將又御道服五并於其

國焼之皿廿、御着一種被献之外、右之趣遂披露外處、入

念之段御満悦之御事、猶源助可為演説、恐々謹言、

朱カリ 慶安三年 十一月廿日

阿部對馬守

重次判

松平伊豆守

信綱判

松平薩广守殿

361

御廳之鶴被遣之候、委曲從息又三郎方可被申、恐々謹

言、

十一月廿三日

阿部對馬守

重次判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

362 光久公御譜中

同年十一月二十三日、

將軍家賜三垂御廳之鶴一雙、執政投三奉書一見レ諭レ之、

便上价奉ニ謝之、伊集院右衛門久國合ニ光久之命一、到ニ于江都一矣、

363 御文庫拾一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札致拜見外、大納言様弥御機嫌能被成御座外之間、可御心易外、將又其國之蜜柑被獻之外、入念候之趣遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 慶安三年 十二月四日

阿部豊後守 忠秋判
松平和泉守 乘壽判

松平薩摩守殿

364 全上 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、兩上様御機嫌能被成御座目出度被存之由尤之御事外、益御平安御座外間、可御心易外、將又其國之蜜柑被獻之外、遂披露外處一段之仕合候、恐々謹言、

朱力キ 慶安三年 十二月六日

阿部對馬守 重次判
松平伊豆守 信綱判

松平薩摩守殿

365 御文庫式拾番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々從琉球之書簡之御返事之儀も、對馬様度々無御

失念、旨被仰外、もはや脇々之御返事ハいつれも参外

へとも 兩上様之御返事未参外故特申事外、為御心

得外、以上、

急度用飛札外、然者為御鷹之鶴御拜領御札、伊集院右

衛門殿被差越外、去ル廿五日當御地へ御下着外間、今

朝圖書同道仕、御老中へ被成出外、御進上物老御國之

干匏一箱充 兩上様に可差上由御老中へ相窺置外、定

而御城及一兩日中ニ可相濟外之間、近日可有御下向外、

其節細々可申入外、

一當御地上下之御屋敷いづれも御無事ニ被成御座外、御

孫様日増御進外、目出度奉存事外、

一鶴送御手形帖相届、今朝阿部對州様御内新居頼母殿迄

渡置申外、

一久平様に之御返書彙通、松隱岐様・真田長兵衛殿・久

世權之介殿へ之御返書皆々相届もたせ上申外、長兵衛

殿よりハ再報参外間、只今差上外、

一今朝松伊豆守様圖書へ被仰聞外者、舊冬申上外氣違者

之儀被成御相談、如城本衣婦問敷と申由、間、不及是非、併断相違罷戻、ハ仕合、於其儀者成合、格護仕可召置、彼者欠落仕、刻、何そ為致持參物も有之、ハ、帳ニ被付置、其身ニ判をさせ、可召置、定而判も致かぬ、可有之、ハ、共、何とそ不死内、可為仕由、右之書物者御嗜、被思召御言便、其時申上、ハ、道栖財寶等も少、御座、左様も判可為仕哉と申上、ハ、是、こも判させ可召置、由被成御意、喜樂事最前申上、刻、ハ、氣違者とハ不申上、へとも、今朝被仰出、旧冬申上、氣違者と被仰、此段各為御心得、最早上、老相果、ハ、口能有間敷と存、雖然若左様之儀於有之者、豊後之御目付衆迄(府内)檢使之儀被仰遣可然存、喜樂儀ハ早、可被聞召上儀と存、以早飛脚如此、猶期後音、恐惶謹言、

朱力キ
慶安四年 正月廿七日

町田勘解由

久則判

嶋津圖書

久通判

鎌田源左衛門殿

新納右衛門殿

北郷佐渡殿

嶋津筑前殿

伊勢兵部殿

人々御中

封面名ハ略ス

慶安四年正月廿七日之状同二月十九日之晚飛脚持下候、

一伊集院右衛門殿正月廿五日二江戸へ被為着候由候、

一喜來等之儀相濟候事、

366 御文庫拾二番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、旧冬從 公方様御鷹之鶴拜領忝被存之由得其意候、因茲被差越伊集院右衛門尉、其國之御肴一種被獻之候、遂披露之處一段之御仕合、委曲使者可為演説、恐々謹言、

朱力キ
慶安四年 二月十九日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守

乘壽判

松平薩广守殿

367 慶安四年辛卯

八月十八日萩田隨右衛門 嶋津彈正太衛門久慶臣にて、奥甚助、
殉死、下の三人も同じし、

上村求馬助・松元山右衛門、

慶安四辛卯歲為レ參觀二月二十日發魔城、解ニ纜於薩西岸一
到レ大坂、四月五日著ニ江府一、家老島津筑前久頼・新納
右衛門久詮扈從矣、

御判

置目之條々

- 一 今度留守中諸置目之儀、前々如申付置り堅可相守事、
- 一 組頭相集、留守中與下之人衆諸事氣任無之様、稱可申渡事、

- 一 留守中諸士以下氣任共申もの於有之者、依罪之輕重或寺領・川よけ或ハ溝堀・板とり、或日數之番等可申付事、

- 一 國家之為ニ可成儀及、不成儀も老中を初め諸役人方言上なく、何事も御意次第と被申り儀不可然り、存寄之儀者無用捨申上り者、聞届其上を以可致分別事、

- 一 諸事家老衆手前ニ可相濟儀者、無延引可被事濟事、
- 一 死人之相手、ツケツリ付死罪・八付・火あふり等之儀者、可致言上、併公儀之罪人他国ニ相懸罪人者、其時之相談

ニ應すへし、籠舎・流罪・捕者之儀者不及申上、家老衆方可被申付事、

一 各存之ことく国之風躰ニ可何事も談合相究り儀を何かとり、其首尾訳もなく成行り儀每事有之事ニ、當時相究り趣、少も違変無之様可相守事、

一 口事之沙汰、口事聞衆聞定り評儀、始終不相替様ニ噫り首尾可有之事、

一 自然國中并隣國ニ至りて俄事出来り(別朝制度ニヨリ補之)「儀も可有之候、連々以談合其用意不可」有油断事、

一 前々之法度、于今中絶之儀も可有之り、忽ち諸法度之儀者、何事によらず堅固ニ可被申付事、

一 評定所談合之儀輕く敷洩り由風聞有之り間、先年如申付置言口を相糺、可有其沙汰事、

右條々堅可相守、此外宗旨之儀ニ付、改奉行方申出儀於有之者、能く可有相談者也、

慶安四年二月廿日

御札令拜見り、舊冬御鷹之鶴拜領忝被存之由得其意り、依之為御札被差越伊集院右衛門、殊更御有一種被献之り、

右之趣遂披露外處、入念外段御機嫌能候、猶使者可為演説外、恐々謹言、

朱力キ
慶安四年 二月廿一日

阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

371 御文庫拾二番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

從琉球中山王最前使者具志川差渡、首尾能御目見仕忝付(御意)、重々其國迄為御札使者兼城差越、如目錄献上之趣、遂披露返簡之奉書遣之外間、可被届之外、且又自分之返礼是又相越外之間、可然様可有傳達外、恐々謹言、

朱力キ
慶安四年 二月廿四日

阿部對馬守
重次判

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

372 十二番箱四十九卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拝見外、(家光)公方様御不例之趣相達御様躰被承度付

被差越使者外、頃日孝御快然之御事外間、可御心易候、為參勤平戸迄被罷越之由得其意外、示給之段可及 上聽(肥前)外、恐々謹言、

朱力キ
慶安四年 三月廿八日

阿部對馬守
重次判

松平伊豆守
信綱判

松平薩摩守殿

373 忠興一流系図

右馬頭忠興 — 但馬守久雄

— 忠高

初久英・國久・堯英房・萬壽丸・又四郎・從五位下・飛彈守

慶安四年辛卯三月四日、於武州江戸櫻田誕生、

母 薩摩中將光久主女、

— 女子

母島津中務久茂女、

374 御文庫拾二番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、先月廿五日 公方様^ニ於^テ二丸自大納言様^{（家綱）}

御膳御献上、兩上様御機嫌能被成御座之趣相達、目出被存之由得其意外、將又其方儀去廿一日大坂迄被罷越之由承届^レ、入念候之段可達 上聞^レ、恐々謹言、

朱力キ
慶安四年 三月廿九日

阿部對馬守 重次判
松平伊豆守 信綱判

松平薩广守殿

375 光久公御譜中

大將軍家光公有^レ不豫、臥^レ錦床、終不^レ起、以^ニ慶安四年四月二十日^ニ薨、奉^レ號^ニ

大猷院殿^ニ、光久與^レ諸侯俱登^レ高城、奉^レ吊^レ之、

376 凶書頭久通譜中

慶安四年辛卯四月廿日

家光公薨、葬^ニ日光山^ニ、號^ニ大猷院殿^ニ、於^レ茲奉^ニ太守之命^ニ久通到^レ彼地、代^レ守五月九日拜^ニ大猷院殿尊靈前^ニ也、

377 御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在り

態令啓入^レ、然者 公方様此中長々之御不例被成御座^レ處ニ、一昨十九日重ク被成御發、昨晝薨御被遊^レ、寔為絶言語儀^ニ、雖然無替儀別^レ平安御座^レ間、可御心易^レ外、堀田加賀守様・阿部對馬守様・内田信濃殿・三好能登殿・久永内記殿薨御被成^レ、追付從 御城御下^レりて御供^ニあり、扱々哀成仕合難盡筆紙存^レ、就其雜說田舎々々と申儀及可在^レ之^レ間、萬事其御心得被成御国中之御仕置此時御座^レ、恐惶謹言、

朱力キ
慶安四年 卯月廿一日

町田勘解由 久則判
新納右衛門 久詮判
久頼判
嶋津筑前
嶋津圖書 久通判
參照スベシ、

三代家光慶安四年辛卯四月廿日
薨、享年四十七、号大猷院殿、

北郷佐渡殿
伊勢兵部殿
鎌田源左衛門殿

人々御中

封面ニアリ、名略ス

慶安四年卯月廿一日ノ状五月七日之朝飛脚持下候、
一 公方様薨御被遊之由候、

378 御文庫廿三番箱廿二卷中

敬白天爵靈社起請文前書之事

一 奉對 (家纏) 上様無別心不可存表裏事、

一 背 上意族雖有之、一切結徒黨間敷事、

一 被 仰出御法度以下聊不可申相背事、

右條々若於致違背者、

右之御誓紙者、慶安四年六月十八日之朝六ツ半時、阿部

豊後守殿(思秋)に光久様・久平様御父子御同前(綱久)に御出被成被遊

外、

但七枚之起請文ニあり、御父子様御神文銘々ニ者無御

座外、神文ツニ其與ニ御父子様御名有之外あり、

御同前ニ御判形被遊外、あて所ハ阿部豊後守殿一人

ニあり、

右ノ封面
起請文前書

379 十二番箱四十九卷中 光久公御譜中ニ在り

来廿五日以太刀目録御代替之御札有之外間、着長袴四時

分可有登城外、恐々謹言、

朱力キ
慶安四年 六月廿二日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

末紙ニ
松平薩摩守殿

慶安四年卯六月スリキレ参候、

光久公

380 御文庫廿番箱四拾七卷中

天爵靈社起請文前書事

一 奉對 光久様無別心御奉公可申上事、

一 自然之御時者、後生迄御供可申上事、

一 我等身上ニ被聞召掠儀外ハ、何時被遂御糺明可被下

事、

右條々於偽申上者、

牛王神文畧

慶安二年六月廿四日

塩津道悦判

末紙ニ左ノ如シ

天爵靈社起請文

塩津道悦 白敬

同年六月二十五日、同_ニ諸侯_ニ、_レ柳營、進_ニ獻御太刀
目錄一、奉_レ賀_ニ
家綱公襲封之儀一、

大廻船之上乗衆婦國_ハ間、以一書令啓達_リ、仍爰_ニ元上下
共_ニ替儀無御座_ハ間、可御心安_リ、當_ニ上様御繼目之御
祝儀昨日廿五日_ニ相濟申_リ、御大名衆・御小名衆迄如八
朔之御礼御太刀目錄にて御礼被仰上_リ、目出度儀と下_ニ
迄奉存_リ、可為御同意と令察_リ、將又爰_ニ元御證人衆之御
沙汰此節御代替_ニ付_ル御座_ハ、從此方被仰上置_ハ御兩人
之儀者、頃以御書立被仰入置_リ、其内種子嶋_{（忠時）}左近殿儀者
病者_ニ罷成_ハ間、子息三郎次郎殿可被仰付_リ、嶋津_{（忠庫）}兵庫
殿御事ハ最早中老之御事_ニハ間、御息又_{（久慈）}八郎殿へ可被仰
付旨被成御申_リ、是ハ急度相濟可申物音_ニハ、其外_ニ今
一人充御證人を被召置可然之段、去御方より御内證_ハ故、
嶋津安藝殿御息又_{（久慈）}七殿・圖書息又_{（久慈）}五郎・北郷佐渡殿子息
作左衛門殿右三人を三番替_ニ被仰付_ハ様こと御申上_リ、
定_ル同前_ニ可相濟_ハ、左_ハハ、當年暮より爰_ニ元へ可被為

相詰_リ、勿論兵庫殿御替_ニハ嶋津大膳殿可被成參上_リ、

今一人者嶋津又七殿可有參上由被仰出_リ、必定之儀者御
返事相究次第可申越_リ、先内_ニ之御用意尤_ニ存_リ、俄_ニ
ハ御調可難成_ハ間、御證人奉行衆へ被仰上置_ハ通皆_ニへ
被仰達可然_ハ、猶期後喜_リ、恐惶謹言、

町田勘解由 久則判
慶安四年 六月廿六日 新納右衛門 久註判

嶋津筑前 久頼判
嶋津圖書 久通判

鎌田源左衛門殿
伊勢兵部殿
北郷佐渡殿

人々御中

封而_ニ

六月廿六日之状七月十二日ニ白浜甚左衛門又内田十左衛門持

下候、

一当上様御繼目御祝儀之事、

一此方御證人之事、

加久藤慶所案文

尚く令申外、彼孫兵(稱)へもかしまへ罷越、通手形申請
外ハ、如肥後表之可罷帰由申外、

尊札令拜見外、然者肥後熊庄町孫兵衛今月始ニ其表ヲ相
通り、爰許湯田村之内樋ノ口門へ罷居外、伊主膳殿(伊地知重魁)官
弥右衛門所へ参り外、新町ノ早介所へ彼弥右衛門同心ニ
る参り外一夜罷居、小林へ罷越一夜泊り申外、又早介所
へ罷帰外、それ方三日過り外川内表親類見参に参由申外
る爰元罷立外、然處ニかしま比志嶋内記殿内、茅津正右
衛門殿方付状ヲ以、又々早介所へ参り外一夜泊り、又右
之正右衛門殿方其元甲斐佐左衛門殿へも付状被遣外ヲ持
参申、如其方被参り由早介申外、かしま町奉行衆方通手
形不参り間、御方不被差通之由御尤存外、此元も求方(球磨)
通用之者かしま方通手形不申請ものハ一人も不罷通之、
是又為御存外、恐惶、

慶安四卯 六月廿九日

新納結清
加賀様

参

三人慶

伊地知佐左衛門重清
白坂方京 尊林
西田和泉 時通

加久藤慶所案文

猶く御虫氣にて御滞留被遊り間、此方方も態老人差
上可申外得共速方之故、御無音青本意外、以上、

去廿九日御状六朔日ニ令拜見外、御虫氣未然く無御
座之由咲止ニ奉存外、就夫御帰宅も不被成之由御尤ニ
存事外、随分御養生被遊りて御帰宅奉存外、次者屋敷
方之儀皆く相濟為申事仕合奉存外、

一 爰元長江裏御諏訪祭米三斗五升ツ、前々方御物奉行所
之御手形を以、此表御藏入より毎年出申外、乍御太儀
當年之祭米之御手形御申被成可被下外、代官衆弟子丸
一 左敷、宇都長兵殿は右之御手形首尾被成り外ハ、可相
調外、

一 肥後熊庄町ノ孫兵衛と申者、先月始ニ大口ヲ罷通、御
内衆樋之口弥右衛門所へ参り處ニ、弥右衛門同心ニ
町ノ早介所は被参り、左り外小林へ弥右衛門前方引付
を以罷越一夜罷居外、又早介所へ参り、三日滞留申
川内表へ親類有之之由り外罷越外、是も弥右衛門引付
之由外、それ方鹿兒嶋比志嶋小内記殿内加悦正右衛門
殿所に参り、彼方方早介へ付状ヲ以、又早介所へ先月
廿七日ニ被参り、同廿八日ニ大口へ罷越外、是も加悦

正右衛門殿方甲斐佐左衛門殿へ付状ヲ以參_(新納)處ニ、新
忠清加州様方被仰越_(心脱カ)ハ、かしま町奉行衆之御手形不參_(心脱カ)
 間、如肥後御帰シ被成事難成之由_(心脱カ)ハ、大口町ノ宿
 主相付、爰元へ同廿九日ニ送届被成_(心脱カ)、就夫右孫兵衛
 殿へ早介前_(心脱カ)方老入相添加悦正右衛門殿迄申越_(心脱カ)、御公
 儀之御手形參_(心脱カ)ハ、大口表_(心脱カ)無吳儀可被召通之由_(心脱カ)
 間、正右衛門殿方町御奉行衆_(心脱カ)ハ手形御申被成、國元之
 様ニ御帰被成可然之由早介前_(心脱カ)方申遣_(心脱カ)、加州様方之御
 状為御覽進上申_(心脱カ)、巨細ハ弥右衛門へ御方ニて御尋可
 被聞召上_(心脱カ)、恐惶、

慶安四卯也

七月二日

伊 主膳様

三人

伊地知佐左衛門重治
白坂左京 尊林
西田和泉 時通

此三人ハ

是ハ加久藤地頭伊地知主膳重頼也、

在加久藤暖所

急度令啓_(心脱カ)、然者當作虫入ニ付_(心脱カ)、踊於有之者、田之近
 邊ニ被相調、遊山かましき躰無之様ニ可被仰付之由我
 等前_(心脱カ)方可申越之由、昨晚高崎惣右衛門殿方被仰越_(心脱カ)間、
 令申_(心脱カ)、聊無緩御心得尤_(心脱カ)、恐々謹言、

安四年卯 七月廿七日

新納加賀

忠清印

加久藤

小林

暖衆中

此状同日式之刻末ニ馬園田より參候、写則飯野へ持せ申候、

綱久公御譜中

慶安四年之秋、窄人丸橋忠彌・油井正雪等豫結レ黨、以
 七月二十九日、放_(心脱カ)火於塩焔庫藏、擾_(心脱カ)亂江府、謀_(心脱カ)其
 後掠_(心脱カ)取駿州久野城、本ノマ、同月二十三日其事既發覺而、正雪
 自_(心脱カ)殺駿州府中、忠彌捕_(心脱カ)江府、其外餘黨皆從_(心脱カ)レ之、

御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

態令啓_(心脱カ)、然者先月下句之比御當地一揆之企窄人共仕
 由風説有之_(心脱カ)、右之儀弥必定_(心脱カ)ニ大形百人餘程被召捕_(心脱カ)、
 今明日之間ニ御扱可有之由傳承_(心脱カ)、就夫其元へ雜説相聞
 得_(心脱カ)ハ、無御心元可有之_(心脱カ)、最早何之御心遣も無御座事
 ニ_(心脱カ)間、可御心安_(心脱カ)、併御心得可入儀ニ_(心脱カ)間、大形承傳
 外、右企之書物別紙ニ在之可被御覽届_(心脱カ)、将又岩切六右
 衛門便宜ニ被仰越_(心脱カ)段々、得其意申_(心脱カ)、并七月十六日之

飛脚(伏脱力)ニ由之礎ニ相屈得其意ナリ、後便ニ其首尾可申入り、
随者松平能登守殿御事も隠岐守様御預にて如伊豫被成御
座ナリ、右之儀及御氣遣之様も沙汰有之ナリ、実正之儀弥
知不申ナリ、猶期後音之節ナリ、恐惶謹言、

慶安四年 八月九日

町田勘解由 久則判

新納右衛門 久詮判

嶋津筑前 久頼判

嶋津圖書 久通判

北郷佐渡殿

伊勢兵部殿

鎌田源左衛門殿

人々御中

伊勢兵部殿

北郷佐渡殿

鎌田源左衛門殿

久通

参

嶋津圖書

嶋津筑前

一江戸一揆之企率人仕候風説之事、
一岩切六石工門便ニ被仰越候段、并
七月十六日之飛脚にて之状隨ニ

相屈候、其首尾後便ニ可被仰下候由候事、
松平能登殿御事隠岐守様御預候由候事、

新納右衛門

町田勘解由

今卷中 光久公御譜中ニ在リ

(01) 388 今度相知候悪黨者之覚書

一當御地ニ罷在り宰人丸橋忠弥・油井正雪・川原拾郎兵衛此外ニ四人、以上七人頭取仕、諸宰人をかたらい駿河久野(久能山)を攻取、彼地を居城ニ仕、駿河御城を攻取申答ニ申合、正雪ハ去ル廿三日ニ江戸を罷立、駿河へ先様罷越之由ナリ、忠弥・拾郎兵衛者當御地ニ居残、七月廿九日ニ塩焔倉ニ火をかけ、江戸中へも火を付焼払、御三人衆御老中火事ニ付御出外處を、面々之御屋敷へ手當を相定、弓鉄炮ニ由射申、従夫久野へ引取申手答ニ相定申外処ニ、松平甲斐守殿へ出入申宰人訴人仕、甲斐守殿より去ル廿三日ニ右之段被仰上ニ付、廿四日之未明ニ、石貝(石倉)十藏殿与力同心被召列、忠弥宿へ御越ニ而、則押入御搦被成外、其婦ニ川原十郎兵衛所へも御入外而親子共ニ御搦外、神尾備前守殿ハ當病故、与力同心ハ宿之外を取巻為申由外、大沢右近殿・永見新右衛門殿へ出入申宰人及訴人仕外へとも、甲斐守殿より

被仰上以後の御座外、

一右之同類何程可有御座未相知外、世間下之風聞ハ
 雜兵相添式三千も有之由外、大形被召捕分、別紙ニ書
 付申外、

一一味仕外窄人共ニ金銀を取せ外由外、此金銀之出所御
 老中表御不審ニ被思召外由外、

一正雪儀ニ付、駿府へ駒井右京殿、久野へ榊原越中殿為
 上使、七月廿三日夜被仰付被遣外、

一忠彌儀小姓之時分考、松平肥前守殿又内ニ奉公仕罷在
 外、其後江戸ニ久々罷居、十文字鑓之師匠を仕、方々
 ニ出入申者之由外、

一正雪考元來駿河油井之者ニ久々江戸ニ罷在、遍人之
 存外學者、其上楠木流之軍法者ニ在、正成傳之菊水之
 旗を請次程之者ニ在、就夫諸大名表大形被懸御目、
 殊ニ紀州様方知行千石ニ在可被召抱之由外へとも 上
 様を望、数年罷在由外、

一川原拾郎兵衛は、北之丸駿河様之古屋敷之内ニ百間倉
 御座外、其御倉ニ塩燔七千石御座外、右之下奉行仕者
 ニ在由故、火を付申談合仕外、

(の2)

以上

今度於駿河叛逆徒黨油井正雪召捕次第

一為御上使駒井右京殿 御奉書持參被成、七月廿五日昼
 之八過ニ着府被遊、何も御番衆中へ被仰渡考、今度油
 井正雪と申窄人本來駿河之者成カ、諸窄人又者在ニ所
 々之口聞者共ヲ催、駿府中へ火を付、久野山へ引籠可
 申旨とくと申合之由、江戸ニ在る同類之内より訴人出外、
 就夫久野代官榊原越中殿在江戸成ヲ俄ニ御暇被下、江
 尻迄右京殿同道外、江尻方直ニ越州ハ久野へ帰被申
 外、自然帰山無之内ニ彼徒黨共入山して越州を不入儀
 可有之外、左外ハ、戸田藤五郎殿久野へ加勢可被成
 外、其上ニ手張外ハ、秋田安房守殿よりも物頭ニ人数
 を被指添加勢被遣、扱安房守殿ハ相殘人数を以御城を
 守被成外へと、右京殿被仰渡外ニ付、則久野山へ加勢
 之人数割御座外、物頭四人、尤弓・鉄炮・鑓を割合、
 其外侍六人以上侍分十人、尤具足を持參答ニ相究、
 榊原殿より御一左右次第ニ罷立旨安房守殿被仰付外
 處ニ、無違儀帰山被成外旨、夜ニ入一左右有之ニ付、
 加勢不及遣外、然処ニ彼正雪上下十人計ニ在る府中七間
 町梅屋太郎右衛門と申者之所へ宿をかり、七月廿五日

之七ツ時分ニ落着仕旨亭主申出ル、就夫右京殿御指圖を以夜之八過ニ安房殿御人数者弓・鉄炮ハ不持、彼梅屋太郎右衛門町二方ちやうちん、又者辻々浦々こかゞりを焼、辻堅仕、扱兩わき町ハ大久保玄番殿・井戸新右衛門殿人数堅、表木戸口者落合小平次殿町同心を被召連、并ニ駒井右京殿も御兩所共ニきこミを着、手籠を御持被成り、扱内へ使を被立り段々者、此度江戸より手負之者走來りニ付、道中改り様こと 上使被遣り、就夫往來之面々疵を改り間、誰々之御内ニ何と申御人ニ御座り哉、乍卒尔落合小平次方迄御出り様こと被仰遣りへ者、内方侍一人出、返答仕り、紀伊大納言者ニ御座り間、少もあやしき者ニ御座り、手負御改御尤ニ存り、可罷出儀ニり共、路次方散々相煩平臥之躰ニ罷有り間、同者内へ見使を被入被下り様こと申り、其時小平次殿方被仰り者、御断尤ニ存り、然共大納言様御衆ニりへ者、一入夜中ニ見使を入事卒尔之至ニり、とかく明朝之儀ニ可仕と被仰りへ者、是非共内へ見使を被入りへかしと再三申りへとも、何かと被成無程夜御明シ被成り、扱夜明之後廿六日玄番殿・安房守殿彼場へ御出被成りへとも、右京殿達も被成御指

圖、押付御帰シ被成り、又小平次殿より度々使を請、以上九人大小をさし、諸はためき木戸口迄立出、疵無之通を見せ申り、此内一人者道中ニ御當座之日用取之由、一人者増上寺之坊主ニり、扱本人正雪も出り様こと達も被申其後正雪ハ四十歳内外之かつそう、中脇指を指、刀を持せ、杖ニすかり七八人を召連木戸之内ニ引へ、町奉行衆之兩年寄共ニ向る曰、とくニ罷出可懸御目を病氣ニおとろへり故、遅々仕り、是ハ如何成子細を以如此辻堅被成り哉、少もあやしき者ニ御座り、侍之はためき不申及可懸御目と存、漸罷出り、とかく大納言殿之ためニり間、大小も指置小平次殿へ參、可申分出申り、年寄共申ハ一段可然り間、早速小平次へ御越り可被仰聞と申りへ者、病氣之事ニり間、乗物ニ御參、したく可仕と中内へ入、其時内方余人出、正雪乗物ニ御罷出り間、木戸前之御辻堅御くつろけ被成りへと申、内へ入申、其節定申分ニ出か、扱者切テ出と心得、木戸口をくつろけ待居申りへとも致遅々り故、同心共一度ニ乱入、戸かへをこほし入りへ者、八畳敷之座敷ニ正雪を初、以上八人同枕ニ腹切相果申り、正雪枕本ニ捨置り書置、即写進申り、いかにも血

(03)

迄付^レ有^レ之本^ニ有^レ写^レ間、正本^ニハ、八人之内一人ハ正雪弟之由^リ、何も首塩^ニ漬、江戸へ参^リ由^リ、

書置

今度讒^ツ奸^ヲ有^リ之、私致叛逆^ノ之様^ニ被^レ入^レ間召段、尤角可有儀^ト奉^レ存^レ、併私^ニ躰^ヲ如何^ノ四代天下令乱破事可叶儀^ト無^レ之、然共天下之制法無道^トして上下困窮^ノ仕事心^ニ有^レ者誰か不悲^シ之哉、然^ニ松平能登守^{（定忠）}為^レ諫雖被^レ致^レ遁世、却^レ狂人と取^レ成、忠義之志空罷成事、天下之大ナル數、上様御為^レ不^レ宜儀^ニ存^レ、私不^レ肖^ニ御座^レへとも天下令^レ因窮處、讒^{（忠勝）}岐等為^レ令遠流少々偽謀^ノ催^レ人数令籠城、此旨段々天下御長久之政を奏申、其上^ニ如何様^ニも罷成可申と相謀^レへとも不^レ肖^ノ之志徒^ニ罷成^レ、紀伊大納言様之御名をかり不^レ申^レへ考、人数之かたらい難成故、蒙御扶持者と申、私儀誰人^ヲ扶持を申請者^ニ有^レ無^レ之、心底天之照覽此外無他御座^レ、申達事数多御座^レへとも時急故早々申残^レ、

七月廿六日 朝五ツ時

右正雪自害仕^レ枕本^ニ有^レ之書置

一正雪かたらい之人数江戸^ヲ御書付参、在^レ所^ニ有^レ被^レ召捕者ハ大百姓共之様^ニ承^レ、正雪元来ハ駿河油井殿

之筋と哉覽申^レ、兄弟當地宮か崎へ罷有^レを則被^レ召取^レ、江戸^ヲ今度弟を二人召連参、一人ハ一所^ニ切腹仕^レ、又一人考親之家^ニ直^ニ落着申由^リ、定^レ親類方かたらい^ノため^ニ越^レか^ト申事^ニ、其弟も被^レ召取^レ事、一同類共召捕只今専木馬^ノのせ同類を御尋被^レ成^レ、右之増上寺之出家不慮^ニ道連仕^レとちんじ申由^リ、同類之内何も金持共^ニ、米以下迄才覚仕^レ中^レ合^レ之由^リ、何も江尻・志水・久野邊之大百姓数多同類之様^ニ申成^レ、

一誰申哉覽風説^ニ、正雪乗物^ニ有^レ袋元罷着時、浅間宮見物仕と申、浅間へ参、後の山へのほり、駿府を見おろしさけすみ^レ、さて梅屋へ落申由^リ、七月廿九日迄^ニハ所々方々より落合、廿九日^ニ考必駿府中^ニ火のて上ケ、兩加番火事場へ御出之留守^ニ、小屋へ仕込武器をうはひ取、直^ニ久野へ引込^レきと手立仕^レ由^リ、殊^ニ久野へ之引入も有^レ之由^リ、それのミならず梅屋か座敷之内、又ハ入口^ニ繩を引はり、押込人数^ニけつまつかせ、又ハ首を引かける様^ニ色々^ノ之手立を仕置^レ之由^リ、

慶安四年辛卯八月上旬写焉

(04)

一揆徒黨之者召捕分

是八頭分 十文字鎧使、歳三十七

丸橋 忠 弥

同 塩碓御藏下奉行 半人

河原十郎兵衛

同 半人

長山六左衛門

藤堂平右衛門殿ニ罷在候 半人、則御預ケ

加藤長右衛門

宿上野浄光寺

半人

小川六左衛門

同し

齋藤九右衛門

宿牛込宝善寺

同し

金丸權左衛門

同し

土屋三郎兵衛

同し

岩切兵左衛門

宿銀町壱町め、ときや清左衛門 半人

栗山又左衛門

半人

鷺坂甚五兵衛

猪飼半左衛門より出候者

福嶋猪兵衛

注進ニ出候者、大沢右近殿より出候

松田 忠 兵衛

注進ニ出候者、弓原藤四郎肝煎

篠田 藤 右衛門

松平申遊殿家中より出候者

原田五郎左衛門

酒井河内殿家来原田左馬介弟

半 兵 衛

是ハ正雪ニ又左衛門ヲ引合候者
正雪ト同前ニ上方ヘ上リ申候

是ハ半兵衛樹藩是も罷上候

五 兵 衛

半兵衛事清 兵衛

宿不知

原見次郎右衛門

須田町市左衛門子鳥屋近所ニ
正雪宿上申候

金井半左衛門

一揆ノ頭道中油井之者

歳四十四
油井 正 雪

正雪弟
同 三左衛門

高木作兵衛

宇野九右衛門

熊谷六郎左衛門

今田少太夫

荒井清兵衛

吉ト申草履とり

右八人駿河ニ而致自害ケ、

此以前市ヶ谷田町甚五左衛門所ニ先月廿
六日迄居申候、唯今八増上寺切魂之光室
寺ニ居申候

三好宇右衛門

受宿近所寺屋敷ニて七月廿九日之晚自害
廿候、毛利長門殿御内吉川美濃守内二宮
三左衛門所ニ居申候、此ノ類之者松平千
代熊殿へ御預

熊谷三郎兵衛

宿十四間團淡六兵衛所ニ在之候、十年以前
ニ松浦肥前殿ヲ出候 半人、先月廿五日ニ
湯治之由候而欠落いたし候、とし五十程

吉田勘右衛門

宿新右町二町め伝四郎所ニ居申候、先月
廿四日之朝身上有付由ニて彌上リ申候

柴原又左衛門

同し

同 七郎兵衛

又左衛門子之由盛州程

同し

同 七郎兵衛

右之者町中ニ在之候ハ、
召運可參之由町中御
ふれ御座候

是ハ七月晦日ニ芝ニてとらへ申候
寺沢兵庫殿へ罷在候者

是ハ酒井内殿右筆ニて御座候、箱根
手形徒党之書付書申候、忠弥弟子

是ハ宮城三左衛門殿組御歩行之衆
忠弥兄ニて御座候

忠弥妹聳近藤登之介殿方ニも老入御座外、則御預ケ
被成外、

是ハ幸人ニて御座候、町ニ御預被成候
御横目猪鬣半左工門小男

天壽院殿御臺所方ニも兩人御座外、

増上寺所化老入御座外、

谷村惣兵衛

松田弥五八

金井半兵衛

平沢利弥

川嶋三右衛門

浅熊忠弥

杉無安

中嶋平右衛門

櫻井彦兵衛

加藤一郎右衛門

堀内藏助

正雪親類

正雪親
弥右衛門

正雪弟
弥兵衛

同弟
三七

同伯父
次左衛門

同従弟次左衛門下

与三郎

同母子
宮松

同母方之従弟
長八郎

正雪妹聳
長左衛門

正雪
母

弥右衛門
下女老入

同入
下男式人

(ママ)
次右衛門
女房

同入
娘老入

長八郎
母

江尻者
六兵衛

六兵衛宿
七兵衛

芝洗村
半左衛門

長沼村半左衛門聳
伊右衛門

芝洗村
弥兵衛

金谷より參候
次右衛門

八月四日

右之外ニも如何程も被召捕外ハんすれとも、先相知外
分如此外、

以上光久公御譜中ニ在リ

390 御文庫拾一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

將軍 宣下 勅使明十八日御對顔ハ間、着衣冠裝束五半

時分可有登城ハ、恐ク謹言、

朱力キ慶安四年 八月十七日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平薩广守殿

391 光久公御譜中

同年八月十八日

家綱公轉ニ任于征夷大將軍正二位内大臣兼右近衛大將、

淳和・奨學兩院別當・氏長者・馬寮御監也、光久衣冠束

帶而朝、同八月二十二日登レ營、獻ニ呈御太刀目録一、

ニ謁 嚴顔一、奉レ賀レ之也、

392 御文庫廿番箱四拾七卷中 光久公御譜中ニ在リ

一書令啓入ハ、然者先書ニも如申、弥當御地御静謐

御座ハ、

一將軍宣下去十八日ニ首尾能相調、江戸中目出度事耳ニ

御座ハ間、少も御心遣入間敷ハ、

將軍様御昇進之御官位

征夷大將軍 正二位内大臣

兼右近衛大將 淳和奨學兩院別當 氏長者 馬寮御監

一昨日 公家之御衆御馳走之御能御座ハ、御大名衆ハ無

御登城ハ、御國取之御衆よりハ折一箇御進上ハ、御大

名衆ニハ御継目之御振舞別各ニ可有之由風聞ハ、

一先便ニ被仰越ハ條數多ク御座ハ次第ニ御返事申ハ、岩

切六右衛門ニ被仰越ハ儀も、急度市來八右衛門被罷

下ハ間、其節可申下ハ、

一松崎采女方ニ承ハ通、慥ニ相達ハ、右之一儀も急度

御返事可申ハ、

一雨田兵次郎此中可差下ハへとも、世間雜説かましくハ

間、主からも被召置ハ可被下由被申ニ付留置申ハ、

最早何之子細も無之、彼一揆も相治ハ間差下ハ、右一

儀者彼人可為口達ハ間、不能細筆ハ、恐惶謹言、

朱力キ

慶安四年

八月廿一日

町田勘解由

久則判

新納右衛門
久詮判

嶋津筑前
久頼判

嶋津圖書
久通判

北郷 佐渡殿

伊勢 兵部殿

鎌田源左衛門殿

人々御中

封面ニ外名前ハ略ス

慶安四年十月四日ニ雨田兵次郎持下候、

一將軍様御名之事、

一公家衆御馳走之御能御座候事、

一岩切六右衛門殿ニテ被仰越候様々、市来八右衛門殿下向ニ可被仰下由候事、

393 綱久公御譜中

芳翰之旨令拜披外、如仰我等所息男誕生恰悦之段可有御

察候、為此等之祝詞至遠濤被差渡玉城、殊更太刀一腰・

馬一疋并数品被懸御意、誠以珍重々々欣入存候、猶期来

喜之節外、誠惶頓首、

朱力キ

慶安四年

八月廿一日

嶋津又三郎

(編久)

久平御判

謹上 中山王

394 光久公御譜中

芳墨令披閱候、如仰又三郎方江子息致生産欣然之至不過
之外、此等之為祝詞被差渡玉城、殊太刀一腰・馬一疋被
懸御意、誠幾久珍重存外、猶期後慶候、恐惶不宣、

朱力キ

慶安四年

八月廿一日

薩摩守光久御判

謹上 中山王

395

御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以息又三郎可有同道外、以上、

就 將軍 宣下之御祝儀、明日御能御振舞被仰付外間、

可罷出之旨 上意外、被存其趣辰之刻可有登城外、恐々

謹言、

朱力キ

慶安四年

九月四日

阿部豊後守

忠秋判

松平和泉守

乘壽判

松平伊豆守

信綱判

松平薩广守殿

光久公御譜中

覚写

從琉球江戸江被差上り御悔之使者之儀、大納言様御代替之使者同前ニ来年夏中當地へ上着り様、從江戸被仰下り間、如其可被申越旨、去ル三日以覚書申渡りへとも、今度又以松崎采女被仰下り者、御悔之使者ハ御代替之使者より先立此地へ可被罷上由り間、其通可被申越り、此使者ニハ進物なと入間敷とハ存りへとも、為用心ニり条、御靈前ニ可有獻上物とも以見合可有持参り、御代替之使者人数并路次楽・内楽其外進物等之儀、弥如先規ニと可被申越り、油断有間敷事、

但御悔之使者之儀、前ニ申渡り様ニ重キ人ハ入間敷通、弥申来り間、其心得ニり御代替之使者より先立、當地迄可被罷渡事、

一來春唐へ左右間船被差渡ニ付、書簡之宛所双方を兼り可被遣哉、從琉球之儀ニり間、三司官相談次第と申渡り處、右同前ニ被仰下り者、韃人方へ一通、大明方へ一通、書簡二通被調、片付り方へ状可被差出り□、

若又未片付りハ、何方ニ成とも船之着所勝手次第ニ申通り可然り、勿論後年之障ニ不成様ニ入念可被書由り、其段儘可被申越者也、

慶安四年九月十八日

鎌田源左衛門

北郷 佐渡

伊勢 兵部

阿多内膳殿

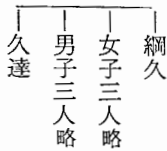
如右之被仰出り、書写今度指下申り、

九月廿日

阿多内膳

三司官衆

綱久公御譜中



初貞朝・虎三郎・市右衛門・内記・備後・豊前

慶安四年辛卯十月十五日誕生、母家之女房、

初雖、為ニ幕下之士伊勢兵庫貞輝之養嗣、寛文十二年

壬子春去三伊勢氏二而後、為三家臣佐多丹波久利之後嗣一、
改三久達一、

398 御文庫廿番箱四拾八卷中

天爵靈社起請文之事

一 數年存含罷在不及申上と存り得共、於今生為一言御約
束申上置り、我等事不思儀之仕合に被召出、御執立
迄にて誠御高恩之程、中々紙上難申盡候、殊更幼少よ
り至于今被免御心、御近習に被召仕り儀(マカ)播外聞忝儀今
生後生難盡報奉存候事、

一 御奉公御一代に存定候、責る御厚恩不致忘却之驗、千
々万々歳相終り已後者、乍恐御跡慕可申り事、

一 不依何色御為可惡と見立聞立りハ、縦雖為縁者・親
類、早速可致言上り、又ハ於身上被掠聞召儀ハ、

何時表被遂御糺明可被下候事、
右條々於偽申上者

牛王神文略
慶安二二年辛卯十月廿日

進上光久尊公

(四) 白尾金左衛門
國昌判

399 正文在大口田代氏

證文

高式石七斗式升三合九夕八才

右高田代諸右衛門知行有之之間、當毛より可有取納り、
(新納忠秀二殉死)

坪付者喫衆へ申理、可被請取者也、

慶安四年卯十一月十九日

田代次兵衛殿

400 御文庫拾二番箱五拾壹卷中

御札令拜見り、其方父子官位昇進に、口宣之奉書差
遣之り處、首尾能相調、忝被存り旨、得其意り、因茲、
為御礼被差越使者候、念之入り段、及上聴り、恐々謹
言、

慶安四年カ 十二月十八日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

光久
松平大隅守殿

401 綱久公御譜中

先比御當地騷動之儀有之由相達、鎌田藏人方迄被差越使者外、至遠路心入之段、別る令祝着外、雖然、弥平安之事外間、被致氣遣間敷外、委曲藏人より可申達外、恐く謹言、

朱力キ
慶安四年十二月十八日 綱久御判

伊勢兵部殿

402 光久公御譜中

慶安四年十二月二十五日、依_レ令登_レ營、奉_レ高命曰、光久宜下改_三薩摩守_二為_レ大隅守_上、且轉任左近衛權少將、同加_三冠適嗣又三郎久平_一、以補_二任從四位下侍從薩摩守_一、賜_三松平稱號及御諱字_二、號_レ綱久拜_三戴御腰物一腰_一、

403 正文在文庫

上卿 三條大納言

慶安四年十二月廿五日 宣旨

侍從源光久

宜任左近衛權少將

藏人左少辨藤原雅房奉

口 宣案

404 正文在文庫

從四位下行侍從源朝臣光久

從二位行權大納言藤原朝臣公富宣、奉

勅、件人宜令任左近衛權少將者、

慶安四年十二月廿五日大外記兼掃部頭造酒正直講中原

朝臣師定

405 綱久公御譜中

慶安四年辛卯十二月廿六日登_レ營
大將軍家綱公加_三冠久平_一、書_三御諱綱之字_上與_三松平稱號_一、押_三黑印_二而賜_レ之、號_三松平薩摩守綱久_一、叙_三侍從_一、任_三從四位下_一
從父光久例、以_二從四位下_一為_二初位_一也、

406 正文在文庫

綱

慶安四卯

十二月廿六日

家綱

松平薩摩守とのへ

印

正文在文庫

鳴津又三郎

宜為松平薩摩守

慶安四卯

十二月廿六日

家綱

印

慶安四年十二月廿六日

(天皇御覽)

無品中務卿智忠親王宣

從五位上中務大輔臣源朝臣通廉奉

中務少輔從五位上臣藤原朝臣祐直行

正二位行權大納言臣(德大寺)公信

從二位行權大納言臣(中略)通純

從二位行權大納言臣(四辻)公理

從二位行權大納言臣(三條)公富

從二位行權大納言臣(鶯尾)隆量

正三位行權大納言兼右近衛大將臣(廣司)房輔

從二位行權中納言臣(五條)為適

從二位行權中納言臣(山科)言總

從二位行權中納言臣(前關寺)共綱

從二位行權中納言臣(飛鳥井)雅章

正三位行權中納言臣(野宮)定逸

正三位行權中納言臣(三條西)實教

正三位行權中納言臣(久我)廣通

正三位行權中納言臣(中御門)宣順

正三位行權中納言臣(廣橋)綏光等言

正文在文庫

上卿 鷲尾大納言

慶安四年十二月廿六日 宣旨

從五位下源綱久

宜叙從四位下

藏人右小辨藤原資熙奉

口 宣案

正文在文庫

從五位下源朝臣綱久

右可從四位下

中務勝殘去殺陳善閉邪愛莊達邦、武功累代、宜加階級、

用光朝章、可依前件、主者施行、

正三位行權中納言臣(廣橋)綏光等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

慶安四年十二月廿六日

制可

月日辰時正五位上行大外記兼掃部頭造酒正直講中原

朝臣師定

右中辨 源房

關白從一位行左大臣朝臣

太政大臣關

右大臣正二位朝臣

內大臣正二位兼行左近衛大將朝臣

二品行兵部卿貞清親王

從三位下守兵部大輔雅廣

正四位上行右大辨俊廣

告從四位下源綱久奉

制書如右、符到奉行、

兵部少輔從五位下尚直



(天皇御璽)

大錄
少錄
少錄

慶安四年十二月廿六日

410 正文在文庫

從四位下源朝臣綱久

從二位行權大納言藤原朝臣隆量宣、奉

勅、件人宜令任侍從者、

慶安四年十二月廿六日大外記兼掃部頭造酒正直講中原

朝臣師定

411 正文在文庫

上卿 鷲尾大納言

慶安四年十二月廿六日 宣旨

源綱久

宜任侍從

藏人右小辨藤原資源奉

口 宣案

412 御文庫廿番箱四拾八卷中

綱久公御譜中ニ在リ
光久公御譜中ニ在リ

猶以御進上物之書立別紙進覽仕外、以上、

態令啓入外、然者一昨日從御老中御用御座外間、明日

太守様可被成御登城旨被仰出、昨日御登城外之處、久平様御元服之儀御承、今日首尾能相濟外、太守様御事者大隅守ニ御成、被任少將外、久平様御事者御宇御拜領ニて松平薩摩守綱久ニ被成御受領、御官位被任侍從外、其上御腰物御拜領外、誠以千秋万歳目出度歳暮奉存外、各可為御同前と察存外、尚年改諸慶可申加外、恐惶謹言、

朱力キ
慶安四年
十二月廿六日

町田勘解由
久則判

新納右衛門
久詮判

嶋津筑前
久頼判

嶋津圖書
久通判

北郷 佐 渡殿
伊勢 兵 部殿
鎌田源左衛門殿
人々御中

封面上ノ如シ
伊勢 兵 部殿

北郷 佐 渡殿
久通

鎌田源左衛門殿

慶安四年十二月廿六日江戸立
同五年正月十三日ニ
飛脚持下候、
一御官位之事、
嶋津圖書
新納右衛門

413 略御系図

慶安四年辛卯十二月廿六日 大將軍家綱公賜諱之字與稱號、號松平綱久、且任侍從兼薩摩守叙從四位下、

414 綱久公御譜中

慶安五年壬辰改三承歴一、

415 光久公御譜中

正文在文庫

為歳暮祝詞、小袖十到来欲覚候、委細酒井雅樂頭可述外也、

朱力キ
慶安四年
十二月廿七日
家綱
墨印

薩摩少將殿

(表紙)

光久公 自承應元年即慶安五年
綱久公 至同四年

追 舊記雜錄 卷五

御文庫廿三番箱廿二卷中

光久公御譜中ニ在リ

(忠題)

急度申越り、然者嶋津右馬頭殿御與方様去ル六日より被成御煩レ付レ付め、亀庵法印御療治レ処ニ、八日より御瘡ニ相究り、從夫駿河玄勝へ以相談御養生被申上り、其外御祈念御立願被成精誠レ得共、無其驗御氣色重り立、今昼被成御他界り、扱ク笑止千万為絶言語儀ニ御座り、町田助太郎殿落馬ニ被成遠行之由、飛札得其意笑止之至可申様無御座り、恐惶謹言、

朱力キ

慶安五年

正月十一日

町田勘解由

久則

(の1)417

御文庫廿番箱四拾八卷中

光久公御譜中ニ在リ

猶以佐多六郎兵衛・新納四郎右衛門・長田軍弥左衛門・岩元惣兵衛此四人今度下御屋敷重ミの在江戸衆之内ニ可被召上り、軍弥左衛門・惣兵衛兩人ハ此方へ罷在り、為御存知り、已上、

一書令啓達り、仍為歳暮之御祝儀、新納四郎右衛門被為指上り、則達 上聞候處ニ御大悦段被 仰出り、就其先々四郎右衛門指下申候、然者今日御證人替合之儀被仰出外、数年之御申分り処ニ相究目出度存り、最前者御證人

新納右衛門 久詮

嶋津筑前 久頼

嶋津圖書 久通

伊勢 兵部殿 (貞恩)

北郷 佐渡殿 (久恕)

鎌田源左衛門殿 (政有)

人々御中

封面ニ

辰ノ正スリキレ之状、同二月朔日之夜、飛スリキレ到來、嶋津右馬

頭殿與方様御死去之事、

右同卷中別紙

光久公御譜中に在り

之數も三組と御内證共々ニ付る、如其被仰入置り処、此度二人ツ、三替ニ被仰出珍重存り、併御賦相易、此度老嶋津大膳殿・種子嶋三郎次郎殿ニあり、當年方毎年三月中ニ参着り様ニと被仰渡り、種子嶋殿儀老儀ニあり間、嶋へ被仰渡往来之日數表御座り間、三月中ニハ罷成間敷外、兎角四月中敷五月初ニハ参着尤外、大膳殿事者此使下着次第追付被為立可然外、此旨早速可被仰渡り、巨細老条書口上ニ申達り、猶期後慶之時外、恐惶謹言、

朱力キ
慶安五年
正月廿四日

町田勘解由
久則判

新納右衛門
久詮判

嶋津筑前
久頼判

嶋津圖書
久通判

鎌田源左衛門殿

北郷佐渡殿

伊勢兵部殿

人々御中

418

御文庫廿番箱四拾八卷中

起請文前書之事

一今度御用之由被仰下被召寄りへとも、于今□角之様子不被仰聞奉待り事、

一何身上ニ聞召被掠儀外ハ、早々被遂御糺明り被下度

松平薩摩守家来證人

嶋津大膳(久忠) 自身

志番

種子嶋左近実子惣領三郎次郎(久時)

嶋津安藝実子惣領又七郎(久輝)

二番

嶋津圖書実子惣領又五郎(久世)

嶋津兵庫実子惣領又八郎(忠題)

三番

北郷佐渡実子惣領作左衛門(久加)

右六人にて二人ツ、三替(久替)

慶安五年
正月廿四日

奉存外事、

一乍恐 光久様万々年已後自然之時ハ、今生後生迄之御奉公可申上と数年存念、六七ヶ年已前被召仕衆へも咄置申外、諸人御存知之前ニ、成程大切ニ奉存罷有者之事ニ、

右之旨聞召被置外可被下外事、

右之條々於偽申者、

牛王神文略

慶安五年正月吉日

木脇民部左衛門判

本田氏家藏

祖父助之丞御奉公仕外段、

一 惟新様高麗江 御渡海之時、助之丞老鹿兎島江罷居候を御供被仰付罷渡候、慶長三年拾二月御引陣之時御供ニ直ニ罷上、同四年正月三日伏見江上着仕外事、
一 慶長四年庄内御弓箭ニ付、從 内府様為御使山口勘兵衛殿御下向候、為御案内者助之丞被召下外、拾二月廿八日ニ下着申外事、
一 慶長五年 龍伯様 (義久) 少將様御兩殿様之為御使又可罷上由被仰付外、于時申上外老旧冬罷上外時分、(忠臣) 惟新様方

助之丞之子勝吉御小姓ニ可召仕候条可指上由、被 仰

聞外、幸罷上儀ニ外条、召列申度由申上外得者可召列

通被 仰出外条、三月二日ニ打立、親子上洛仕外伏

見攻ニ逢申外、夫々頓而父子共ニ関ケ原江御供仕候事、

一 関ケ原御合戦、西國方敗軍ニ散々ニ罷成外、新納旅

庵・助之丞親子共ニ落人ニ罷成、京都へ罷上鞍馬江隠

居外処ニ能瀬殿・山口勘兵衛殿被差越候、三人共ニ

さかし出され、已ニ可被行斬罪由候つるか、去年山口

勘兵衛殿庄内江御下向之時、御案内者助之丞仕候故、

御見知ニ斬罪をなため、繩を被掛候、三人共ニ勘兵

衛殿御手前ニ被召置候、其後、内府様達 台聴、及御

糺明外様子ハ、今度之叛逆定 惟新首頭たるへく外、

存知之旨有様ニ可申上通被仰聞外、時ニ旅庵同前ニ申

上外者、惟新事前々、内府様不忘御懇志、伏見之城

ニ可差籠通到于鳥井彦右衛門殿・内藤弥次右衛門殿再

三雖申入り、始終無納得外、殊ニ御奉行衆方、稠御

催促外之条不及了箇、石田治部少輔方ニ被相加候段細

々申入候、申分細大被聞召入、其後旅庵・勝吉ハ為質、

勘兵衛殿御覚悟ニ助之丞老人無事御使として御國江

被差下外、中途通手形勘兵衛殿方被下候、同年拾月

廿五日ニ罷下、上方之様子具ニ雖申上^レ、被成御疑ニ付、神文仕候^ル指上候、其前書之案文具ニ書付^レ事、

天罰起請文事

一今度於上方、不慮ニ生捕ニ罷成、當國御喫之儀ニ付度、往返仕候、然者御家之御為可惡儀、内外共ニ曾以不申^レ、向後も申聞敷^レ、勿論京都ニ^ル計策之儀少も不被^レ 仰聞^レ、又、罷上候^ル計策之儀承候共、請付申聞敷候事、

一爰元御弓箭ニ罷成、自然上方ニ被召留、急ニ下向雖不罷成候、他之主人頼申聞敷候事、

一竜伯様 惟新様 少將様へ御奉公之外向後別心不可存候事、

右旨若於偽申上候者

一慶長六年鎌田出雲守殿被成上洛候時、助之丞事も罷上^レ、就其 少將様御直筆之御状出雲守殿^ニ被為給^レ、右之御状出雲守殿^方助之丞へ被下置^レ、如此御使仕致上下之間、勝吉事上方へ三ヶ年被召留候事、

一不慮之仕合ニ^ルとらハレと罷成、御無事之御使被仰付、御納得候^ル 少將様御上洛候處、御使申^レ筋目無相違目出度事濟、御國泰平ニ罷成候儀、至助之丞も其

420

御文庫廿番箱四拾八卷中

敬白 天罰靈社起請文之事

一今度大坂へ御船待ニ御逗留中之様子ニ付、被仰聞^レ

誠相頭大慶奉存候事、

一慶長六年為御使罷下^レ厥後、又 竜伯様 惟新様御兩殿様御使被仰付罷上候、御進上物者本城正宗・唐之釜・唐之御菓子等ニ^ル、於駿河府中、本多上野守殿御取成ニ^ル 内府様^ニ御目見得仕候、此時黄金壹枚・御帷子五ツ拝領仕候事、

右之通祖父助之丞盡粉骨雖御奉公仕^レ、無程親子共ニ相果申候、拙者事者幼稚にて前後ヲ不弁牒ニ^レ、祖父事一節

惟新様御近所ニ為可被召仕、帖佐^ニ被召移^レ、如斯無別心御奉公申上^レもの、末ニ^ル候處ニ、拙者無頼法ものにて不申達、永々外城ニ埋れ可罷居儀迷惑ニ奉存候条被達聞召、如本之鹿兒島^ニ被召移候様以御取成御披露偏ニ奉頼^レ、以上、

本田助之丞

慶安五年二月九日

儀御面ニ被成 御意ハ儀、身餘忝奉存ハ事、

御老中

一右之様子少も我等不存儀ハ故、曾以心中よりたくみハ
る不申散ハ、前廉こも 御前之御出合之儀を他言仕間

422 加久藤地頭仮屋案文留

敷由、誓紙を上置ハ間、常々其心得申儀ニハ事、

猶々休之進、達願之儀被仰越ハ、則申越ハ、進上申

一不新雖申上事ニハ、奉對 光久様不存別心御奉公可申

御状令拜見ハ、仍其御地ハ御越之已後不申入御無音心外

上ハ、自然於身上被掠御聞召儀共ハ、何時も被仰

之至ハ、(新納忠誓)加州様御氣分も彌々御快氣被遊ハ由被仰聞世

聞ハる可被下ハ、奉頼ハ事、

ハ、一段目出度奉存ハ、次ニ求廣ハ為使西五左衛門被遣

右之條々若於偽申上者、

ハ由承ハ間、即可申付之処ニ、昨日八ツ時分(楚)ニ

牛王神文略

塩官長介

被參、留守之儀ハ間、今日者早々可被罷帰ハ条可申付ハ、

慶安五壬辰曆三月吉日

塩官長介

將又出物皆濟并ニ御合力銀之儀被仰越ハ、随分情被入相

翁次判

究申ハ、未少々ツ、未進御座ハ、是も近日中ニ可相濟覺

末紙ニ天爵靈社起請文

塩官長介

悟ハ、猶期後音之時ハ、恐惶、

翁次敬白

421 光久公御譜中

慶安五辰四月四日

三人

正文在文庫

加久藤ノ暖役也
伊地知佐左衛門重清
西田和泉守時通
白坂左京藤林

態令啓候、

此詩大口伊主膳様
帶石伊地知也 御報

(爲御事)黄門様御十三年忌之為御香奠、銀子十枚・焼酒二壺

御靈前ハ進上申候、宜預御取成候、恐惶謹言、

右伊地知主膳正ハ新納加賀守忠清ニ男ニ而伊地知氏ノ子ニ入ル季通カ先祖也、

琉球國司

光久公御譜中

三月六日

尚質判

423

御香奠獻上之覺

一 三拾万石以上

白銀貳拾枚

一 拾万石より貳拾九万石迄

同十枚

一 五万石より九万石迄

同五枚

一 壹万石より四万九千石迄

同三枚

一 三拾万石以上之嫡子

同五枚

一 拾万石以上之嫡子

同三枚

一 九千石以下

或貳枚或壹枚

右之内侍従以上者日光^江以使者當四月廿日三佛堂^江御

香奠可為獻上之、四品以下者於^爰元東叡山本坊^江同日

可有獻上之外、以上、

朱力キ

慶安五年

光久公御譜中

覺

一 新御殿未出来^ハ、小書院^ニ御座^ハ様^ニ御意^ハ事、

一 御成可被成所安藝殿^(鳥津久樹)・筑後殿^(鎌田政勝)御家老中其外者無用之由

御意^ハ事、

一 御門外へ御差出之時、御供、御城之小番大番之内^ハ、

其時^ク之見合にて可被召列^ハ、

一 雲齋御国元迄御供、左^ハて可罷上由御意^ハ事、

一 向之嶋^(鹿兒島・檳島)西堂^ニ御狩可然由御意被成^ハ事、

一 鉄炮吟味之事并弓場事無用之由御意^ハ事、

一 黒葛原治部右衛門納戸、河上五兵衛奥^ニ詰衆、新納小

右衛門御代官、

右者四月十一日之晚御意被成^ハ事、

一 安藝守殿・筑後殿へ萬事可得御意由被仰出^ハ、藝州老

御事、節々御參被成、御供なども被成^ハり可然^ハ由^ハ

事、

一 獅子嶋^(出水郡)ニ^ハせこ十人計にて御狩可被成由御意^ハ事、

一 おこち・おやま御側ニ御奉公可被申由御意^ハ事、

一 福崎新二郎・赤松諸兵衛・宮之原筑兵衛奥方へ罷通御

用可承事、其外之御近所衆者奥へ遠慮可仕由^ハ事、

(繪見憑)

一吉野御馬追ニ老御のほり可被成由外、福山御馬追ニハ

(繪長憑)

御無用ニ由外事、

一盛市一官御用之時老可被召寄由外事、

一番衆賦之事、御老中へ可得御意由御意外事、

一御指圖之外御一門中御家老中御供被成間敷由外事、

右老四月十九日之晚御意被成外事、

一伊集院長右衛門事、今度被召列外、来春御上洛之時も

可被召列由外事、

朱力本

慶安五年

卯月廿日

(本文八五六号文并二同)

御文庫廿番箱四拾八卷中

光久公御譜中ニ在リ

急度令啓入外、然老今朝辰之刻

若御前様御男子被遊御誕生、乍早晚御安産誠以千秋万歳

日出度奉存外、就中 若御前様御機嫌能御座外間、可御

心易外、此等之旨為可申入飛札如斯御座外、恐惶謹言、

朱力本

慶安五年

卯月廿三日

町田勘解由

久則判

新納右衛門

久詮判

嶋津筑前
久頼判

嶋津圖書殿

伊勢兵部殿

北郷佐渡殿

人々御中

封内左ノ如シ

嶋津圖書殿

伊勢兵部殿

北郷佐渡殿

參

久頼

慶安五年四月廿三日之状

五月八日之晚飛脚持下候、

若御前様御誕生之由申来候、

嶋津筑前

新納右衛門

町田勘解由

光久公御譜中

慶安五壬辰四月二十八日 上使阿部豊後守忠秋來伸レ恩

旨云、光久早歸レ國矣、惠以ニ御拾百領・白銀千枚・御馬

一匹、而五月五日辭ニ江府、同六月十四日歸ニ著薩府、

家老島津筑前久頼也、即趨ニ家臣川上將監久將于東武、

獻ニ上羅紗十間並御樽肴一拜ニ謝焉、

御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々御供立之御記差下申下、 太守様爰元御發足之

日限来月五日ニ相究下、為御心得下、以上、

以飛札申下候、然者 太守様今日首尾能御暇被 仰出、

如例年御拾百・銀子千枚御拜領被成、御仕合無残所上下

目出度奉存下、其許可為御同意と早々申越候、御上使阿

部豊後守殿御出被成下、御當地御發足之日限ハ重る相究

次第大坂迄可申越下、先以為御心得如此ニ下、猶追々御

吉左右可申承下、恐惶謹言、

朱力キ

慶安五年

四月廿八日

鎌田源左衛門

政有判

新納右衛門

久詮判

嶋津筑前

久頼判

嶋津圖書殿

伊勢兵部殿

北郷佐渡殿

人々御中

封面ニ

一卯月廿八日御暇御給候事、一五月廿一日朝飛脚持下候事、

大樹將軍家綱尊君當代御連續永年普天同慶不過之候、謹

而差一价候、伸萬々大(柄力)之祝儀委細可宣祝候状、希以老

大人恩察達 尊聞惟幸、恐惶不備、

惟時慶安五年

壬辰五月二日

中山王

(尚賢力)
尚賢判

松平伊豆守殿

松平和泉守殿

阿部豊後守殿

光久公御譜中

正文在文庫

為端午之祝儀帷子単物数十到来恰覧下、猶酒井雅樂頭可

述下也、

朱力キ

慶安五年

五月三日

家綱
墨印

薩摩少將殿

光久公御譜中

慶安五年夏五月中山王尚質為奉賀ニ

家綱公躰立ニ以ニ北谷按司一為レ使節到ニ于薩府一、光久以レ

事稟レ執政、執政投レ奉書傳、レ嚴命曰、光久來年參觀之期琉球之使价可三携ニ來之一矣、

431 御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

謹ル捧愚書候、仍去夏當 公方様御即位之趣千秋萬歳幸甚々々、乍恐此等之御祝儀為可申上、北谷按司指上レ之間、萬端可應 尊意候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ 慶安五年 五月十日 琉球國司 尚質判

進上 光久尊公

432 光久公御譜中ニ在リ

態捧愚札候、抑去歳 羽林次將御昇進之旨奉承知候、誠以天下之美誉千祥萬喜恐悅不斜レ、仍為御祝言御太刀一腰・御馬一疋奉進上之候、猶餘者奉期來慶之節候、誠惶誠恐敬白、

朱力キ 慶安五年 五月十日 琉球國司 尚質判

進上 光久尊公

433 御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拝見レ、公方様少々御頭痛氣之趣相達、御様躰

被承度付ル被差越使者外、早速御快然、從一昨日御表江出御、伺公之面々御目見有之レ間、可御心安候、入念外之段可達 上聞外、恐々謹言、

朱力キ 慶安五年 五月廿二日 阿部豊後守 忠秋判

松平大隅守殿 松平和泉守 乘壽判

434 御文庫廿番箱四拾八卷中 御譜ニ無之

唯今從江戸申來外、去ル十六日戌之刻、俄ニ虎松様御煩被成ニ付ル、夜中種々御養生為被成由外へ共無其驗、同寅之下刻御遠行之由苦々敷儀、是非可申入様無御座奉絶言語外、

五月廿三日 嶋津筑前 判ナシ

北郷佐渡殿 伊勢兵部殿 嶋津圖書殿

末ニ 後ニ可被成御覽外、

慶安五年卯月廿三日御男子御誕生之事前ニ見エレハ、此書中 虎松様ニテ御天亡カト推考セラル、追考ヲ俟ソ、

十三番箱五十卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、公方様少々御頭痛氣被成御座外之処、早速御快然之儀相達、目出度被存之旨尤之事外、弥々御全快ニ切々御表ハ出御之御事外間可御心安外、入念之段可及 上聴外、恐々謹言、

宋力平 慶安五年 五月廿六日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

436 光久公御譜中

正文在文庫

一書令啓達外、然者昨昼為 上使多賀左近殿御出、薩州様ハ御鷹之雲雀御拜領ニ切外、誠ニ目出度仕合ニ奉存外、就夫從 薩州様以御書被仰上外間、此等之通 太守様可被達 御耳外、雲雀御拜領之刻、早晚以輕使御禮被仰上事各御存知之前ニ外、御書も從其元御調參外、彼是以其御心得被仰付尤御座外、猶期後音時外、恐惶謹言、

宋力平 慶安五年 七月九日 鎌田源左衛門 政有判

嶋津圖書殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

嶋津中務殿

嶋津筑前殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

人々御中

437 御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、公方様弥御機嫌被成御座外間可御心安外、將又今度首尾好御暇先月十六日帰国之由得其意外、因茲為御札被差越使者、羅沙十間并御樽肴被獻之外、右之趣遂披露外處、入念外段御満悦之御事外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

宋力平 慶安五年 七月廿七日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守

乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

御札令拜見ハ、公方様御氣色之御様躰被承度付ル被差越使者ハ、益御平安之御事ハ之間可御心安ク、随テ琉球布并御肴一種・焼酎二壺被獻ス之、遂披露ス之處、每事入念ハ段御機嫌能御座ハ、恐ク謹言、

朱力キ 慶安五年 八月七日

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

中山王尚質聞ニ

家光公薨御之訃音ニ、慶安五年夏以ニ使者欣武一奉レ唱レ之、使者到ニ于慶府一矣、光久以レ事告ニ執政乎江府一、以達ニ

家綱公聽ニ、同八月十日執政投ニ奉書於光久一令下無レ到ニ于東武一而歸中琉國上、

一筆令啓ハ、(家光)大猷院様就薨御、從琉球國差渡使价ハ之

由ハ、得其意ハ、右之通達 台聽候之處、遠堺之事ハ間、

當地不及參上ハ、其方被相心得、從其許帰國ハ之様ニ可申渡之旨被仰出ハ間、可被存其旨ハ、恐ク謹言、

朱力キ 慶安五年 八月十日

阿部豊後守重次判 (重次)

松平和泉守乘壽判

松平伊豆守信綱判

松平大隅守殿

兩通之御札令拜見ハ、去歲暮為御祝詞、呉服被獻之處、御當代始テ被成御内書、其以後端午御祝儀如御嘉例被差上之、是又御内書頂戴、各使者時服被下之、重疊忝被存之由得其意ハ、依之為御札被差越使者ハ、入念ハ之段及台聞ハ、恐ク謹言、

朱力キ 慶安五年 八月十一日

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守信綱判

松平大隅守殿

猶以細雨ハ共御礼可有之ハ、自然大雨ハ者相延可申ハ、已上、

松平大隅守殿

今度 右大臣御轉任為御祝儀、明廿二日以太刀目錄如年始御礼有之ハ、着烏帽子・直垂、五半時可有登城ハ、恐々謹言、

444 神社佛閣調

奉再興愛宕宮大權現精舎一字、

右造營意趣者大檀那藤原朝臣光久公并綱久公御息災延命云々略ス、

朱力半

慶安五年

八月廿一日

阿部豊後守忠秋判

慶安五年壬辰九月大吉日遷宮畢、

本願權大僧都法印般若院

松平和泉守乘壽判

遷宮導師法印重清

松平大隅守殿

奉行衆

443

猶以大雨ハ者不及登營ハ、已上、

嶋津(久通)圖書頭殿

嶋津(久頼)筑前守殿

北郷(久加)佐渡守殿

伊勢(貞昭)兵部少輔殿

新納(久慈)右衛門佐殿

町田(久則)勘解由次官殿

鎌田(政有)源左衛門尉殿

今度為御任官之御祝儀、明日御能被仰付ハ間、可有見物旨御意候、被存其趣辰刻登城尤ハ、恐々謹言、

阿部豊後守

忠秋判

八月晦日

松平和泉守

乘壽判

普請奉行

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

大工

五代喜左衛門尉殿

田尻次右衛門尉殿

長田納右衛門殿

繪師 寺田惣右衛門殿

右同 枝次清右衛門殿

彫物師 圖師源右衛門殿

かさり屋 中川唯右衛門殿

塗師歟虫付不知 善長坊

石切 与八左衛門

小工 染川喜兵衛殿

御犬之從馬場材木連衆次第不同

今縣廳ノ内也

桂久次郎殿

猿渡新助殿

堀弥八郎殿

鎌田源六殿

東郷大藏兵衛殿

矢野重介殿

平田新十郎殿

川野甚左衛門殿

黒葛原勝八殿

大山平七殿

稻津甚允殿

内田次右衛門殿

新原佐之介殿

貴嶋藤内殿

川俣長右衛門殿

是枝小平太殿

東郷長四郎殿

川崎隼人殿

野間勘兵衛殿

山元利右衛門殿

黒田志广之允殿

東郷吉左衛門殿

敷根茂兵衛殿

木藤宇左衛門殿

武 茂右衛門殿

野間藤左衛門殿

町田加右衛門殿

本田甚十郎殿

喜入勝兵衛殿

喜入十郎殿

伊藤為左衛門殿

新納二兵衛殿

岩切太兵衛殿

否笠市右衛門殿

吉村龍介殿

西之原長介殿

伊藤熊介殿

兎玉新兵衛殿

同名万菊殿

西之原傳右衛門殿

愛甲次左衛門殿

横山千介殿

丸尾喜右衛門殿

松田龍右衛門殿

松田加左衛門殿

同名勘十郎殿

山田加右衛門殿

宮之原助右衛門殿

田之上宰相殿

川崎龜千代殿

別府久左衛門殿

澁谷四郎助殿

右田清吉殿

黒葛原三左衛門殿

肥後長次郎殿

同名弥右衛門殿

川越市左衛門殿

別木源太郎殿

伊東佐平次殿

川野久兵衛殿

川上六郎次郎殿

川村帶刀長殿

塚田長左衛門殿

宮之原權左衛門殿

田之上藤兵衛殿

佐竹源左衛門殿

酒匂長介殿

宮里佐五右衛門殿

鎌田弥右衛門殿

山田久左衛門殿

折田六左衛門殿

竹迫弥兵衛殿

伊十院源十郎殿

高崎千介殿

平田次郎右衛門殿

額娃新右衛門殿

杉山甚介殿

宮原助右衛門殿

大田又右衛門殿

貴嶋内記殿

佐竹源八郎殿

津留猪右衛門殿

鎌田孝右衛門殿

伊東勝右衛門殿

永江勤左衛門殿

高野治左衛門殿

相良千兵衛殿

邊見九介殿

貴嶋甚右衛門殿

毛利為右衛門殿

竹之内三右衛門殿

本田治介殿

伊東長松殿

山口弥平兵衛殿

関 雅樂介殿

弁官彦岐介殿

浦川長三郎殿

中江長十郎殿

谷山大学介殿

長田藤右衛門殿

津曲清兵衛殿

宮里弥太右衛門殿

藺牟田宮内左衛門殿

川上新左衛門殿

田中孝右衛門殿

伊尻長次郎殿

川上長次郎殿

上田勝右衛門殿

村田綱左衛門殿

西之原利右衛門殿

本田益千代殿

肝付早右衛門殿

445

光久公御譜中

預御札細々令得其意、如承手前被任少將、仕合無殘所
満足不過之、此旨其地へ相聞得、為祝儀御太刀一腰・
御馬一疋被懸御意、欣悦之至不知謝所、當使者可有
演説之間閣筆、恐惶謹言、

朱力キ
慶安五年

九月五日

琉球國司

御報

松平大隅守

光久御判

伊東弥右衛門殿

伊地知傳右衛門殿

皿良右馬介殿

穰所助九郎殿

同名兵吉殿

津廻太右衛門殿

木脇六郎殿

川村与一左衛門殿

鎌田弥八殿

以下由付二而不知、

446

光久公御譜中

今茲九月十八日改慶安為承應元、

447

綱久公御譜中

慶安五年壬辰九月十八日、

今上皇帝勅而元改承應年號所レ出二皇帝一也非二于吾島津家之元一今記二譜端一者為二後來考校一下働レ之

448

光久公御譜中

去歲夏之比、前

將軍様御逝去之御淺猿為可被仰上、使節欣武到此地、令
渡楫之事尤大儀之至、委曲従家老共可申入之間不克詳
外、恐々謹言、

朱力キ
承應元年

九月十九日

大隅守光久御判

謹上、琉球國司

449

御文庫拾三番箱五拾卷中

光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、為端午之御祝儀時服被獻之處、被成御内
書忝被存由得其意、入念、段可及、上聞候、恐々謹言、

朱力キ
承應元年

九月廿三日

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

450 御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

為家内平座御祝儀御使札欣然之至存リ、誠遠路御心入之

段難申謝リ、猶期後音之時リ、恐々謹言、

^{朱力キ}承應元年 十月十四日 尾張宰相 光義判

薩摩少將殿 御報

451 十三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以琉球之使者参上リ節、道中諸事之儀、如此以

前相替儀有之間敷リ間、可被得其意リ、

一筆令啓候、就御代替從琉球國差渡之リ使价其國江到着
之由達 台聞候之處、来年其方參勤之節、可召列之旨御

意リ間、可被得其意リ、恐々謹言、

^{朱力キ}承應元年 十月十六日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

452 御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見リ、去比 千代姫君御方御平座、若子降誕之

儀相達、珍重之旨得其意リ、因茲被差越使者リ、入念リ

之段及 上聴候、恐々謹言、

^{朱力キ}承應元年 十月十六日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

453 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、琉球國之使者從其許可致帰帆之旨、最前

以奉書相達リ趣被得其意之由承屈リ、依之被差越使者リ、

入念リ之段可及 高聴リ、恐々謹言、

^{朱力キ}承應元年 十一月五日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

454 御文庫拾三番箱五拾卷卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、今度年号改之儀相達珍重之旨得其意存

外、入念預示之趣可及 上聴外、恐々謹言、

^{朱力キ} 承應元年 十二月朔日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乗壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

455 御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々 隅州様口宣之写持来外、飛脚今月朔日之晚ニ

致到着、御状之趣具令得其意外、以上、

急度以飛脚令啓上外、然者

公方様之御懷様此中久々御煩由外處、一昨昼被成御遠行

候、就其御在江戸之御大名衆昨朝御登城御座外、御在國

之御衆へも皆々被申下由外間用飛札候、從御國も早々御

使者被成進上、併肝付半兵衛近日此地へ參着之由傳承

外、年内之御使者最早嶋津豊前迄ニ相濟申外、半兵衛

八年明二月始比ニ御使早晚被成進上候間、其迄留置可申

と存外處、右之御悔之御使者ニ重過外へとも差出可申と

致談合外、万一半兵衛儀不被召上外ハ、物頭程之御使

早速被仰付肝要御座外、勿論今度之御使者半兵衛ニ相

濟外ハ、來春之御使老人此月末正月二日三日比ニ可被

召上外、當年ハ御使間もなく外間、御供立之内ニ可被

仰付外哉、自是不及申外へとも存寄之通如此外、恐惶謹

言、

^{朱力キ} 承應元年 十二月四日

鎌田源左衛門 政有判

新納右衛門 久詮判

町田勘解由殿

北郷佐渡殿

伊勢兵部殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

人々御中

本ノ封面ニ 名略又

承應元年十二月四日ノ状同十二月廿四日ニ飛脚持下候、

一公方様御懷様御通行之事、

國元之蜜柑被獻之、遂披露候之處一段之御仕合、恐
々謹言、

朱力キ
承應元年 十二月九日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

正文在文庫

御札令拜見、其方父子官位昇進ニ付、口宣之奉書差遣
之、首尾能相調忝被存旨得其意、因茲為御札被差
越使者候、念之入り段及 上聴、恐々謹言、

朱力キ
承應元年 十二月十八日

阿部豊後守
忠秋判

松平和泉守
乘壽判

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

其方事来年琉球人召連參勤時分之儀違 上聞候之處、如
此以前四月其地登足可致參府之旨被 仰出、可被得其
意、恐々謹言、

朱力キ
承應元年 十二月十八日

阿部豊後守
忠秋判

松平和泉守
乘壽判

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

其國之蜜柑被差上之候、遂披露之處一段之御仕合、
恐々謹言、

朱力キ
承應元年 十二月廿四日

阿部豊後守
忠秋判

松平和泉守
乘壽判

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

(補入)
覚

一従前、御任申上り嘯役之儀、此節御聞可被成由り、先以忝奉存り、然者愚息權左衛門^(右 奥)へ嘯役被仰付り、尤御意次第御請可申上儀、御座り得共、若輩ハとても罷成間敷存り、其故者出水之儀ハ廣所なる種々口能有儀共多御座り、就中御國堺海陸共ニ他國之出入毎々御座り、無調法之儀共りへハ相役人迄も為ニ罷成間敷存り条、被聞り可被下儀偏ニ奉頼り事、

一拙者親事慶長五庚子之年、蒲生方當所に罷移、即嘯役被仰付り、折角御城取最中之時分、慶長十九甲寅之年迄十五ヶ年嘯役仕り、其年九月親相果申り、次卯之年我等へ嘯役被仰付、當年迄卅九ヶ年嘯役相勤申り、親以来方ハ五拾四ヶ年嘯役仕り、誰人にてもケ様ニハ御座間敷存り、前々相役之衆ハ皆くつふれ入被申り、諸人存之前ニり、ケ様ニ御座り条、質合^(替也)にも被仰付被下りへかしと存り事、

一次手を以申上り、我等事三男ニ罷有り処ニ可被召仕由御座りニ付、十三歳にて高麗へ罷渡、於泗川 黄門様御側へ夜白御奉公仕り、兄休兵衛事高麗御曳陣之刻、惟新様致御供、なむ^(南 徳)はい口ニおゐて番舩ニ懸合廿一歳

にて戦死仕り、中兄甚六事も

惟新様御小姓ニ致在京、伏見城責、慶長五庚子八月朔日之朝夜中ニ同心衆六七人にて城門ニ付り處ニ、石打ニ相申りへ共、具足上ニ痛不申、帖佐衆山崎助右衛門など見次被申退為被申由り、其より小宿へ罷帰追付仕寄ニ罷成、又其六七人之衆責入、甚六事十八歳にて戦仕り、左様りちと問御座りる方、惣人数被相掛、城被召取由り、我等事鹿兒島へ御奉公申りへ共、兄共相果りニ付、親前方御理申上、出水へ召寄、此躰ニ外城ニ罷居り故、兄共之御奉公も徒ニ罷成迷惑ニ存り事、

右之趣誠恐入り得共其有躰之儀申上り、拙者事ハ老仕り間、權左衛門儀萬事奉頼り、以上、
承應二年癸巳正月十二日 伊藤志岐入道^(箱忠)

山田民部様^(有榮) (花押No.5)

461 御文庫拾三番箱五拾卷中 御譜中ニ在り

御札令拝見り、如承改年之御慶珍重り、公方様弥御機嫌能成御座り之間可御心安り、右之為御祝儀以使者御看三種・御樽ニ荷被獻之候、遂披露り之処

入念^レ段御滿悅之御事^ハ、恐^ク謹言、

宋カキ
承應二年 二月十五日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

462 御譜中ニ在リ

御鷹之鶴拜領^ハ間、以宿次差越^レ之^ハ、委曲從息^{（彌久）}薩^{（久）}守可被相違^ハ、恐^ク謹言、

宋カキ
承應二年 二月廿一日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

463 光久公御譜中

承應二癸巳二月二十一日給^ニ御鷹之鶴一隻、執政添以^ニ奉書^ニ並令^レ驛路而送^ニ之薩州^一也、

464 御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶^ク御供立琉球衆立之人數賦、無申迄^ハへとも、早^ク可被遣^ハ、宿賦等前以可申付置^ハ、為御存^ハ、將又浦之介事俄^ニ御鶴^ニ相付差下^ハ、道具等此方へ召置^ハ間、追付可被為召上^ハ、以上、

一書令啓入候、然^ル御鷹之鶴被成御拜領候、先以目出度奉存^ハ、如早晚、松平伊豆守殿より以御手紙留守居衆一人可罷出旨被仰渡^ハ間、今朝源左衛門、三雲太郎左衛門召連伊豆守殿へ致抵候、御拜領之鶴并御奉書、宿次之御手形請取申^ハ、則和田浦之介相付差上申^ハ、御當代始^ル之儀^ニ御座候間、別^ル御冥加之至、可然様可被達 上聞候、乍不及申上、御札之御使者如前^ク無御延引可被仰付と奉存^ハ、猶期後慶^ハ、恐^ク謹言、

宋カキ
承應二年 二月廿一日

鎌田源左衛門 政有判

新納右衛門 久詮判

鳴津圖書殿

鳴津筑前殿

北郷佐渡殿

伊勢兵部殿

町田勘解由殿
人々御中

末ノ封面ニ 名ハ略ス
承應二年巳三月七日和田浦之介持下、
鶴御拝領之付状也、

465
御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々別ニ相替儀無御座外、委細者浦之介可申達外、
以上、

追る致啓達外、

一 今度御鷹之鶴御拝領之御衆松平越後守殿・松平新太郎殿・松平相摸守殿・松平安藝守殿・松平土左守殿・鍋嶋信濃殿・小松中納言殿・殿様以上八人御同前之由外、就其御札使之儀、御並之御衆留守居へ三雲太郎左被聞合外へハ右御札使之儀、いつも物頭を以被仰上外、此度も其道ニ被申越由外間、此方之儀及物頭ニ被仰付可然由外、尤以上使御拝領之刻者御兄弟衆其外おもき御札使ニ由外ハんと被申外、
一 朝倉ニ左衛門殿・多賀左近殿去ル十八日ニ爰許被為立、肥後へ御下外事、

一 隠州様當秋迄御在國之由被仰出外通承及外、右之段為御心得申外、恐惶謹言、

兼田源左衛門 政有判
新納右衛門 久詮判
二月廿一日

町田勘解由殿

北郷佐渡殿

鳴津筑前殿

伊勢兵部殿

鳴津圖書殿

人々御中

末ノ封面ニ
承應二年巳三月七日和田浦之介持下事、

466
御文庫拾三番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、當四月參勤之節琉球人召連可有參府之旨、最前以奉書相達外儀被承届外由得其意外、依之被差越使者被入念外段及 上聴外、恐々謹言、

阿部豊後守 忠秋判
二月廿二日

松平和泉守 乘壽判

松平大隅守殿

松平伊豆守
信綱判

467 十三番箱五十一卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、公方様御機嫌之御様躰被相何度付^ル被差越使者^レ、益御勇健被成御座^レ間可御心安候、将又御肴一種被献^レ之^レ、右之趣遂披露^レ之處一段之御仕合^レ、恐^ク謹言、

^{朱力^キ} 承應二年 三月廿六日 阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

468 御文庫拾三番箱五拾壹卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様御機嫌能去二月三日御表御寝初之儀相達目出度被存^レ由得其意^レ、依之被差越使者^レ、入念^レ之段可及 上聞^レ、恐^ク謹言、

^{朱力^キ} 承應二年 四月六日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判
松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

469 十三番箱五十一卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、今度參勤之節琉球之使者北谷王子召連、參府可有之處、彼使者相煩參上難成^ニ付^ル、右同位之者差渡^レ椽^ニと以早船琉球國^ニ被申遣^レ由得其意候、其内右之使者氣色得快氣^レ者可被相連^レ、於可然^ク其方儀者當月中、先其元可有發足之旨、示給之通尤之儀^ニ、入念^レ之段及 上聽^レ、恐^ク謹言、

^{朱力^キ} 承應二年 四月九日 阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判
松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

470 御文庫拾三番箱五拾壹卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、參勤之節從者之員數 大猷院様御代如被仰出^レ減少有之^ル、被相列可然旨留守居方迄傳^レ之^レ付^ル

被得其意外由、示預之趣承届外、恐く謹言、

朱カキ
承應二年 四月九日

阿部豊後守
忠秋判

松平和泉守
乘壽判

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

471 光久公御譜中

奉レ賀ニ

家綱公躰立ニ、去年所レ獻之琉球使者北谷按司、罹ニ病ニ於
魔府一、以故光久飛ニ使船ヲ于琉球ニ、召ニ代之使一、以ニ海
路遼遠ニ故使未レ到、光久不能レ如ニ携之一、同年四月十
七日光久發レ魔城參覲、家老伊勢兵部貞昭從レ之、六月二
十一日到ニ著乎江戸一、同二十三日 上使松平和泉守乘壽
来勞レ之也矣、同二十五日登レ城奉レ謁ニ見
家綱公ニ、獻ニ上御太刀一腰・御馬代白銀五百枚・狸々皮
十間・羅紗十間一也、其後進ニ獻于御馬一疋一矣、家老貞
昭亦奉レ拜ニ謁
將軍家ニ、進ニ上于御太刀・馬代・御時服三領一也、

472 十三番箱五十一卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拝見外、御鷹之齶拝領忝被存為御札被差越使者、
御看一種被獻之外、遂披露外処一段之御仕合外、恐く謹
言、

朱カキ
承應二年 四月十九日

阿部豊後守
忠秋判

松平和泉守
乘壽判

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

473 御文庫拾三番箱五拾壹卷中 御譜中ニ無之

今度就 (家光) 大猷院様御三回忌之御法事、為名代被差越使者
外、頓る可為參府外、其節御暇被申上、日光參詣可有之
候之間、此度御香燭不及獻上之外、御法事打續天氣好首
尾無残所相濟候之間可被御心安外、念之入外段達 上聞
外、恐く謹言、

承應三年ナルヘシ
四月廿一日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

就 大猷院様御三回忌輕罪之輩被成御赦免_レ、然者於諸國在_レ所_レ存其旨可放免之旨被 仰出_レ、雖不及申_レ此節_レ間、大科之外者被赦之尤_レ、恐_レ謹言、

四月廿二日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

就 大猷院様御三回忌輕罪之輩被成御赦免_レ、然者於諸國在_レ所_レ存其趣可放免之旨被 仰出_レ、雖不及申_レ此節_レ間、大科之外者被赦之尤_レ、恐_レ謹言、

^{朱力キ} 承應二年 四月廿二日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

御札令拜見_レ、公方様倍御機嫌能被成御座_レ間、可御心安_レ、將又今度日光御法事首尾能相濟珍被存之由承届_レ、次其方儀為參勤去四月十七日國元發足雖有之、海上順風依無之遲引之由得其意_レ、就其被差越使者_レ、入念_レ段可及 台聽_レ、恐_レ謹言、

^{朱力キ} 承應二年 六月十四日

阿部豊後守忠秋判

松平和泉守乘壽判

松平伊豆守信綱判

松平大隅守殿

明廿五日參勤之 御目見可有之_レ間、四時過御登城尤_レ、恐_レ謹言、

^{朱力キ} 承應二年 六月廿四日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

光久公御譜中

写 琉球人従大坂江戸迄泊所并昼休之所

- 一 大坂泊
- 一 伏見泊
- 一 石部泊
- 一 関地藏泊
- 一 四日市泊
- 一 熱田泊
- 一 赤坂泊
- 一 濱松泊
- 一 金谷泊
- 一 江尻泊
- 一 三嶋泊
- 一 小田原泊
- 一 藤沢泊
- 一 江戸迄泊
- 一 草津昼
- 一 土山昼
- 一 庄野昼
- 一 桑名昼
- 一 岡崎昼
- 一 荒井新懸
- 一 袋井昼
- 一 岡部昼
- 一 吉原昼
- 一 箱根昼
- 一 大磯昼
- 一 神奈川昼

五年以前丑年琉球人来朝之時、此書立之所、相泊
 外、此度も此通可然外哉、御存儀外ハ、隨其觸状可
 遣之外、以上、

宋力キ 承應二年 閏六月十二日

松平大隅守殿

阿部豊後守

光久公御譜中

正文在文庫

猶以大雨外老不及登宮外、已上、

今度為御任官之御祝儀、明日御能被仰付外間、可有見物
 旨 御意外、被存其趣辰刻登城外、恐々謹言、

朱力キ 承應二年 八月晦日

阿部豊後守 忠秋判

松平和泉守 乘壽判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

光久公御譜中

與頭可致覺悟條々

一 與中へ野心不忠之者可有之時老、早々可被致言上外、
 若與頭油断ニ而於不被申上老、與頭并談合衆可為同意

之心底之事、

一天下國家相定大禁之外、當 御代ニ被 仰出諸御法度并每度被 仰出候条目、謹可被相守之、右之内若不慮ニ相背輩者、或科番・科普請、或科物・寺領等之儀、以沙汰之上可被申付、勿論背大禁輩ハ可被處嚴科事、

一吉利支旦宗・一向宗於有之者致糺明言上可被申事、

一與中へ喧嘩并口事篇出合外者、早速寄合致談合可被相濟事、

付 口事決断之後經日月、出後之證文などを捧、訴訟

申出人雖有之、一旦衆議決断ニ可為相濟儀、被詰

付間敷事、

一口事篇并訴訟之儀、老中与力ニ可内證人之停止外常式之用段者可為各別事、

一御奉公方被 仰付外刻、構虛病或致難澁之族者、以談

合可被致言上外、外城へ可被召移事、

一與中於緩者與頭談合衆可為越度事、

與之衆へ可被申渡條々、

一尙與之衆與頭之下知相背間敷候、尤御奉公方致難澁輩

於有之者、致其沙汰相應之科可申付事、

一御出陳、或在江戸、或狩等可被仰付時、吳儀被申間敷事、

一連判ニ可何篇申出輩御家御代々堅被禁止儀不新外へ共、猶以不相替御政道之旨諸士下々ニ至迄可相心得事、

一喧嘩口論并口事篇出合外者與頭へ早々可申出、聊致遅々間敷事、

一諸士御改易其外罪科人擲捕御誅伐之刻、非御差圖人其場へ被參間敷候、

付 蒙御勘氣候衆、見舞音信可為停止事、

一火事上方角ニ可有之刻ハ下方之諸士御城口可被罷出、

又下方へ可有之時者上方之衆御城へ可被罷出、無執親

類之所へ火事出来外者可為各別事、

一訴訟其外申分之儀、與頭へ相付、可致披露、若不用其旨人於有之者可有其沙汰事、

承應貳年九月三日

481 光久公御譜中

一北郷佐渡病氣、其上世伴作左衛門證人役相勤ニ付、久々罷出外、然處今度作左衛門證人御免外、殊病者々

亦當分御奉公不相勤外、就其佐渡功者之亦も有之、
只今左様成衆無之外間、御礼日其間にも折節可致登城
外、定年罷寄病者之亦外間、御断可被申外へ共、右之
思召入之被 仰出外間、必被罷出外様之可被 仰渡
外、

朱力平
承應二年巳九月廿三日

光久公御譜中

感懷樂、偶綴古韻一章以贈馬氏國頭王子正則焉、
今日良會宴、娛樂雖具陳、弄箏奮逸響、令德弦歌清、識
曲聽其真、一指指應法、一聲々爽神、貌仙目冥冥、秋風
吹衣襟、亦認官徵律、齋心同所願、含意但未伸、人生寄
一世、覽物頌幽景、酌盡自歎歎、盛酒置君前、欲君千萬
年、

從四位下少將兼薩摩行大隅守源朝臣光久撰
承應二年孟冬初四

光久公御譜中

琉球中山王尚質所獻之使者國頭按司正則代ニ北谷按司ニ、
從薩州來、俾下家臣伊集院源助久朝ニ監ニ琉使之行裝ニ海

陸警中衛焉上、九月二十日到ニ于江都ニ、光久聞ニ之于執
政ニ、同二十八日光久携之謂ニ
將軍家綱公ニ、恩旨惠給均レ前例矣、同十月十二日光久帥
球人發ニ江戸邸ニ、同十六日登ニ日光山ニ 此行亦久朝
監琉使之事 敬ニ拜
大神君之廟ニ而同二十日歸ニ于江戸ニ也、同月二十六日
奉レ令從ニ球使登レ城、球人賜レ暇也、光久令ニ球人歸ニ
于薩府ニ、久朝司レ事如レ始、十二月歸着也、

御文庫拾三番箱五拾一卷中 光久公御譜中ニ在リ

一筆令啓達外、道中無恙登山外哉、今度琉球人就參詣、
御苦勞察入存外、於其元首尾能可御座有外、御用之儀外
ハ、我等留守居之方へ可被仰付外、書音之驗迄一箱令進
覽外、猶御帰省之節可申承外、恐惶謹言、

朱力平
承應二年十月十一日 毗沙門堂門跡 判

松平大隅守殿

松平大隅守殿

公海

光久公御譜中

一筆致啓達候、今度日光江琉球人就參詣、御登山被成候

由、日光御門跡聞食寒天之時分別御大儀千万被思食候、
隨而輕少之至御座外得共、甘干壹箱被進之候、此等之趣
相意得可申入旨御座候、恐惶謹言、

六角李頭

スリキレ(盛野)判

朱カキ
承應二年 十月十二日

松平大隅守様

486 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、琉球人去十六日日光參詣天氣迄能相濟、

(下野)則今市迄帰參、於其方大慶被存之由、得其意外、入念示

給之趣及 上聴外、恐々謹言、

朱カキ
承應二年 十月十九日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平大隅守殿

487 光久公御譜中ニ在リ

明廿六日琉球人可被下御暇候之間、四時過召連可有登城
外、自然樂可被聞召儀可有之外間、致其懸樂之役人罷出
外様尤外、恐々謹言、

朱カキ
承應二年 十月廿五日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

488 使者遠来書簡披讀被賀我貴 大君承継前葉統治闔國被奉

祝之恩懇款之志可以嘉焉、使者捧出数品登城拜謁禮早、

賜暇歸國所足下目錄可領受之、不宣、

承應二癸巳

十月廿六日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

回答

中山王館前

右御奉書松平和泉守ハ依柄氣加判紙之、

489 光久公御譜中

想夫于今年逢癸巳時帶孟秋急渡萬丈之海遙望千尺之山稜
霏湛之瀟跡鯨浪餘生再洪鈞之造矣、況此明月本自明無心
孰為境掛空如水鑑得意忽如會面心所畜者便快言往七自疑

不知相去萬里也、既而憤俳之氣思有所洩遂追就前志矣、

贈 梁氏饒波里之子思五郎正次

何圖逢君相抔喜玩百媚厥後別有情莫道紅羅裾燕地少夢度

陽關向誰邂逅相會邂逅相別不久見花而去貴賤無常忘酬值

顯帝西風興露冷霜華凝思君盡日餘無見我猶不忍別物亦有

緣侵自匪嘗行邁誰能知此心悄然淒更深生氣爽衣裳健坐滴

寒尚盡秋簾冷無情掩柳非千態宛轉宛轉和且長日日九廻腸

耳夢短眠頻覺宵長憐滅燭臨曉影蟲怨欲愁聲山河空遠道鄉

國自鳴砧巷有千家月人無萬里心雲隨地角遠日向金簪斜去

七空貧路徐七馭馬蹄相隨千里不相離思郎君欲歸時我未歸

無邊麗景還成惱騷鬢與流芳改遊賞心兼樂事違芳月遺恨滿

詩曰

春城豈啻悲前事深憂自飽更別此最為難淚盡有餘憶呵呵

盡日凭欄意轉迷、豈何恩寵喜何時、一回望月一回懶、說

到郎君動遠思、惆悵深宵慵聽鐘、殘燈薄焰影憧憧、憐君滿思耿無寝、萬

轉千回勞寸胸、

承應二年癸巳孟冬下浣

源氏四位羽林守隅子

光久

搜書

御朱イン

490

御文庫式拾番箱四拾八卷中

天爵靈社起請文前書事

御意別る忝奉存外ニ付、御一代之御供可申上外、若又

光久公自今以後不依何色ニ御身上御一大事ニ被成御極儀

共於有御座者、乍恐御命替として我等之定命者数年前ニ

被召上 光久公ニ与、御長命給へト、愛宕大權現・广利

支尊天行者・金明童子ニ毎朝奉誓願意趣如件、

右於偽申上者奉誓願三尊其外

牛王神文略ス

承應二年癸巳霜月廿四日

壹岐加賀右衛門 秀盛判

光久公

491

きりしたん宗門之事、累年御制禁たりといへ共御代替ニ

付、弥以断絶なく急度可相改之旨所被仰出也、自然不審

成もの有之者可申出之、此以前八伴天連之訴人銀子貳百

枚、いるまんニ同貳百枚雖被下之、自今以後者伴天連ニ

同三百枚、いるまんこ同式百枚、同宿其外宗旨之族者或五拾枚、或三拾枚御褒美として可被下之、若かくし置、他所よりあらわるゝにおいてハ、其五人組迄可行曲事者也、

承應二年十一月日

就御代替従前々御禁止之きりしたん宗門之族、弥以可改之旨所被成下御符案也、到于諸士百姓以下迄、謹め可相守此旨、尤御書出之褒貶之趣不可有相違之条制札如件、

承應三年正月 大隅守

天下御條書ニ右之御制札ニ而御分国中諸外城迄相立也、

492 光久公御譜中

同年十一月十八日拜三領御殿所レ摺之鶴一隻、齋藤佐源太為レ上使也、

493 御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以北郷佐渡殿役儀御覚居故不申入リ、以上、

一書令啓達候、其表可為御静謐外、當御地無別条 御三殿様 奥方様御機嫌能被成御座外間可御心易外、然者先月十八日 上使齋藤佐源太殿ニ而御殿之鶴御拜領候、誠

以目出度御仕合ニ御座外、各可為御同懐存外、来ル七日ニ松平隠岐守殿其外御近付之御衆、被仰入御披之御催ニあり、猶期後喜之時外、恐惶謹言、

朱カキ 承應二年 十二月四日 鎌田源左衛門 政有判

新納右衛門 久詮判

伊勢兵部 貞昭判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

町田勘解由殿

人々御中

末ノ封前ニ

一承應二年十二月廿五日留山弥一兵衛・長倉伊織被控下候、一霜月十八日上使齋藤佐源太殿ニ而御殿之鶴御拜領之由候事、

外名宛書等略ス

494 御心 国分宮内澤氏藏

○正八幡宮御宝前

奉納置 刀巻ツ 長サ式尺 銘國武

脇指巻ツ 長サ壹尺 銘右同

右祈願者武運長久・子孫殊繁昌・領内安全・

敬愛自在之故也、

仍致寄進如件、

承應二曆十二月吉日

施主 喜入五郎兵衛藤原久洪

加久藤慶所案文留

新納加賀守殿披官

一 札年五十歳

松坂金右衛門

一同四十二歳

女房

一同七十六歳

母

一同 十二歳

女子 龜太

右老伊地知主膳正殿へ被相付外由ニ、爰元へ被罷移
外間、此方帳面ニ書載申外、御方帳内御除可被成外、

御法度之宗躰ニ、無之通承届外、已上、

承應二 巳十二月十五日

三人

伊知地佐左衛門
西田和泉守 也
白坂左京

大口

御慶衆中

十三番箱五十二卷中

光久公御譜中ニ在リ

明朔日日光久能御鏡御頂戴付、例月之御礼無之外間、
不能御登城外、恐々謹言、

承應三年 正月廿九日

朱力キ

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

承應三年甲午

二月十七日、丸田元心大口衆にて新納加賀守、忠清に殉死以下同し、山下慶右衛門大口

衆なり、金丸宇右衛門忠清家臣、牧山清兵衛同上、

大口土濱川小市丞覚書

承應三年甲午二月十七日、加州死去也、但寛永五年方右
之年号三年大口之地頭廿七年也、

499 大口土俵原氏家藏

覺

今度地頭新納加賀殿遠行ニ付、當地仕置別ル可被入念旨、到暖衆被仰出外、各以其心得万事可被見合外、常々被仰出御條書之趣者不及申、或背御法度、或暖衆之下知不致承引、或所之さわりニ罷成族之人於有是ハ、衆中下々ニよらす早速可被申出外、地頭不相究内弥被入念專一ニ外、以上、

承應三

午二月廿七日

新 又左衛門

大口横目衆

500

光久公御譜中

承應三甲午歲四月十二日、光久錫ニ歸レ國之暇、上使阿部豊後守忠秋來傳レ恩命也、五月十日辭ニ江府、家老鎌田源左衛門政有陪從矣、六月二十八日到ニ著藤府、即使ニ于川上上野久運ニ走レ江都、獻ニ上糴沙十間並三種・雙樽ヲ於幕府ニ奉レ謝ニ給レ告之忝ニ焉矣、同八月十九日久運登ニ江城ニ捧ニ光久之方物ニ奉レ冒ニ嚴顔、酒井雅樂頭忠清執奏、同二十一日召ニ久運、拜ニ領御雌子單物、

501

御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

去年就 内裏炎上、御作事有之外、御築地者如先例、諸

大名被 仰付之外、手傳之儀者可為日傭人足外、五万石以上之面々被課宛之事外、委細板倉周防守被相談可有其沙汰外、恐々謹言、

朱力キ

承應三年

四月十三日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井讚岐守忠勝判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

502

雜抄

引付

一高式石八斗者

橋口七左衛門

一五畦屋敷者

右同人

一高七斗壺升八合七夕六才

長友主水

一五畦屋敷者

右同人

一同壺ケ所者

前田藏人

右三人新納加賀地頭所大口ニ誼方采女より數年被預置

外得共、此度地頭所大村ニ召移外間、可有支配者也、

承應三年五月廿三日

前田久則

勘解由印

(島津久頼)
筑 前印
(島津久通)
圖 書印

高奉行

高城喜左衛門殿

有馬治右衛門殿

503 御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

一書令啓達^外、然老昨日從 公方様 上使以川勝丹波殿、

御鷹之雲雀被成御拜領^外、誠以目出度御仕合珍重之至奉

存^外、此等之段、少將様^{光久}為可被仰上勝部長右衛門為御

使被差上^外、其元可然様ニ御披露可被成候、就其從其許、

御老中迄御礼之御使者被仰付御尤^外、頃雲雀御拜領之御

大名衆書付為御一覽進上仕^外、猶期後喜^外、恐惶謹言、

^{朱力キ} 承應三年 七月十四日 鎌田源左衛門 政有判

新納右衛門 久註判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

北郷佐渡殿

伊勢兵部殿

町田勘解由殿
人々御中

504 綱貴公御譜中

綱貴公

一女子

承應三年甲午七月十八日誕生母同前、

若州小濱城主酒井綱負佐忠隆室、

天和二年壬戌十二月十二日卒于江戸、年二十九、

505 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

為八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

献之^外、遂披露^外處一段之御仕合候、恐々謹言、

^{朱力キ} 承應三年 八月五日 阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

松平大隅守殿

506 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、於 日光正遷宮首尾能相濟外儀相達、目

出度被存之由尤之事外、因茲被差越使者外、入念外之段

可及 上聽外、恐々謹言、

朱力平
承應三年 八月十一日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

508 全卷中添書

今度御懸之雲雀御拜領之御衆

九日

紀伊大納言様

尾張宰相様

十一日

松平陸奥守殿

佐竹修理大夫殿

十二日

紀伊宰相殿

井伊掃部殿

松平千世熊殿

松平因幡殿

十三日

薩州様

松平對馬殿

松平淡路殿

松平德千世殿

京極山城殿

水戸中納言様

松平越前守殿

藤堂大學殿

水戸中將殿

細川六丸殿

上杉喜平次殿

伊達遠江殿

松平右衛門殿

松平信濃殿

松平岩松殿

松平三左衛門殿

南部山城殿

507 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様御機嫌之御様躰為可被相伺之、

被差越使者外、益御勇健被成御座外之間可御心安外、随

而氷砂糖二壺并御肴一箱被献之外、遂披露候之處、入念

外段御喜色之御事外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力平
承應三年 八月十三日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

宗彦滿殿

七月十四日

丹羽左京殿(光重)

509 光久公御譜中

去歲中山王尚質所_レ獻之使者國頭按司謁_三江城_一、濱_三家綱公之嚴顔_一、且被_三恩惠_一、以故尚質以_三使者屋富祖_一、奉_レ謝_レ焉、今歲夏屋富祖到_三于魔府_一也、光久聞_三之諸將軍家之執政_一、執政受_三台命_一報光久曰、不_レ及_三使者參_レ謁于江府_一、宜_下合_三報命_一而歸_中于球國_上云_レ尔、

510 光久公御譜中

就

大樹家綱大君御世續、去歲國頭正則到江戶城、述賀儀、首尾能帰帆之旨、以書簡令示諭之處、此度差屋富祖被謝之、御懇切之至_レ、此等之趣令使价告報于大君者也、猶保榮茂可為演説之条、不能禿筆_レ、恐惶不宣、

朱力キ 承應三年

八月十八日

薩摩少將

光久判

謹上 琉球國司

511 十三番箱五十二卷中 光久公御譜中_二在_レり

御札致拜見_レ、公方様弥御機嫌能被成御座_レ之間可御心安候、將又去比首尾好御暇忝被存_レ、帰國付_レ被差越使者、殊更羅紗十間并三種二荷被獻_レ之_レ、右之通遂披露_レ處、御前_レ使者被召出、入念_レ之段御満悦之御事_レ、恐_レ謹言、

朱力キ 承應三年 八月十九日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

酒井雅樂頭 忠清判

512 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中_二在_レり

御状致拜見候、如仰 公方様益御機嫌能被成御座_レ之間、可御心安_レ、然者今度首尾能御暇被遣、海陸無吳儀、六月廿八日御帰國之儀、忝思召之由尤存_レ、依之老中迄、以使者被仰入、羅紗并三種二荷御進上候、各被遂披露_レ處、御使者 御前_レ被召出、首尾残所無御座_レ之間可御心安_レ、随_レ而私_レ色々被懸御意忝存_レ、如御存今程ケ様之御祝儀一切不申請_レ付、番之者御理申事_レ、委曲御使者可

被申達外間不能詳外、恐惶謹言、

朱カキ
承應三年 八月廿日

酒井讚岐守
忠勝判

松平大隅守様
貴報

513 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

尚以爰許御用之儀も御座外ハ、可被仰下外、已上、追而致啓上外、然者今度御使者ニ被指上外川上上野殿、去ル十九日 御前へ被召出被致 御目見外、御進物品々(酒井忠清) 雅樂頭殿被遂御披露外、昨廿一日上野殿御城に被為召松(松平信綱) 伊豆守殿被仰渡御暇被下外、殊御帷子御単物被致拝領、残所無御座仕合ニ御座外、其段被聞召忝可被思召と奉察外、委曲上野殿可為演説外間不能詳外、恐惶謹言、

朱カキ
承應三年 八月廿二日

神尾備前守
元勝判

松 大隅守様
人々御中

朱カキ
承應三年 写卜アリ

松平大隅守様
人々御中

神尾備前守
元勝

514 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札致拜見外、先日息薩摩守に以 上使御鷹之雲雀被遣之趣相達、於其方忝被存之由得其意外、因茲被差越使者外、入念外段可及 上聞候、恐々謹言、

朱カキ
承應三年 八月廿三日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判
酒井雅樂頭
忠清判
松平大隅守殿

515 光久公御譜中

正文在文庫

為重陽之佳慶小袖五到来歛覚候、猶酒井雅樂頭可述外也、

朱カキ
承應三年 九月七日

薩摩少將殿

516 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

主上 崩御付而、被行赦候、然者於諸國在々所々存其趣、罪科之輩可放免旨被 仰出外、雖不及申外此節外間、大

科之外者被赦之尤^レ、恐^ク謹言、

朱力^キ
承應三年
九月廿七日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

承應三年甲午
後光明天皇崩御

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、於紅葉山先月十六日正遷宮、翌十七日御參詣目出度被存之由尤之事、依之以使者、御樽着被獻^レ、遂披露^レ處、一段之御仕合^レ、恐^ク謹言、

朱力^キ
承應三年
十月廿二日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以隱岐守様・河内守様御與方へも御祝物相調、市

十三番箱五十二卷中 光久公御譜中ニ在リ

郎左衛門持參被仕^レ、河内守様素其時分ハ未被成御着^レ、去ル廿一日御着^レ、おそなハリ申^レ故右之通

ニ^ハ、是又為御意得^レ、以上、

若御前様御繁昌ニ付、少將様より為御祝儀、国府市郎左衛門被差越、御祝物面々御書付之通相調致披露^レ、何及忝被思召^レ、此旨可被達 上聞^レ、将又御兄弟衆・一所衆・各相中之御祝物被仰越^レ通ニ差上 御満悦ニ被思召上^レ間、其段可被仰渡^レ、御姫様^ハ之御祝物從其元之書立ニ無^レ之^ハ故、致相談同前ニ相調差上^レ、巨細高崎惣右衛門方^ハ其許物奉行所可有首尾^レ、猶期後喜之時^ハ、恐惶謹言、

朱力^キ
承應三年
十月廿九日

伊勢兵部
貞昭判

嶋津 圖 書殿

嶋津 筑 前殿

町田 勘解 由殿

鎌田源左衛門殿

御報

末二

午十月廿九日ノ日付、承應三年甲午ニ当レリ、

御札令拜見^レ、去比帰国付^ル被獻使者^レ處、御前^ニ被召出、其上時服被下^レ之、重疊忝被存由尤之事^レ、依之重^ク被差越使者^レ、入念^レ段可及 台聽^レ、恐^ク謹言、

宋力キ
承應三年 十月晦日

阿部豊後守 忠秋判
松平伊豆守 信綱判

松平大隅守殿

酒井雅樂頭 忠清判

520 御文庫拾三番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、公方様御機嫌之御様躰被相窺度之由得^ル其意^レ、益御勇健之御事^レ間可御心安^レ、將又息薩摩守^(編久)湯治御暇被遣之、忝被存之由尤儀^レ、依之被差越使者^レ、入念之段可及 上聞^レ、恐^ク謹言、

宋力キ
承應三年 十一月五日

阿部豊後守 忠秋判
松平伊豆守信綱判
酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

521 光久公御譜中

大樹家綱公為世家之御祝儀、被差渡國頭王子、至于東関之江府、則 大樹御前^ニ被徵出、御機嫌不大形、於予喜悅之至、貴殿御大慶察入而已、且復乘被為 上聽無殘所仕合^レ、此節亦御元祖之社廟日光山^ニ國頭召列致參詣、敬信之厚志御感不淺^レ、委曲可為演說之間不審、恐惶頓首、

承應三年十一月五日

大隅守光久御判

謹上 中山王

522 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、今度紅葉山御宮御造事ニ付^ル、正遷宮首尾能相齊、御參詣之儀相達、目出被存之由得其意^レ、因茲為御祝儀被差越使者、御樽肴被献^レ之外、入念^レ之通可及 上聞^レ、恐^ク謹言、

宋力キ
承應三年 十一月八日

阿部豊後守 忠秋判
松平伊豆守信綱判
酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拝見、

主上(參光明) 崩御之儀相達、絶言語被存之由得其意、因茲御

機嫌之御様躰、為可被相窺之被差越使者、入念、段可

及 上聞、恐、謹言、

朱力キ

承應三年 十一月十八日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拝見候、一 公方様先月少、御頭痛氣之処、早速御

快然之儀相達、日出被存之由得其意、依之被差越使者

入念、段可及 高聴、恐、謹言、

朱力キ

承應三年 十一月廿九日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿三番箱廿二卷中 光久公御譜中ニ在リ

紀州高野山蓮金院申分ニ付返詞之覚

一 先年蓮金院令興隆、則於紀伊國之内、寺領高三拾五石

買取被付置、其後薩广國出水郡之内、知行高百石相

加被寄附之通、前々之家老嶋津下野・喜入攝津・町田

圖書・三原諸右衛門・比志嶋紀伊判形之書物、御寺へ

進置候、其上前中納言家久公御直判之御書物も可有之

、此度新敷雖不及申断、兩通之書物写令進置事、

一 右之書面ニ御寺之儀、永々修宮等堅固ニ可有執行之旨、

慥ニ見得之間、万事不加意之所、此節難令助成、

事、

一 従先住之借銀有之由、是又右書物之旨致相違、糸承

引申間鋪儀ニ御座、至當住難申断候故、本銀為返弁

銀子五貫目可致助成事、

一 自今以後、寺中之人数、万事之執行以寺領之分相調、

様ニ被成用意肝要、此上借銀等出来共、向後致

承引間敷事、

一 御當家之御祈禱并御先祖之日坏等、如先年之書物無懈

怠可被相勤外事、

右之条々使僧へ委曲申達外之間、可有演說者也、

承應三年

十二月五日

鎌田源左衛門書判

町田勘解由同

新納右衛門同

嶋津圖書同

封面上之如シ

承應三年十一月五日鎌田源左衛門、町田勘解由・新納右衛門、

嶋津圖書

蓮金院申分ニ付御返事覚書

526 光久公御譜中

同年十二月十二日以奉書、給ニ御鷹之鶴一、令レ驛路、

使ニ之送ニ到于薩州一也、以ニ家臣佐多又四郎久孝一、為ニ使

者奉レ謝レ焉、獻ニ以御看一種一、

527 御文庫拾ニ番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御鷹之鶴被遣之候、委曲從息薩摩守可被相達之候、恐々

謹言、

宋カキ 承應三年

十二月十二日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

528

御文庫廿番箱四拾八卷中 光久公御譜中ニ在リ

尚々不及申外へとも御賜之鶴其許へ到着之御左右早

々可被仰越外、以上、

急度令啓達外、然者御鷹之鶴御拝領ニ付、今晚戌之刻、

松平伊豆様へ罷出受取申外、則可相届由被為仰聞外間、

宰領木場鉄之介申付進上仕外、并御奉書・宿次之御手形

差上外、是ハ早晚此方ニ被返上外間、右手形ハ此方へ早

々可被下外、將又右之御札之御使者ハ佐多又四郎取成可

申外、不及申外へとも年頭之御使者ハ別格ニ被仰付、如

早晚可被差上外、恐惶謹言、

宋カキ

承應三年 十二月十二日

伊勢兵部

貞昭判

嶋津圖書殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

人々御中

末ノ封面ニ

〔承應三年十二月^{スリキレ}〕承應四年正月朔日ニ木場鉄之介持下^レ、
一御鷹之鶴御拜領之事、一御奉書一通參候事、

529 御文庫廿三番箱廿二卷中 光久公御譜中ニ在リ

此鶴從江戸至薩州鹿兒嶋、松平大隅守^{光久}ニ急度可相届之者
也、

承應三年 十二月十二日 豊後印判 伊豆右同

右宿中

上封 鶴宿次 薩州鹿兒嶋迄 写

530 或日記

一承應三年^{年カ}卯二月十七日、大口地頭新納加賀忠清大口ニ
死去、六十歳、家來牧山清兵衛其外二三人殉死、十二
月加賀忠清嫡孫新納次郎^{忠麟}右衛門へ大口地頭被仰付^レ、

531 十三番箱五十三卷中

御札令拜見^レ、公方様御機嫌之御様躰為可被相窺被差

越使者^レ、雖寒中^レ益御勇健之御事^レ之間、可御心安^レ、
将又御羽織五并御看一箱被献之^レ、遂披露^レ之處一段之
御仕合^レ、恐^レ謹言、

朱カキ 承應三年 十二月廿一日 阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

532 光久公御譜中

正文在文庫

為歳暮之佳祥、小袖十到来喜覚候、委曲酒井雅樂頭可述
外也、

朱カキ 承應三年 十二月廿八日 家綱 墨印 薩摩少將殿

533 綱久公御譜中

承應四年乙未元^ヲ改三明曆一、

綱久公御譜ニモ同断、

貴札奉得其意候、仍如被為仰聞、貴老御事代々敷根名子(子)こゝりへ共、寛永廿年癸未十月 後光明院 御即位時分、為御使者上京り付而 光久公以 御意、嶋津之御名子并 御諱之字永く被成 御赦免之旨被 仰出り、私御使申り儀無別条り、依被尋如斯り、恐惶謹言、

承應四乙未

正月六日

伊東二右衛門 祐昌判

嶋津筑前守様(久頼)

参貴報人、御中

吉書

- 一 神社佛閣修理興行之事、
- 一 可専勤農事、
- 一 徴納國々年貢事、
- 右任三ヶ條之旨、可有沙汰之状如件、

光久 (花押 No.4)

承應四年正月十一日

御文庫廿一番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

於京都吉田殿に御断之條々

一 薩州鹿兒嶋氏瀬之祀場中ニ考、縦太守ニ亦も他國へ出行之儀自往古神慮戒也、如當分ニ亦考江戸へ参勤之儀も心任ニ不成候間、向後考雖為祀場中、他國之出行自由ニ成り様可申上事、

一同所諏方之祀場中ニ喧嘩などにて、疵付りもの左右方共ニきよめいたしり、右のきよめ之供物大分ニ候間、可減少様可申定事、

一同所川内新田八幡祀場、當分考七里方之由候、殊川向(川内)限之城方へも祀場懸儀如何、向後考水引・中郷・高城(川内)三ヶ所ニ可申定事、

付 右之祀場中きよめ之供物も可減少、且又致搦者ニもきよめ懸儀仕置差合ニ成間可申分事、

一 隅州正八幡近邊之川田島之損地ニ成所在之りへ共、從上代八幡之御内證ニ不合りとて、土手水よけの様成儀不仕候事、

一 川内之川筋築ニ亦魚取事、水神のとかめ之由りて、築せきたる事無之候、右御断之事、

一 屋敷中ニ荒神之木とて森在之り而、屋敷之害ニ成所有之り、ケ様之神木伐り御許も御座候哉之事、

538

今度就 御即位、御祝儀被差上令披露、首尾能珍重存外、將又私に及為御祝儀御太刀・馬代銀子三枚并御樽壹荷・

537

御文庫拾三番箱五拾四卷中

新春之御嘉祥珍重々々、逐日猶更不可有盡期候、抑此等之為御祝儀奉准恒例捧使翰候、仍太平布五十疋・蕉布五十疋・焼酒十甕致進上之候、猶永春中重畳御慶可奉得尊意候、誠惶誠恐敬白、

正月十一日

進上 光久尊公

琉球國司

尚質判

右條之旨可然可申調者也、
承應四年正月廿三日

鎌田源左衛門

町田勘解由

新納右衛門

嶋津圖書

一國中二川二井杭不打由、所之者申傳、井手せき儀不成外、并春初田島不致歟初在所有之付、耕作仕付時

分延引ニ可申分事、

看兩種過分之至存外、尚期後音之時外、恐々謹言、

正月廿九日

松平大隅守殿

本マ、(共男)

松平大隅守殿

清閑寺前大納言

539

御文庫拾三番箱五拾四卷中

一筆致啓上外、今度就 御即位、以使者御祝儀被仰上外、禁裏院中首尾能昨廿八日相濟申外、随所拙者方へ御看二種・兩樽、被懸御意忝奉存候、委細嶋津市正方可被申上外、恐惶謹言、

正月廿九日

松 大隅守様

中川飛彈守

忠幸判

人々御中

540

今度 御即位相濟外、被成御祝儀私式へも二種兩樽被懸貴意、嶋津市正方被致持参、誠以忝奉存外、猶期後音之時外、恐惶謹言、

正月廿九日

松 大隅守様

青木遠江守

義継判

人々御中

尚以私方へも為御祝儀、諸白兩樽并干鱸一箱・昆布一箱被為懸御意、御事多中過分至極奉存外、以上、今度就 御即位、御使者御登

禁裏、為御祝儀御太刀・御馬代御指上、則傳奏衆被進御^{（遠也）}披露外、御機嫌之御事ニ御座外、委細御使者嶋津市正殿へ申達外、恐惶謹言、

正月廿九日 高木伊勢守 守久判

松平大隅守様 人々御中

一筆致啓上外、去ル廿三日御即位首尾能相濟、万民恐悅不過之奉存外、因茲御使者廿八日 禁裏 院中 女御之御方に御祝儀御目錄之通、御作法能差上ケ被申外、委細嶋津市正殿可被仰入候、随而拙者式迄、御着式種・兩樽被掛御意、誠以忝奉存外、尚期後喜之節外、恐惶謹言、

正月廿九日 深津越中守 正貞判

松平大隅守様 人々御中

外、昨廿八日依吉辰 禁裏 院中御祝儀首尾残所無御座御祝儀上り申候、安尊慮可思召外、次拙者へ二種兩樽被懸貴意、過分至極奉存外、委細御使者可被申上外、恐惶謹言、

正月廿九日 野々山丹後守 兼綱判

松 大隅守様 参人々御中

尚以御祝儀被成、自分へも御樽壺荷御着二種被懸貴意忝奉存外、以上、

一筆致啓上外、然者去ル廿三日御即位首尾能相濟、万民恐悅不可過之珍重奉存外、因茲御使者廿八日 禁裏・院中・女御御方に御祝儀御目錄之通 御作法克指上ケ被申外、委曲御使者可被仰入外、恐惶謹言、

正月廿九日 大岡美濃守 忠吉判

松平大隅守様

首尾好遂披露目出度令存_レ、將亦自分_レ御太刀一腰・御馬一疋并兩樽・二種贈給令祝着_レ、猶期後慶之時_レ、恐_レ謹言、

正月晦日

松平大隅守殿

野宮大納言

(定邊)
定判

546 御文庫廿七番箱四拾九卷中

天罰起請文前書之事

一奉對 光久様無別心御奉公可申上_レ事、

一今生之事老不及申上、来世迄之御奉公之御供可申上_レ

事、

一身軀之儀ニ付、被掠聞食儀_レハ、被遂御糺明可被下_レ

事、

右之條々於偽申上_レ老

牛王神文略

承應四年乙未

正月吉日

前谷主水助

宗春判

末ニアリ

天罰起請文

前谷主水助

宗春

547 御文庫拾三番箱五拾四卷中

為 御即位之御祝儀 院御所_レ御名代被為差上、殊馬・太刀御進献_レ、御機嫌之御事候、相心得可申入旨被仰下_レ、次自分_レ表御馬・太刀・御樽壹荷・御肴二種被掛御意忝令存_レ、委曲市正_レ御札申入_レ条不能詳候、恐_レ謹言、

二月朔日

俊完

薩摩少將殿

薩摩少將殿

小川防城前大納言

548 今度為 御即位御祝儀、被差上御使者候付、貴札致拜見

_レ、先月廿三日天氣迄能相濟、千秋万歳目出度奉存_レ、

禁裏 院中_レ各様御進物等首尾好相納_レ間、御心易可被

思召_レ、猶嶋津市正方可被申宣_レ、恐惶謹言、

二月朔日

牧野佐渡守

親成判

松平大隅守様

貴報

549 御文庫拾三番箱五拾四卷中

為 御即位首尾能相濟申_レ御祝儀御使者殊御太刀一腰・

御看三種・御樽兩樽・御馬代黃金十兩被懸御意、過分至

極奉存_レ、猶期後音之時_レ、恐_レ謹言、

二月朔日

牧野佐渡守

親成判

松平大隅守様

人、御中

550 光久公御譜中

承應四乙未年二月四日、發_レ魔城自_二日州細島_一乘_レ舩到_レ

大坂、三月二十八日着_レ江都、家老嶋津中務久茂扈從焉、

四月四日奉_レ謁_二見

將軍家_一、獻上物如_レ例、

551 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見_レ、去年為重陽之御祝儀、呉服被獻之付_レ、

被成御内書頂戴忝被存_レ、且又使者時服被下之重疊過分

至極之旨承届候、入念_レ段可及 台聞_レ、恐_レ謹言、

朱力キ

承應四年

二月七日

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

552 全上 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、如承意改年之御慶申納_レ、

公方様益御機嫌能被成御座_レ間、可御心易_レ、然_レ為年

頭之佳節被差越使者、御樽肴被獻之_レ、遂披露_レ處一段

之御仕合候、委曲使者可令演說_レ、恐_レ謹言、

阿部豊後守忠秋判

朱力キ 承應四年 二月十三日

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

553 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

一薩州鹿兒嶋氏瀨之祭正當二月十八日也、則自朔日於祀

場中_レ、縱雖太守他國出行自在古依社例神慮之制戒之

由、此段_レ則前後齋之間、氏子中随神事仁_レ禁足之法

流例也、於余仁_レ其例稀也、向後雖祀場中於 公道_レ、

江戸參覲不可有其憚、是則君臣禮儀之法也、夫神_レ不

享非禮_二云不違禮儀則可有寬有免許乎、

一同國諷方之祭、正當七月廿八日也、則自六月朔日於祀

場中、不慮之外致喧嘩_レ双方共致清淨儀、古來之制法

之由、此段_レ則有罪咎_レ以贖物贖其罪事、自神代之遺

法也、尤隨其身分際、以代官神職誦祓、致清淨潔齋事、神國之風儀也、

一同國新田八幡宮之祀場七里方之由也、川向隈之城(川内)表於

為氏子者祀場懸儀尤也、非氏子者可無其法、水引・中

郷・高城三ヶ所、於氏子者右可為同事、且又於致搦者

武門之職法也、不獲止る用之、神道者以清淨為元、以

正直為專、偏不廢社例則以代官神職、可有清淨事也、

一隅州正八幡宮近邊之川雖有田畠之損地成所、自上古依

一社之法例哉、凡塞水道放土手畔事者、惡神之所行也、

八幡宮者廣大慈悲之太御神也、則託宣曰、自人之國我

國、自他之人我人云、田畠成就五穀能成、國家豐饒

者八幡宮之御内證感應之儀也、於致土手水除豈崇在乎、

雖然依為社例啓白申奉者也、

一川内之川筋築ニテ魚取事、水神之祟在下申傳儀尤有之

事也、此段者水神敷地何町四方ト被相定、其外者以寬

宥之儀取之可然也、為其奉納鎮札幣帛、每年一度祭之

并啓白申奉也、

一屋敷中ニ荒神木ト云森伐其木事、古來崇在下申儀尤也、

此儀所々ニ繁多也、人屋之妨ニ罷成、堪忍難成木者雖

伐之、荒神ヲ別所ニ安鎮る其替ニ栽木、毎月一度令祭之、納幣帛啓白申奉可然也、

一國中ニ川ニ井杭打事忌之儀、社頭近邊者可有左様哉、

又春初不致鋤初事無所見、川堰井手者田畠之成就、春

耕初者民之家業也、向後擇吉日、致春耕初事、諸神豈

其祟在之乎、

右断之趣如件、

承應四年二月吉日
神道管領長上下部朝臣兼起、

554 光久公御譜中

正文在文庫

一氏瀨ノ事、龍神タルヘシ、

一以レ贖物贖レ其罪事、備物ヲ以其罪ヲツクノウ、

一惡神ノ事、ソサノヲノミコトノ類也、

一啓白申奉ノ事、書物ナト社頭ニコメ折念ナサル、也、

一鎮札ノ事、フタノヤウナル物也、

一毎月一度ノ祭ノ事、人々油断ノナサマシト云事也、

其分之限ニシタカヒシホイニテモ可然也、

555 御文庫廿一番箱四拾九卷中 御譜中ニ無之

一筆致啓上り、然者鎌田筑後殿御事、御評定所方御文書之儀被聞召り、其上嶋津圖書殿御同前ニ吳国方并宗赫方御當ニ付、万事圖書殿と御相談入儀ニあり、筑後殿儀圖書殿與ニ可被為入之旨上意り間、左様ニ御心得可被成り、我等御使仕り故如此御座り、恐惶謹言、

二月十七日 伊東三左衛門 祐玄判

鳴津 圖書様

伊勢 兵部様

新納 右衛門様

町田 勘解由様

鎌田 源左衛門様

參人々御中

末ノ封面ニアリ、名ハ略ス

鎌田筑後殿御帰之刻之状、

未二月十七日之状、

556 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

舊冬御鷹之鶴拝領之、忝被存旨得其意り、依之為御礼被差越使者、并其國之御看一種被獻之候、右之趣遂披露り

之處、一段御仕合り、猶使者可令演説り、恐々謹言、

朱力キ 承應四年 二月十九日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

557 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見り、為歳暮之御祝儀、就呉服被獻之、被成御内書頂戴、忝被存之由尤之事情、入念示預之趣可及上聽候、恐々謹言、

朱力キ 承應四年 三月十九日

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

558 十三番箱五十三卷中 光久公御譜中ニ在リ

明四日 御目見可有之候間、四時過御登城尤り、恐々謹言、

朱力キ 承應四年 四月三日

松平伊豆守

信綱判

綱久公御譜中

明暦元年乙未四月十一日

大將軍家綱公以ニ 上使ニ、賜ニ綱久初歸レ州之暇ニ且拜ニ
戴時服五十一、其後登レ營而奉レ謝レ之時、賜ニ御馬一匹ニ
也、同月二十三日發ニ江府ニ、諏方左右衛門兼利監ニ諸
般ニ而扈從、開ニ船於大坂ニ、經ニ西海ニ五月二十七日入ニ
鷹府ニ、即日奔ニ相良主税長廣於東都ニ、奉レ謝ニ初歸レ州
之忝ニ、獻ニ上白綸子二十卷・干鯛一箱・御樽一荷ニ、

御文庫式拾壹番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

急度用飛札候、然考今日八ツ半時ニ松平伊豆守殿為 上
使被成御出、薩州様首尾能御暇御給千秋万歳目出度儀、
何方も可為御同前と存リ、爰元御發足御日限東目西目之
儀ハ相極次第追る可申入リ、猶期後慶之時ハ、恐惶謹言、

朱カキ

承應四年

卯月十一日

嶋津中務

久茂判

嶋津筑前

久頼判

松平大隅守殿

酒井雅樂頭

忠清判

追る申ハ、仍伊地知六郎兵衛御供立ニあり處、在江戶ニ
被繰替ハ、在江戶衆替此節ハ無御座リ、然處御留守番老
人不足ハ、六郎兵衛早々可被召上リ、為其如此ハ、以
上、

卯月十一日

嶋津中務

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

嶋津圖書殿

末ノ封面ニアリ、名略ス

未卯月廿六日之晚飛脚到来、薩州様卯月十一日ニ御暇御給之由
也、

嶋津圖書殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

覺

- 一 船中之儀、先船奉行是枝喜右衛門へ相尋可有渡海事、
- 一 五節供ニ者、對面所へ被差出仕可被見外事、
- 一 表に被通外道筋者居城之うしろを可被通外事、
- 一 表之番功之入りもの六人充四替ニ可相定外事、
- 一 遊山に可被出時者おさと馬場を可被通外、供衆者留城戸より可致供外事、
- 一 関獵可為無用外、小人数にて之狩者百性不痛様ニ以見合可被致外、

付 諸殺生外時者功之入り者、手廻拾人計之間ニ被出尤外事、

- 一 釣ニ被出外時者つきだしよりゑつつうニ可被乗外、供船も小舟可為一二艘、篠原大藏乗船ニ可被乗外、
- 一 諸士ニ馬を乗せ被見外時者、厩之亭より被見尤外、厩之賣馬ハ常のことく其外諸士より馬出外時者一日ニ三疋敷、四疋敷、五疋程充可被見外事、
- 一 雉子之鳥屋待ニ被出外時者、裏門より被出、可為吉野外、供之射手一兩人、供衆ハ菖蒲谷之崎こくりうニ可遺外、但山口善右衛門・有川十右衛門可被列外事、

一 吉野之鹿獵可然無用、狩者谷山・春山可然外事、

一 伏見へ上着外者、永野石見守殿へ可被見廻外、於大坂者御城番衆・町奉行へ可被見廻外事、

一 於鹿兒嶋あなたこなたの振舞ニ被参外儀、可為無用外事、

一 湯治へ節々為養生、可被参外、(辨宿那) 瓢哇・安樂可然外事、

右之條々諷方幸右衛門へ申合外、其外萬事多人數ニ目ニ立、或遊山等も夥敷在之儀可為無用者也、

承應四年卯月十二日

563 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

當年八月、從朝鮮國信使來朝外、自然遭風波之難、領内之浦に於令着岸者、綱・碇・水・薪等之儀、無滞様可被申付外、恐々謹言、

朱力キ 阿部豊後守 忠秋判

承應四年 四月十六日

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

光久公御譜中

正文在文庫

猶以私儀御弓被仰付之旨、鎌田源左衛門へ被仰下之

由被申聞ハ々条相勤申ハ、是又為御心得ハ、以上、

態一筆令啓達ハ、然者 若御前様今曉七之頃 御姫様御

誕生ハ、殊御親子様御機嫌能御座ハ、目出度奉存ハ、

先以此等之御祝儀為可申上、伊東元右衛門申付ハ、委曲

口上ハ申合ハ聞不詳ハ、恐惶謹言、

朱力字

承應四年

卯月十六日

鳴津中務

久茂判

鳴津圖書殿

鳴津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

人々御中

全御譜中

此歲四月二十三日改ニ承應ニ號ニ明曆ニ、

綱久公御譜中

覚

一新御殿未出来ハハ、小書院ニ御座ハ様ニと 御意ハ事、

一御成可被成所安藝殿(高津久雄)・筑後殿御家老中其外者無用之由(鎌田政勝)

御意ハ事、

一御門外へ御差出之時、御供御城之小番大番之内ハ、其時々之見合にて可被召列ハ、

一雲齋御国元迄御供、左ハて可罷上由 御意ハ事、

一向之嶋西堂(龍見島・敬應)ニ御狩可然由御意被成ハ事、

一鉄炮吟味之事并弓場事無用之由 御意ハ事、

一黒葛原治部右衛門納戸、河上五兵衛與ニ詰衆、新納小

右衛門御代官、

右者四月十一日之晚 御意被成ハ事、

一安藝守殿・筑後殿へ萬事可得御意由被仰出ハ、藝州老御事、節々御參被成、御供なども被成ハ可然ハ由ハ事、

(山本邸)

一獅子嶋ニのせこ十人計ニの御狩可被成由 御意ハ事、

一おこち・おやま御側ニ御奉公可被申由 御意ハ事、

一福崎新二郎・赤松諸兵衛・宮之原筑兵衛與方へ罷通御

用可承事、其外之御近所衆者與へ遠慮可仕由外事、
(鹿兒島)
一吉野御馬追こそ御のほり可被成由り、(給良郎) 福山御馬追こハ
御無用にてり由外事、

一盛市一官御用之時者可被召寄由外事、

一番衆賦之事、御老中へ可得御意由 御意外事、

一御指圖之外御一門中御家老中御供被成間敷由外事、

右者四月十九日之晚 御意被成外事、

一伊集院長右衛門事、今度被召列り、来春御上洛之時も

可被召列由外事、

朱カキ
承應四年 卯月廿日

綱久公御譜中

綱久
— 女子三人
— 男子四人
久雄

後久侶・虎助・權八・權兵衛・壹岐

明曆元年乙未六月廿三日誕生、母家臣津留筑右

衛門正將女、

家臣島津又助忠清之後嗣、

異本ニ
室肝付伴兵衛兼屋女也トアリ、
568
御文庫廿卷番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々相良主税御使之首尾仕御暇出りへとも、忤者共、

餘多煩り故、益過り可罷立格護り、將又大窪市左

衛門着仕り、御状返書後便に可申入り、以上、

一書令啓り、然者昨日 上使下曾根三拾郎殿に雲雀御

拜領り、御仕合能目出度奉存り、此等之旨、御序之節

綱久様に可被仰上り、猶期後慶之時り、恐惶謹言、

朱カキ
明曆元年 七月十二日

嶋津筑前

久頼判

嶋津中務

久茂判

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

嶋津圖書殿

人々御中

末ノ封面ニアリ、名略ス

明曆元年七月十二日之書状七月廿七日到來、雲雀御拜領

之儀也、付、御機嫌之儀也、
神宮司藤七・有馬五兵衛到來也、

御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在り

明廿八日、御目見無之之間、不及登城候、八朔御出尤、

恐、謹言、

朱カキ

明暦元年 七月廿七日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿老番箱四拾九卷中

天罰靈社起請文前書之事

一我等事被召出別ゝ被召仕之間、此御恩ほうしかたく奉

存之間、光久公に來世迄之御供申上之間、少も別儀

御座有間敷候事、

一御前方御をん蜜之御意之趣他言申間敷、若我等身上

二付、被掠聞召儀御座、被逐御糺明、可被下

外事、

一奉對 光久公に、野心不忠之人於有之、承及心底不

残言上可申上外事、

牛王起請文略

明暦元年七月吉日

河野五右衛門

通周判

御文庫廿老番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在り

猶、薩州様(編カ)

太守様(光カ)

へ被進、御書一通差上申

一、御受取可被成、以上、

一書令啓入、然其御地弥御静謐、可被成御座と奉察、於御當地も無別条之間可御心易、將又三原九兵衛

儀 薩州様は梅首鶏御拜領之為御札使被差越、尤先月

到着仕之間、追付首尾相濟可申、芝御姫様御瑠瘡

被成、二付御遠慮被遊、今月朔日、社 薩州様御登城被

成、九兵衛事も同日、差出申御奉書出申、間、

進上申、巨細口上、可申達、之条不能審、恐惶謹言、

朱カキ

明暦元年 八月八日

嶋津中務

久茂判

嶋津 圖 書殿

嶋津 筑 前殿

鎌 田 筑 後殿

伊 勢 兵 部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿
人々御中

對面二

八月八日狀三原九兵衛持參二通之内、

572 綱久公御譜中

綱久

女子三人略

男子五人略

女子 於虎

明曆元年乙未八月九日誕生、母家臣新納佐左衛

門忠賴女、

家臣島津又十郎忠興室、

573 光久公御譜中

就延久元服預書簡具令披閱外、因茲為祝儀、御太刀一腰、

馬一疋并其國之方物目錄之表致受納、怡悅不過之外、

猶期後音之時外、恐惶不宣、

朱力平

明曆元年 八月九日 少將光久

謹上 琉球國司

574 綱貴公御譜中

我等就致元服候、為祝儀被差越使札、殊御太刀一腰・馬一疋并其邦之方物如目錄令受納之、欣然之至存外、猶期後慶之時外、恐惶謹言、

朱力平

明曆元年 八月九日 又三郎 延久(花押No.6)

謹上 琉球國司

575

御文庫式拾壹番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

薩州様へ雲雀御拜領外、御札為可被仰上、少將様より奈

須五左衛門被差上外、去ル十九日登城首尾能相濟外、同

廿一日御奉書、阿部豊後守殿御宿ニ御渡被成外、右御

奉書五左衛門持參申外間、可被備 上覽外、御口狀等彼

人可申達外条不能審外、恐惶謹言、

朱力平

明曆元年 八月廿二日 嶋津中務 久茂判

嶋津 圖書殿

嶋津 筑前殿

鎌田 筑後殿

伊勢 兵部殿

新納 右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

人々御中

576 御文庫廿一番箱四拾九卷中

起請文前書之事

一乍恐申上り、光久様萬々年過り、自然之御時若後
生まで之御供可申上り間、被聞召置り可被下り事、

右之旨偽申上者

牛王神文略

明曆元乙未年八月吉日

御笠持

源太^印

577 十三番箱五十三卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見候、於紅葉山 ^(家光)大猷院様御堂御造畢付、御

入佛以後御参詣被遊之趣被承之、珍重被存之由得其意、

因茲被差越使者、入念り段及 台聴り、恐々謹言、

^{朱力キ}

明曆元年 九月五日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

578 御文庫廿番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在り

態以飛札致啓入り、然若其御地 ^(編久)薩州様御堅固ニ可被

為成御座と奉存り、當御地奉始少 ^(光久)將様御廉中様方一段

御機嫌能被成御座間可御心易り、中村佐五右衛門・

鎌田勘兵衛下着以後、其元之御左右一圓ニ無之、無御

心元存り、乍去嶋津但馬守殿方先月中旬之御状 ^(光久)羽林

様へ被進、其御地之儀も別条無御座由被聞召上、御悦

喜之由ニ、

一前ニ申越候寒中 上様窺御機嫌之御使者之儀、霜月中

句ニハ當地へ参着り様ニ其元発足可被仰付り、右御使

者にて来春 拾遺様其御地御登足時分之儀被窺事ニハ

間、功者之騎馬衆へ被仰付尤り、御進上物、御国看た

るへき由、先便ニ申越り、岩本清左衛門差出りニハ鯉

節御進上り間、其外之御國看被差越可然り、此儀若爰

元物奉行方其元御物座へ細々被申遣りハ人間、可有相

談と存事ニ、

一從志布志出船仕り大砲船、紀伊國ニ破損仕り、船頭

水手拾三人之内式人若紀州へ上りり、三人若阿波國方

上方へ參、帰帆之小船之もの見合ひ、其船之積荷を捨相助爲申由、其段大坂藏衆を申来りに付、松平阿波守殿へハ從 太守様以御使者御礼被仰入り、尤右之水手助船并阿波國を大坂迄送來り船之船頭・水手へ御礼物等之儀、大坂藏衆へ細く申越候、可被聞召置、一園田郷右衛門於當地申出、兄少兵衛儀、依科卯之年流罪被 仰付、嶋をも御免之様と被申上り間、ケ様成儀者於御元申上可然由申聞、於其地被聞召御相談可被成り、

一上野に御宿坊無之りてハ、萬事御公界に不成合由、物聞衆其外定御供被仕衆も被申に付、達 上聞明王院と申脇寺へ被仰定候、從諸大名衆高式百石之所務、國々之物成にして被遣由、自此方も御國之物成運賃引除米四拾石可被遣由、物聞衆被申定、次第に八家なども諸大名衆并に御作せ可被成との儀に、為御存、一鯨嶋孝左衛門死去に付る跡職之儀、第三次へ被 仰付可被下由、鎌田左京を被申出、無相違右三次へ被 仰付之旨 上意、名も右京と被下り間、高帳被相直り様、高所へ可被仰渡り、

一伊藤孫兵衛儀今一詰相詰り様と被 仰出、就夫付

衆之儀も此中被罷居り衆之内、兩人直に被詰り、兩人來春罷下に付、其替に當分爰元へ罷居り、書院振舞方之筆者川口麻右衛門、芝へ罷居り、宮之内藏介へ被致内談由に付、右兩人之儀、孫兵衛を被申出儀に、直に相詰可然之由申渡り間、其元を孫兵衛付衆不及被召上り、為御心得、

一松田了右衛門儀、身上行迫りに付、今度嶋津大膳殿之家來并に當地へ參り、來年在江戸被仰付り様、有度由、大膳殿を被為申出、又上屋敷御局も親類之故申分共、於罷成儀者來春之在江戸賦に被召加可然、猶期後喜之節、恐惶謹言、

朱子
明暦元年
九月廿二日

嶋津中務

久茂判

嶋津筑前

久頼判

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

嶋津圖書殿

人、御中

御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

明夜御玄猪付の、朝日之 御目見無之の間、不及登城の、
恐く謹言、

朱力半
明暦元年 九月廿九日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

十三番箱五十三卷中 光久公御譜中ニ在リ

明日朝鮮之信使、御礼申上之間、被着衣冠之裝束、辰刻
可有御登城の、恐く謹言、

朱力半
明暦元年 十月七日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

御法事相調申目出度存事の、出家衆六人、御相伴人野

村与右衛門殿・谷口助右衛門殿御兩所頼存の、随ふハ
高麗入之儀ハ文禄元年六月九日ニ唐人掛合申、伊勘解

由左老手数御をい被成、其場相のけ申、天下之御薬者
御付被成のへ共、六月十二日ニ御死去之由の、拙者

親、弥八左衛門ハ其傷故九日ニ戦死仕由の、道号之儀
承の、一山道寶居士にての、又蒲生衆中春田金兵衛と

申人、同九日ニ戦死被申、隈本金兵衛と申人者、伯耆
守殿御内衆之由の、大峯太郎次郎事、是も右同前之人

にてのへ共、高麗ニ別る御奉公為被申ニ付、御赦免
被成、今ニ其跡目御座の、御先祖伯耆守殿・勘解由左

老御名乗、次ニハ拙者親名乗も不存の間、爰元古衆へ
も相尋、承得のハ、重る可申上の、

一伊勘解由左老高麗へ御立之時分、上下四拾三人にて御
立之由、大 sources 左入道殿被仰の間、為御存知の、外ニ

我等親などハ参の由の、
一我等先祖伊作罷居、阿多御取ニ阿多へ被召移、数年

罷居、肝付御手ニ参り時分始良へ被召移、五六ヶ年も
罷有處ニ伊十院殿御持ニ付、如蒲生之伯耆守殿御供申
罷移、三年程仕のる高麗へ罷立御奉公申の、爰元古き

(挿心)

兩度御檢被下令拜見忝の、二七兵衛殿御越被成、爰元

衆口柄承り申上事ニ付、追申付、限元金兵衛事ハ

蒲生別當被仰付罷有付へ共、今ニ其跡無之付、為御心

得付、恐惶謹言、

明曆元

未十月廿日

滿尾弥八左衛門
貞信判

伊地知權左衛門殿

582 光久公御譜中

光久在江府之際養疴、故冬十一月請官暇而浴相州

熱海之温泉、

583 十三番箱五十三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様益御機嫌能被成御座付間可御心安

付、將又御看一種被獻之付、遂披露付處御喜色之御事

候、次其方儀仕合好御暇、熱海入湯之處、令相應重疊忝

之旨得其意付、是又及上聽付、恐々謹言、

朱力キ

明曆元年

十二月三日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

584 御文庫拾三番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様弥御機嫌能被成御座付間可御心

安付、將又其方儀、湯治令相應之間、今少入湯有之度由、

示預之趣承届付、緩々と在留尤付、恐々謹言、

朱力キ

明曆元年

十二月六日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

585 御文庫廿番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

口上之覺

一中村城之介歳暮之御祝儀為被仰入被召下付、熱海へ參

付而彼方直ニ罷立付間、巨細之儀筑前殿方可被仰

越付、

一若御前様急度可被遊御平産付、一入御機嫌能被成御座

付、為御見廻鎌田原左衛門芝へ被付置付、

一從薩州様窺御機嫌之為御使、川越新左衛門去月差出

外、御奉書出申外間差上申外、

一御即位正月廿三日ニあり、御使之儀、十三年已前之

御即位之時分使者位可然由被仰出外、從薩州様も御

使参儀も可有之と出合申外、兩人共ニ從當地参り可

有御座外、

一太守様弥湯治御相當ニ未御逗留被遊、御機嫌一段

と能御座外由承外、以上、

十二月十一日

源左衛門

中務

御國御家老衆中

586

光久公御譜中

急度令啓達外、仍今朝阿部豊後守殿於御館、御在江戸之

御大名衆留守居并御在國之御大名衆留守居被召寄外間、

右衛門佐罷出外處、おらんだ舟之儀ニ付外、御在江戸衆

へ者以覚書被仰渡外、御在國之御衆へ者御奉書出申候、

御意趣者阿部對馬守殿・豊後守殿御兩人ニ被仰出外御

口状も御奉書ニ無相違外、併前々被仰出外南蛮宗門之儀

者、御法度稿敷通、于今無相違外、此度被仰出外旨者お

らんだ人計之儀ニ外、それも右御奉書之旨ニ相替り、伴

天れんなどを乗来り、不審之躰相見得外ハ、各別之儀

ニ外間、能々入念可被相改之通堅被仰聞外、其御心得尤

ニ存外、右之趣早速被聞召御心得入儀ニ外間、態以飛脚

申入外、此等之段可然様御耳にも被入置、專一ニ存外、

恐惶謹言、

朱力キ

明暦元年

十二月十四日

新納右衛門佐

久詮判

嶋津圖書頭

久通判

川上因幡守様

北郷佐渡守様

顯娃左馬頭様

山田民部少輔様

人々御中

587

光久公御譜中

為歳暮之祝詞、小袖十到来忻覚外、委曲酒井雅樂頭可述

外也、

朱力キ

明暦元年

十二月廿七日

家綱墨印

薩摩少將殿

(種人)
御譜中ニ無之

合八拾七通

内四拾三通者正文之写

四拾四通者寫本及案文之写

右之本書者自曩祖至當孫深藏櫃中雖為家珍、此時被獻
太守光久公由、是称其報禮、已被宛行新恩三拾斛之地、
然共借物之未辨者多矣、被訴之於国老于時伊勢兵部少輔
貞昭・嶋津圖書頭久通・新納右衛門久詮・町田勘解由次
官久則・鎌田源左衛門尉政有、為評議賜白銀貳貫目餘、
悉被償之、且復為遺末代之龜鏡、依写本懇望不改一字一
点如本書写、以應其求者也、

明曆元年乙未十二月廿八日

鎌田筑後守

政昭 (花押 №7)

藤野久右衛門殿

(表紙)

| | | |
|--------|-------------|-----------------------|
| 追 録 | 光 久 公 | 自 明 曆 元 年 |
| 舊 記 | 綱 久 公 | 至 同 二 年 |
| 雜 録 | | |
| 卷 六 | | |

御文庫廿番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

態以追飛脚申外、仍金山酒之座之者共、從御國年内廿九日ニ愛許へ參外、正月早々ハ如何と存、今日罷出外由申外、右衛門佐所迄ニ、御國御家老衆よりの御状持來外間、則對面仕口上承外、此度御國元罷立外刻申外ハ、此中四月之間致逗留、何之由もなく罷上外儀迷惑ニ存外、
(北郷久加) 佐渡守殿儀何比可有御立哉承屈、それを京・江戸之み屋(マコ)

ニ可仕と以御使衆御尋申外、其御返詞ニ佐渡守殿御事、三日中ニ可被為立由被仰聞候間、定外頃者此許へ可有御着と存由申事ニ外、必定其分ニ御座外哉何共無心元儀ニ外、

於御國御年寄衆へも此段御申最ニ存外、ケ様ニせき外何も申外間、治定ハ頓る目安を指上可申外、其分ニ御座外とても、此方へ者佐渡守殿御上之儀も不承外間、不存通 御公儀へも可申上候、此中如申外弥金山にてつたい外衆之分ハ、不残被召列外様、御申肝要ニ外、其外彼者共申分承、咲止存外儀も御座外得共、書中ニ者不申得外間不能詳候、恐々謹言、

宋力キ
明曆二年 正月八日

新納右衛門佐
久詮判
鳴津圖書頭
久通判

相良權兵衛殿 御宿所

封面ノ如シ
相良權兵衛殿 久通

申正月八日ノ状同二月十七日ニ
披見、小森八兵衛持下り也、
一命山酒ノ座之衆、江戸へ參着申、
右衛門佐殿對面ニ而申分候事、
新納右衛門佐

590 御文庫廿番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

急度致啓入り、然者今晝寅之刻、芝御前様御男子被遊御平産、千秋万歳ニ奉存外、御産後別る御機嫌能被成御座

外間可御心易外、先く御吉左右為可申上如斯御座外、恐
惶謹言、

朱カキ
明曆二年 正月九日

鎌田源左衛門
政有判

(付紙)
「此御平産云々
十六日ノ書ト」

鳴津 中務
久茂判

参照同時知ルベシ

町田勘解由殿
(久惣)

新納右衛門殿
(久惣)

伊勢兵部殿
(貞四)

鳴津圖書殿
(久通)

人々御中

封面ニ左ノ如ク、名略

申正月九日之状、飛脚二月十五日ニ持下候、

御平産ノ儀也、

591 市正忠廣譜中

明曆二年正月九日忠廣上ニ著華洛ニ、是奉レ賀ニ主上即位ニ、
(後西天皇)

所レ獻之使也、同二十八日忠廣刷ニ裝束ニ而参内、捧ニ所レ

獻御大刀目錄ニ務レ使事、

592 御文庫式拾番箱四拾九卷中

御譜中ニナシ

一筆令啓入外、然者 若子様御七夜之御祝儀、昨日首尾
能相濟外、從松隱岐守様御名徳壽様と被附進、來國俊之
(松平定行)
御脇指代金拾貳枚之折紙物被進外、從 少將様も盛光之
(光久)
御脇指被進外、御髮立之儀者隱岐守様御奥方へ被成御頼
外、為御存外、恐惶謹言、

正月十六日

鎌田源左衛門
政有判

(付紙)
「此一書寛文八年申正月ノ場ニ光久公御譜中
載セテアリ、申年ノ間違ト見ヘタリ後考
ニ供ス、此徳壽君ハ御系図ニモ洩レタリ、」

鳴津 中務
久茂判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鳴津筑前殿
(久頼)

鳴津圖書殿

人々御中

封面ニアリ

申 正月十六日之状、二月十五日川上奎右衛門持下候、

一 若子様御名徳壽様と御附被成たる由也、

一 右同ニ付從 隠岐様脇指一ツ、鴨州様ヨリ脇指一ノ被進たる由候、

593 光久公御譜中

吳様之躰從 公儀稠就被仰出御禁止

一 からほうし・毛きんちやくの事、

一 たんたら筋の衣類之事、

付 草帯之事、

一 刀毛のすふくろの事、

付 犬まねきの事、

右之外にも目立儀仕間敷り、此中も 公儀御目付衆違

様之者被捕、御法度之御扱有之儀り間、慥に其心得可

仕者也、

明曆二年正月十九日

源左衛門

中 務

掟

一 天下御法度之趣、別ニ掟書有之、謹而可得其意事、

一 公方様御成之刻、長屋之窓槌相閉、不致物音可罷在、

勿論忍り見る見物可停止事、

一 常々於長屋、高雑談・咄・小歌令法度り付、長屋廻辻

歌一切停止之事、

一 屋形中、碁・将碁・双六之盤上仕間敷事、

一 御供に可罷出刻、十七歳以下之草履取召列儀令法度事、

一 身躰に不似合為躰、就中酒女之嗜可為停止事、

一 私之宿意有之、其趣不致披露、於御屋敷中、猥に相果

輩者左右理非之沙汰有之間敷事、

一 長屋火之廻、無緩様ニ節々悴者共ニ可申付事、

一 就先忠古訴詔、或御國に不相濟口事篇、或葎子并跡

継之儀申出間敷事、

一 路次に立者に見合たらん刻者、時之主人を尋究、其

所へ付届可申付、猥に押取間敷事、

一 見物并物詣令停止、就中浅草・山王兩所之祭禮日、下

々至迄、御門外へ不可出、尤無扱仕合之刻者、御使番

衆へ可致披露事、

一 在江戸交替之刻、直ニ可相詰との訴詔申出間敷事、

一 於番所高雑談惣別無作法之儀仕間敷り、其趣者番帳之

奥書に有之之事、

一 伺公仕罷在刻、御客人手を上ケ御禮儀被成り者、律儀

に禮儀可仕事、

一 近所に火事可有之時者、定置如賦之、それくの役儀

可相調事、

一 一季之者相抱儀令禁止事、

付 居付之衆者制外之事、

一 玄喚之邊又被官木履はく事、

付 同所寢儀令停止事、

一 長屋之しころに、あかり行通間敷事、

一 諸士從御國召列被官之者、帰國之時分、猥召置儀令停

止、若不叶儀於有之者、致披露其上を以、證文取替可
召置事、

一 又被官雅意躰者、其主人可為越度、連々律儀可有之様

ニ申付儀可為肝要、其上無作法之者ハ小者下知之足輕
衆可致打擲由申付置外事、

一 下々之者、町屋ニ出酒吞儀、堅從主人法度可申付、就

中御屋敷中ニ酒商賣之儀、一切停止之事、

一 又被官互之振舞酒盛停止之事、

一 右同断之者之類、互ニ入魂振、就中私ニ刀賣買停止之

事、

一 從御屋敷中、酒可取寄刻者、幾度も札ニ可召寄、猥

ニ下々出入いたす由外間、主人より堅可申付事、

一 札出入掟之条書之趣、聊尔於有之者、當番可為越度事、

右條々相守其趣、堅可致御奉公、若於相背族者、撰其

輕重或科銀・科番、或可被處嚴科者也、

明曆二年正月十九日

源左衛門

中務

光久公御譜中

覚

禁裏
一 銀子 參拾枚

仙洞
一 銀子 貳拾枚

新院御所
一 銀子 二十枚

女院御所
一 銀子 拾枚

女御之御方
一 銀子 五枚

右者就御即位、三十万石以上之面々より可差上之、

宋力キ
明曆二年正月

596 光久公御譜中

覚

吉良若狹守殿ヨリ被下候御書出之写
上村茂兵衛致何公申受候、

一 禁裏・仙洞・新院御所・女院御所へ太刀目録之事、

一 女御之御方に目録計、但紙一重立目録之事、

一 御祝儀上り外日辰之刻ニ、

禁中江可被参事、

一侍従以上之使者、布衣之装束、其外者烏帽子素袍可為着用事、

一太刀目錄御所方ニ有、つきくハ衆、被請取り間、使者衆直ニ被相渡、馬代者家来之者被相残りて被請取り方へ相渡り事、

以上、

^{朱力キ}明暦二年 正月十九日

光久公御譜中

以三承應三年九月二十日

後光明院崩御、今歳明暦二年丙申正月二十三日

後西院帝即位也、光久豫差三島津市正忠弘於京師、同二

十八日奉レ獻御太刀一腰・白銀三十葉于三

禁裏、御太刀一腰・白銀二十葉于三

仙洞、御太刀一腰白銀二十葉于三

新院、白銀十葉于三 女院、同五葉于中 女御上也、

正月廿三日為 御即位御祝儀、五万石以上之從諸大名

衆、御太刀馬代上り帳、

廿五日

從 公方様上物御太刀一腰 長直

銀子 五百枚

越前綿 五百把

同日

一 拾貳万石 (頼重) 松平右京大夫

馬代金子 壹枚

綿 貳百把

一 馬代 銀壹枚 (義冬) 吉良若狹守

蠟燭 五百挺

一 馬代 金壹枚 (親成) 牧野佐渡守

一 六拾壹万九千五百石 (光茂) 尾張殿

一 馬代 銀三十枚 竹腰山城

一 五拾五万五千石 紀伊殿

一 同 三枚 (重長) 水野淡路

一 馬代 銀拾枚 (光昌) 紀伊宰相殿

一 式拾八万石 (頼房) 水戸殿

一 馬代 銀貳十枚 (信也) 中山備前

一 馬代 銀五枚 (光通) 水戸中將殿

一 同人

同人

是方正月廿八日

一 廿貳万貳千七百石

小松中納言 (前田利信)
松平肥前守

馬代 銀貳十枚

中將之次第

一 貳拾五万石

三位中將
松平越後守

馬代 銀貳十枚

一 三拾万石

(直孝)
井伊掃部頭

同 三十枚

松本五郎兵衛

一 貳拾三万石

(正之)
保科肥後守

同 貳十枚

久保助兵衛

少將之次第

一 六拾貳万石

仙台少將
松平陸奥守

同 三十枚

柴田内藏介

一 三拾壹万五千石

備前少將
松平新太郎 (池田光政)

同 三十枚

池田下総 (長泰)

一 六拾万五千六百石

商摩少將
松平藤摩守 (光久)

同 三十枚

嶋津市正 (忠廣)

一 四拾五万石

越前少將
松平越前守 (光通)

同 三十枚

松田主水

一 八拾万石

加賀少將
松平加賀守 (前田綱紀)

同 三十枚

因幡少將
小塚藤左衛門 (池田光仲)

一 三拾貳万石

松平相摸守

同 三十枚

池田筑後

一 拾万石

前橋少將
酒井雅樂頭 (忠清)

同 貳拾枚

松田次左衛門

一 拾貳万三千六百石

若狹少將
酒井讚岐守 (忠勝)

同 貳十枚

酒井内匠

一 五万石

山田少將
板倉周防守 (重宗)

同 十枚

(マ)

侍從之次第

一 廿万貳千六百石

土佐侍從
松平土佐守 (山内忠義)

同 貳十枚

百々刑部

一 三拾五万七千石

肥前侍從
鍋嶋信濃守 (勝茂)

同 三十枚

鍋嶋石見

一 四拾貳万六千五百石

安藝侍從
松平安藝守 (浅野光俊)

同 三十枚

上田主水

一 貳拾万石

佐竹侍從
佐竹修理大夫 (義隆)

同 貳十枚

佐竹河内

一 貳拾五万七千石

阿波侍從
松平阿波守 (蜂須賀忠孝)

同 貳十枚

嘉嶋長門

一 五拾四万石

肥後侍從
細川越中守(綱利)

一 五万石

越前大野侍從
松平但馬守(貞良)

同 三十枚

一 卅六万九千四百石

長門侍從
清水伯耆守(毛利綱廣)
松平大膳太夫

一 七万五千石

丹後侍從
酒井弥兵衛
京極丹後守(高國)

同 三十枚

一 三拾万石

米沢侍從
井原彈正
上杉播磨守(綱勝)

一 拾八万六千石

美作侍從
森内記(マモ)

同 三十枚

一 拾五万石

松山侍從
色邊安房
松平隱岐守(頼重)

一 同 廿枚

侍從
長尾隼人
織田出雲守(貞隆)

同 式十枚

一 七万五千石

川越侍從
奥平源兵衛
松平伊豆守(信綱)

一 五拾貳万三千四百石

筑前侍從
生駒吉左衛門
松平右衛門佐(黒田光之)

同 十枚

一 六万石

おし侍從
中村清兵衛
阿部豊後守(忠秋)

一 同 三十枚

伊賀侍從
小川平左衛門
藤堂大学頭(高次)

同 十枚

一 拾八万六千石

出雲侍從
秋山治部衛門
松平出羽守

一 貳万石

對馬侍從
藤堂采女
宗對馬守(義成)

同 廿枚

一 拾万石

伊達侍從
仙石角左衛門
伊達遠江守(秀宗)

一 同 十枚

本マ、
井伊靱負(貞隆)
木戸三右衛門

同 廿枚

一 拾万石

井上五郎兵衛
松平淡路守(利次)

一 同 十枚

戸塚左太夫
保科長門守(正頼)

同 廿枚

一 七万石

淺野將監
松平飛騨守

一 同 十枚

高橋一郎左衛門

同 拾枚

山崎彦兵衛

一 拾壹万石

四品之次第
立花左近將監(忠茂)

| | | | | | |
|---|-------|-----------------------------|---|-------|----------------------------|
| 一 | 同 廿枚 | 矢福主水 | 一 | 拾壹万石 | 松平攝津守 <small>(定良)</small> |
| 一 | 拾五万石 | 松平式部太輔 | 一 | 同 廿枚 | 吉村將監 |
| 一 | 同 廿枚 | 仁木半右衛門 | 一 | 拾四万石 | 酒井攝津守 <small>(忠登)</small> |
| 一 | 拾万石 | 丹羽左京大夫 <small>(光重)</small> | 一 | 同 二十枚 | 末松善左衛門 |
| 一 | 同 廿枚 | 丹羽主膳 | 一 | 拾万石 | 戸田采女正 <small>(氏信)</small> |
| 一 | 拾五万石 | 本多内記 <small>(政勝)</small> | 一 | 同 廿枚 | 岡田忠右衛門 |
| 一 | 同 廿枚 | 左野一郎左衛門 | 一 | 拾万石 | 水野日向守 <small>(勝貞)</small> |
| 一 | 拾五万石 | 小笠原右近大夫 <small>(忠真)</small> | 一 | 同 廿枚 | 今井藤左衛門 |
| 一 | 同 廿枚 | 矢部善右衛門 | 一 | 拾万石 | 南部山城守 <small>(重直)</small> |
| 一 | 拾壹万石 | 奥平美作守 <small>(忠貞)</small> | 一 | 同 廿枚 | 東風又兵衛 |
| 一 | 同 廿枚 | 山崎半藏 | 一 | 八万石 | 小笠原信濃守 <small>(長次)</small> |
| 一 | 拾五万石 | 松平下総守 <small>(忠弘)</small> | 一 | 同 十枚 | 土肥加、右衛門 |
| 一 | 同 廿枚 | 栗田重兵衛 | 一 | 拾貳万石 | 本多能登守 <small>(忠義)</small> |
| 一 | 拾万石 | 永井信濃守 <small>(尚政)</small> | 一 | 同 廿枚 | 村上惣左衛門 |
| 一 | 同 廿枚 | 坂和田喜六 | 一 | 拾三万石 | 真田伊豆 <small>(信之)</small> |
| 一 | 拾五万石 | 松平大和守 | 一 | 同 廿枚 | 本マ、 |
| 一 | 同 廿枚 | 土來八郎右衛門 | 一 | 七万石 | 中川山城守 <small>(久清)</small> |
| 一 | 諸大夫次第 | | 一 | 同 十枚 | 桂重兵衛 |
| 一 | 五万石 | 松平中務少 | 一 | 七万石 | 本田下総守 <small>(俊次)</small> |
| 一 | 馬代銀十枚 | 岡谷才兵衛 | 一 | 同 十枚 | 本田伊織 |

| | | | | | |
|---|---------|-----------------------------|---|---------|-----------------------------|
| 一 | 七万石 | 牧野飛彈守 <small>(忠成)</small> | 一 | 六万石 | 加藤出羽守 <small>(泰興)</small> |
| 同 | 十枚 | 毛利又兵衛 <small>(忠興)</small> | 同 | 同 | 小折安兵衛 <small>(信久)</small> |
| 一 | 七万石 | 内藤帯刀 <small>(忠興)</small> | 一 | 五万七千石 | 伊東大和守 |
| 同 | 十枚 | 久瀬与兵衛 | 同 | 同 | 伊木文右衛門 <small>(利長)</small> |
| 一 | 七万石 | 松平丹波守 <small>(台田光重)</small> | 一 | 五万石 | 本多越前守 |
| 同 | 本マ、 | 同七郎右衛門 | 同 | 同 | 黒石平内右衛門 <small>(安政)</small> |
| 一 | 八万三千石 | 大久保加賀守 <small>(忠勝)</small> | 一 | 五万五千石 | 脇坂中務少 <small>(安政)</small> |
| 同 | 同 | 小嶋儀兵衛 | 同 | 同 | 脇坂正右衛門 <small>(駿純)</small> |
| 一 | 七万石 | 水野出羽守 <small>(忠勝)</small> | 一 | 五万三千五百石 | 有馬左衛門佐 <small>(駿純)</small> |
| 同 | 同 | 成川源五兵衛 <small>(新権)</small> | 同 | 同 | 津田平丞 |
| 一 | 六万三千貳百石 | 松浦肥前守 <small>(新権)</small> | 一 | 五万石 | 稻葉能登守 <small>(信通)</small> |
| 同 | 同 | 山田治部左衛門 <small>(高和)</small> | 同 | 同 | 後藤壱岐 |
| 一 | 六万石 | 京極刑部少輔 <small>(高和)</small> | 一 | 五万石 | 松平周防守 |
| 同 | 同 | 篠原弥五兵衛 | 同 | 同 | 大田權兵衛 |
| 一 | 六万石 | 仙石越前守 <small>(政俊)</small> | 一 | 七万石 | 松平山城守 <small>(忠國)</small> |
| 同 | 同 | 武村二郎右衛門 <small>(正誠)</small> | 同 | 同 | 玉作四右衛門 <small>(憲之)</small> |
| 一 | 六万石 | 戸澤能登守 <small>(正誠)</small> | 一 | 五万石 | 石川主殿頭 |
| 同 | 同 | 安藤三郎右衛門 | 同 | 同 | 加藤齋介 |
| 一 | 六万石 | 岡部美濃守 <small>(真勝)</small> | 一 | 五万石 | 小出大和守 <small>(吉英)</small> |
| 同 | 同 | 堀主膳 | 同 | 同 | 川口長左衛門 |

| | | | | | |
|---|---------|----------------------------|---|---------------------|---------------------------|
| 一 | 五万石 | 溝口出雲守 <small>(基直)</small> | 一 | 五万石 | 水野監物 <small>(忠善)</small> |
| 同 | | 南六郎右衛門 | 同 | | 村四郎兵衛 <small>(重良)</small> |
| 一 | 五万五千石 | 秋田安房守 <small>(盛季)</small> | 一 | 六万六千六百石 | 安藤右京進 |
| 同 | | 細川藏人 | 同 | | 安平喜左衛門 |
| 一 | 五万石 | 内藤豊前守 <small>(信照)</small> | 一 | 六万石 | 松平和泉守 <small>(兼久)</small> |
| 同 | | 小池半右衛門 | 同 | | 并川團右衛門 |
| 一 | 五万石 | 山崎虎之助 <small>(台範)</small> | 一 | 五万石 | 黒田甲斐守 <small>(長興)</small> |
| 同 | | <small>(マ)</small> | 同 | | 宮崎左兵衛 |
| 一 | 五万石 | 松平若狭守 <small>(康信)</small> | 一 | 馬代銀拾枚 | 浅野因幡守 <small>(長治)</small> |
| 同 | | 松平与三兵衛 <small>(正信)</small> | 一 | 同 拾枚 | 浅部源太夫 |
| 一 | 拾壹万石 | 堀田上野介 <small>(正信)</small> | 一 | 同 拾枚 | 浅野内匠頭 <small>(長直)</small> |
| 同 | 同 廿枚 | 志賀理右衛門 | 一 | 一式拾壹万石 | 山脇弥五右衛門 |
| 一 | 九万八千石 | 阿部備中守 <small>(定高)</small> | 一 | 同 廿枚 | 有馬松千代 <small>(頼利)</small> |
| 同 | 同 十枚 | 齋藤甚右衛門 | 一 | 馬代銀拾枚 | 小林六郎兵衛 |
| 一 | 拾三万五千石 | 土井遠江守 <small>(利隆)</small> | 一 | 從禁裏 上使被下置位階從四位上官少將、 | 相馬長門守 <small>(忠胤)</small> |
| 同 | 同 廿枚 | 白崎久太夫 | | 御太刀 大原実盛 | 大浦庄右衛門 |
| 一 | 八万五千石 | 稲葉美濃守 <small>(正則)</small> | | 右ハ右京大夫殿へ | |
| 同 | | 國枝惣右衛門 <small>(正和)</small> | | 御同所ヨリ | |
| 一 | 五万式千五百石 | 井上河内守 | | | |
| 同 | | 稻垣勘右衛門 | | | |

位階從四位上位階計

右ハ吉良殿へ

仙洞ヲ拜領

紅白絹拾疋宛

右京殿・吉良殿へ

先年之

御即位上リ物覚

禁中

御上使

御太刀 吉家 酒井讚岐守

御馬代銀五百枚

綿 五百把

同

御上使

御太刀・遣太刀 松平伊豆守

御馬代銀三百枚

若公様方

仙洞

御太刀 長光

御馬代銀三百枚

同

御太刀

御馬代銀貳百枚

新院御所様 御太刀

御馬代 貳百枚

繻絁 十卷

同

御太刀

御馬代 百枚

女院御所様

貳百枚

しゅちん 十卷

同

百枚

已上、

御太刀・馬代 銀三十枚

右同断 尾張大納言殿

紀伊大納言殿

御太刀・馬代 銀貳拾枚

水戸中納言殿

右上使次ニ尾張・紀伊

水戸御使何も襲束冠

諸大夫 同へ上ル

諸大名御祝儀、

五万石方九万石迄銀五枚、拾万石方拾九万石迄同十枚、

貳拾万石方四拾万石迄同廿枚、四拾万石方百万石迄同

三十枚、右之使者侍位以上之布衣諸大夫、御長袴長橋

殿へ上ル、但右之定少高下有之、

讚岐守

銀三拾枚、伊豆守貳拾枚、周防守拾枚、諸大名之中にも少く高下有之、断有之、太刀下官請取、

高木伊勢守(守久)

被納早

今度大隅守使者

嶋津市正自分進上覚

一 牧野佐渡守殿へ毛(籠)種(た)五枚・太刀・馬代銀壹枚、

右ハ御請取被成り、

一 吉良若狹守殿へ太刀・馬代銀壹枚右ハ御返し被成り、

一 松平右京太夫殿へ太刀・馬代銀壹枚是も御返し被成り、

外、

一 清閑寺一位殿

一 野々宮大納言殿

一 小川坊城大納言殿

右之御三人へ太刀・馬代銀壹枚ツ、

明曆二年正月朱力半

光久公御譜中

正文在文庫

今度就 御即位、御祝儀被差上令披露、首尾能珍重存り、

將又私に及為御祝儀、御太刀・馬代銀子三枚并御樽壹荷、

看兩種過分之至存り、尚期後音之時り、恐く謹言、

清閑寺前大納言朱力半

明曆二年 正月廿九日

松平大隅守殿

(本文ハ五三八号文書ニ同シ)

599 全上

一 筆致啓上り、今度就 御即位、以使者御祝儀被仰上り、

禁裏院中首尾能昨廿八日相濟申り、随ひ拙者方へ御看二

種・兩樽被懸御意忝奉存り、委細嶋津市正方可被申上り、

恐惶謹言、

中川飛彈守朱力半

明曆二年 正月廿九日 忠幸判

松 大隅守様

人々御中

(本文ハ五三九号文書ニ同シ)

600 光久公御譜中

正文在文庫

今度 御即位相濟_レ、被成御祝儀私式へも二種・兩樽被懸貴意、嶋津市_(兼志)正_レ方被致持参、誠以忝奉存_レ、猶期後音之時_レ、恐惶謹言、

朱カキ
明曆二年 正月廿九日

松 大隅守様

人々御中

(義緒)
(本文ハ五四〇号文書ニ同シ)

青木遠江守
判

601 正文在文庫

尚以私方へも為御祝儀、諸白兩樽并干鮪一箱・昆布

一箱被為懸御意、御事多中過分至極奉存_レ、以上、

今度就 御即位、御使者御登

禁裏、為御祝儀御太刀・御馬代御指上、則傳奏衆被遂御

披露_レ處、御機嫌之御事ニ御座_レ、委細御使者嶋津市正

殿へ申達_レ、恐惶謹言、

朱カキ
明曆二年 正月廿九日

松平大隅守様

人々御中

(守久)
(本文ハ五四一号文書ニ同シ)

高木伊勢守
判

602 光久公御譜中

正文在文庫

一筆致啓上_レ、去ル廿三日 御即位首尾能相濟、万民恐

悦不過之奉存_レ、因茲御使者廿八日

禁裏 院中 女御之御方_レ御祝儀御目録之通、御作法能

差上_レ被申_レ、委細ハ嶋津市之正殿可被仰入候、随_レ拙

者式迄御看式種・兩樽被掛御意、誠以忝奉存_レ、尚期後

喜之節_レ、恐惶謹言、

朱カキ
明曆二年 正月廿九日

松平大隅守様

人々御中

(本文ハ五四二号文書ニ同シ)

深津越中守
正貞判

603 正文在文庫

一筆致啓上_レ、今度就 御即位以御使者御祝儀献上被成

_レ、昨廿八日依吉辰

禁裏 院中、御祝儀首尾残所無御座御祝儀上_レ申候、安

尊慮可思召_レ、次拙者_レニ二種・兩樽被懸貴意、過分至極

奉存_レ、委細御使者可被申上_レ、恐惶謹言、

明曆二年 正月廿九日

野々山丹後守
(兼綱)

判

松 大隅守様
參人、御中

(本文八五四三号文書二同シ)

正文在文庫

尚以御祝儀被成、自分へも御樽壹荷・御肴二種被懸
貴意忝奉存外、以上、

一筆致啓上外、然者去ル廿三日 御即位首尾能相濟、萬
民恐悦不可過之、珍重奉存外、因^{本マ、(茲カ)}御使者廿八日 禁裏
院中 女御御方^ハ御祝儀御目錄之通御作法克指上ケ被申
外、委曲御使者可被仰入外、恐惶謹言、

^{朱カキ}明曆二年 正月廿九日 大岡美濃守 忠吉判

松平大隅守様

(本文八五四四号文書二同シ)

光久公御譜中

正文在文庫

一翰令啓入外、今度就 御即位為御祝儀使者被指登之處、
首尾好遂披露目出度令存外、將又自分^ハ御太刀一腰・御
馬一疋并兩樽・二種贈給令祝着外、猶期後慶之時外、恐
々謹言、

^{朱カキ}明曆二年 正月晦日 野宮大納言 定判

松平大隅守殿

(本文八五四五号文書二同シ)

光久公御譜中

正文在文庫

為 御即位之御祝儀、

院御所^ハ御名代被為差上、殊馬・太刀御進献外、御機嫌
之御事候、相心得可申入旨被 仰下外、次自分^ハ及御馬・
太刀・御樽壹荷・御肴二種被掛御意忝存外、委曲市正^(忠匹)
御礼申入外条不能詳候、恐々謹言、

二月朔日

薩摩少將殿

(本文八五四七号文書二同シ)

正文在文庫

今度為御即位御祝儀、被差上御使者候付、貴札致拜見外、
先月廿三日天氣迄能相濟、千秋万歳目出度奉存外、
禁裏院中^ハ各様御進物等首尾好相納外間、御心易可被思

召_レ、猶嶋津市正方可被申宣_レ、恐惶謹言、

朱力キ
明曆二年 二月朔日

牧野佐渡守 親成判

松平大隅守様

貴報

(本文ハ五四八号文書ニ同シ)

608 光久公御譜中

正文在文庫

為 御即位首尾能相濟申_レ御祝儀、御使者殊御太刀一腰・御肴三種・御樽兩樽・御馬代黄金十兩被懸御意、過分至極奉存_レ、猶期後音之時_レ、恐惶謹言、

朱力キ
明曆二年 二月朔日

牧野佐渡守 親成判

松平大隅守様

人々御中

(本文ハ五四九号文書ニ同シ)

609 光久公御譜中

明曆二年二月十三日

家綱公以_二能勢小十郎_一、爲_二上使_一、拜_二惠御應所_レ摯之鷹兩箇_一、

610 御文庫廿番箱四拾九卷中 光久公御譜中ニ在リ

先月廿七日之御状、去ル十三日伊集院庄右衛門致持參得其意_レ、先以 薩州様御機嫌能廿七日ニ鹿兒嶋御發足之由、目出度奉存_レ、右之旨則 少將様并上下之御與方へも申上_レ、一段御満悦之御事ニ御座_レ、其外被仰越_レ儀共後便ニ可申入_レ、

一少將様御事、當年御受厄ニ_レ、

薩州様 虎壽様儀も御厄ニ_レ申_レ間、於當御地も御祈禱被仰付_レ、乍不申於其御地も、御祈念被仰付肝要ニ存_レ、御由断老御座有間敷儀ニ_レへとも為御心得令申入_レ、

一去ル十三日能勢小十郎殿為 上使、御鷹之鷹二羽被遊御拜領_レ、例年無御座儀ニ_レ、一入目出度奉存事ニ_レ、各可為御同意と存_レ、

一太守様當年老東目可被遊 御下向之旨、以伊東三左衛門被仰出_レニ付_レ、東目御供之人數賦并西目被罷下衆之書立差越_レ、東目ニハ今少人数可相重儀も_レハんと存_レへ共先々大抵之賦如斯_レ、於其元夫馬彼是之儀、無御由断可被仰付置_レ、

一太守様御暇出其御地へ御着之翌日御礼之御使者被差上

儀二外、就其鳴津豊前・入來院石見・肝付半兵衛・吉
利仲四郎(久遠)・樺山長門・川上上野右六人書付外て備上
覽外処ニ、右之内川上上野へ御札之御使被申付置可然
外、若又上野差合之儀外ハ、遠近以見合可被申付置由
被仰出外、

一御南戸衆一人、早晚參元御留守ニ被召置外ニ付、野津

弥五左衛門可罷上之由被仰付外へ共、申分之儀共外ニ

付、當年之上洛被差免外、頃日誰人可被召置哉之由、

窺御意外處ニ、最上七郎右衛門御跡ニ一節可被召置外

間、伊東源次へ御南戸役被申付、其元仕廻次第罷上、

七郎右衛門へ替合外様ニ可被申渡由、被仰出外、

一其元源左衛門罷立外時分、各方被仰聞外金山之儀、松

隱岐守様御當地へ被成御座儀ニ外間、無御失念御相談

も御座外様ニと可入御耳之由承置外、其段頃日伊東三

左衛門を以達 上聞外之処ニ、少も御失念不被遊之旨

御意外、為御存外、恐惶謹言、

宋力キ
明曆二年 二月十六日

鎌田源左衛門
政有判

鳴津 中務

久茂判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

鳴津筑前殿

伊勢兵部殿

鳴津圖書殿

人、御中

611 光久公御譜中

正文在文庫

一書致啓上外、然者鎌田筑後殿御事御評定所方御文書之

儀、被聞召外、其上鳴津圖書殿御同前ニ吳国方并宗躰方

御當ニ付、万事圖書殿迄御相談入儀ニ由外条、筑後殿儀

圖書殿与ニ可被為入之旨

上意外間、左様ニ御心得可被成外、我等御使仕外故如此

御座外、恐惶謹言、

宋力キ
明曆二年 二月十七日

伊東三左衛門
祐玄判

鳴津 圖書様

伊勢 兵部様

新納右衛門様

町田勘解由様

鎌田源左衛門様

參入、御中

612

綱久公御譜中

同二年丙申 正月二十七日綱久發國參覲、諏方左右衛門兼
利扈從而經三西海、三月十七日參三府東都、其後登レ

營而奉レ見三子

將軍家綱公、獻三上御太刀一腰・綿百把・馬代黄金十

兩、

613

御文庫廿一番箱四拾九卷中

天罰靈社起請文前書事

一 乍恐申上レ、光久様万々年過レ而自然之御時考、慕

御跡二世迄之御供可申上レ事、

一 祖父・親・我等迄三代御奉公申来レ、高も式百石餘持

来レ之間、如何様成御奉公も、高相應ニ被仰付被召仕

可被下レ事、

一 右之通無別心奉存レ而罷有レ之間、自然聞召被掠儀御

座レハ、何時も被遂御糺明可被下レ事、

右之條々於偽申上レ者

牛王神文略

明曆第二丙申年二月吉日

江川勝左衛門

満寛判

天罰靈社起請文

江河勝左衛門

満寛敬白

614

御文庫廿壹番箱五拾卷中

天罰靈社起請文前書之事

一 乍恐申上レ、今度被召出忝被召仕難有奉存レ事、

一 光久様自然之御時考二世迄之御供可申上レ事、我等無

調法者之儀ニ御座レ之間、自然被掠聞召レ儀御座レハ

、被遂御糺明可被下レ事、

右之條々於偽申上レ者

牛王神文略

明曆二年丙申二月吉日

肥田木正右衛門

重盛判

615

御文庫式拾壹番箱五拾卷中

天罰靈社起請文前書之事

一 去年レ存含罷有、不及申上と存レへとも、於今生為一

言御約束申上置レ、我等事身行詰及迷惑レ処ニ、入

御耳被召出、誠御厚恩之程難申上候事、御奉公御一代

ニ存定レ、責レ御厚恩不致忘却之趣、千々万々歳相終

レ已後考、乍恐 御跡慕可申候事、

一不依何色御為可惡と見及聞及外ハ、縦雖為縁者親類、

早速可致言上候、又ハ於身上被掠聞召之儀外ハ、何時及被遂御糺明可被下候事、

右之条々於偽申上者、

明曆二年丙申二月吉日

有川權右衛門
貞乘判

天罰靈社起請文

有川權右衛門
貞乘敬白

616

(押入)

以上

貴方御家之書物御見せ被成外、具見届申候、就中於高麗
者、祖父勘解由殿為被成御奉公儀、我等為承及事共外哉
如何之由被成御尋外、父左近將監久辰入道為被申筋、御
書物之趣ニ少も不相替候、義弘様 久保様小勢にて、都
より奥江原道之敵國ニ被成御座由相聞得、纒之人數にて
御通之儀、無比類儀外由御沙汰之通承及外、任御尋一筆
如此候、恐惶謹言、

明曆二年丙申
三月三日

川上因幡守

久國(花押No.8)

伊地知權左衛門殿

人々御中

617

御文庫二十一 番箱五十卷中 光久公御譜中ニ在リ

應用飛札外、徳壽様御誕生之後不被成御進外ニ付、井
上宗悦へ御療治方被成御頼外へ共、然と御引分も無之ニ
付、頃日老吉田長安御葉御用被成、漸々御快氣之様ニ外
處ニ、一昨晚方驚風心ニ御座外故、昨朝隠岐守様・少將
様下御屋敷へ被成御出、御相談上ニある小嶋圓齋と申醫師
へ養生被成御頼、御葉被為上外へ共、無其驗今朝卯之刻
ニ被成逝去外、笑止千万之至奉絶言語外、恐惶謹言、

朱力キ
明曆二年

三月九日

鎌田源左衛門
政有判

鳴津 中務
久茂判

鳴津圖書殿
鳴津筑前殿
伊勢兵部殿
新納右衛門殿
町田勘解由殿

封面ニ

明曆二年丙申三月廿三日飛脚持下外、

一徳壽様三月九日ノ朝御逝去之由候、外名宛附、

前書ノ添書

德壽様御仕合ニ付爰元ハ御隠蜜被成筈ニ相談仕、其御意得可被成、

朱力キ 明曆二年 三月九日

鎌田源左衛門

鳴津 中務

町田勘解由殿

新納右衛門殿

鳴津筑前殿

伊勢兵部殿

鳴津圖書殿

此德壽様ハ明曆二年甲申正月九日御誕生云々、同日ノ書中ニ見エ、六十日目御天亡ナリ、

進上之疏、礦目録之通、遂披露候之處、一段之御仕合、恐

く謹言、

朱力キ 明曆二年 三月廿一日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

三月三日之貴札令拜見、仍綱久様海陸御機嫌能去月十七日ニ御参府被遊、左様成為御祝儀田尻八兵衛被召登せ、則

酒井雅樂守 忠清判

松平大隅守殿

御使札令披見、然者従大明勅使船上下人数百八人、去正月廿日(マ)疏致へ着岸之由、就其書物之写四ツ并唐兵乱之様子、此度之使者口柄聞書、被入御念早々御越巨細得其意申、猶御使者可為演説、恐く謹言、

朱力キ 明曆二年 三月廿一日

山崎權八郎 正信判

嶋津彈正殿

北郷佐渡殿

頼娃左馬殿

山田民部殿

正文在文庫

三月三日之貴札令拜見、仍綱久様海陸御機嫌能去月十七日ニ御参府被遊、左様成為御祝儀田尻八兵衛被召登せ、則

綱久様 御前様ニ申上候、御悦喜被遊之段 御意にて、
委曲八兵衛可被申上、間、不能細筆候、恐惶謹言、

朱カキ
明暦二年 卯月四日

諏方左右衛門

兼利之
判

町田勘解由様

伊勢兵部様

鎌田筑後様

嶋津筑前様

嶋津圖書様

参貴報

光久公御譜中

正文在文庫

猶も彼春齋儀者御即位ニ付、父子共ニ上洛にて、万
事取おこないの儀も被為知、儀ニ、間、よそくの
やうニ尋申、為御存、ハ、返、前代にも世上二年
号二ツ御座、儀ハ、殊外天下之御凶例と相聞得、外、
爰元上方へ無之改元、御国へ御取持、事笑止之至不
浅存、間、能く御驚、外、御国へも耦敷被仰下、申
出、外人之御糺明被成へく、御油断有間敷、乍重
言為御存、以上、

態令啓、然、今度為御代官宇都長兵衛尉被参、其送
状ニ慶喜二年と有、外、何方より改元之由御到来にて御
國中改、外、哉、希代不思議成仕合、天下之改元之刻者仰
出有、外、間、右之様子承、外、ハ、拙者共前よりも可申上、
又京都にて 仰出、外、ハ、御藏衆よりも可被申上、餘不
審ニ存、外、川元源八左衛門尉此度為御使被指上、間、
召寄、兩人前ニ相尋、外、ハ、此度札改、にも年号御替、外、由、
扱、笑止千万成仕合、外、御横目衆有之事ニ、間、御年
寄中御耳、にも可入、世間之御批判無御面目儀、外、餘
之事ニ源八左衛門尉へも何たる證拠にて左様ニ被遊、外、哉
と尋申、外、ハ、若新曆ニ左様之開板之儀もや、外、半様ニ被
申、外、誠ケ様之儀仕ものハ、実正之沙汰をも不存、不実之
儀迄にて身を持事前代より無其隠、外、今少可被成御思慮
儀ニ、外、處、中、無是非事、外、右之儀迄ニ彼飛脚者指
下、外、間、早、御国へも被仰遣、札之誤をも御、外、けつらせ可
然存、外、尤御着船、外、ハ、爰元迄之道中之御心持、にも成事
ニ、外、餘不審ニ存、道春之御息春齋へ、外、遣申、外、其返事
如此申来、外、間、被成御覽可目出度、外、我、兩人之驚難盡
筆紙、外、西國之儀ハ、外、国はし、にて、外、間、縦改元之儀有、外、外、
も前之年号なにて一兩月ハ、外、押移、外、外、こそ遠國之驗、外、

光久公御譜中

覚

(薩摩郡)

一去、年之冬、於下飯嶋片之浦ニ破損唐船在之處、荷物糸・絹布之類、番之者為盜取事頃令露頭、長崎御政所ニ遂披露、彼惡黨十一人為御仕置はりつけニ申付外事、

一右惡黨妻子之内、男子者誅罰申付外事、

一日本國南蛮船御禁止其外異國船往來ニ付、時々ニ心持

之儀共申渡り之処ニ、不守其旨如此之仕合、御國之御

置目緩之様ニ他國之風聞不可然儀外、此度之御扱在

所々之者迄も不致忘却様、堅其頭々より可申渡事、

八心處、何共無是非事ニ外、ケ様之事者天下ニ輕敷外得ハ、若公儀より御沙汰有之儀も可有御座外間、為何人之口にて御國中右之年号被成御落着外通、被究置肝要ニ外、餘者當地へ御參着之刻懸御目可得其意外、恐惶謹言、

朱力キ
明曆二年

卯月十三日

新納右衛門佐

久詮判

鳴津圖書頭

久通判

北郷佐渡守様

(久加)

山田民部少輔様

(有榮)

人々御中

綱久公御譜中

綱久

一 女三人

一 男五人

一 女一人

一 久

後正長・松千代丸・又七郎・出雲

明曆二年丙申四月十九日誕生、母家之女房、

家臣鎌田藏人正勝之養嗣、

一向後破損船在之、少々物ニも盜取輩承付於申出者、
縱雖為同類免其罪可加褒美事、
一雖不新每年申渡り条書之旨、弥不相替外間節々可申聞事、
右之条々堅固ニ可相守、若緩疎之在所者役人へ稠其科可申付者也、

明曆二年申四月十六日

鎌 筑後

鳴 圖書

本琉球

覚

一大明國不殘韃靼人攻捕_レて帝皇ニ相定、琉球國へ使者
魁を差渡、韃人之作法ニ髮をそり可相隨旨韃王方申來
_レハ、如何様ニ返詞可申哉之由、琉球方相尋申_レ、
上古より琉球之儀者大明へ通融不仕_レハ不叶事_レ、
併薩摩守自分ニ_レの一着之返詞難申事、

一大明之隆武帝皇帝者、福州と申國迄被為退_レ由相聞得_レ、
彼福州と申_レ所者、琉球方渡口之由_レ、依其萬一琉球
國迄も被為落來_レハ、如何可仕哉之事、

一右兩条之御返事承_レハ、琉球國へ追付可申遣_レ、隆
武帝帝など被為落_レ儀者有之間敷事ニ_レハ共、自然之
時之為ニ御内證申入_レ事、

以上

^{朱力}明曆二年 卯月廿一日

光久公御譜中

明曆二年四月二十六日

家綱公陽_レ告 上使阿部豊後守忠秋來傳ニ 恩詞ニ、時服
百領・白銀千枚拜ニ領之ニ、光久登 城而奉_レ謝_レ之時、

公口自傳而賜ニ御馬一匹ニ矣、同閏四月十六日辭ニ江府ニ、
自ニ大坂ニ解_レ纜到ニ日州細島ニ、六月八日著ニ鹿兒島、家
老島津中務久茂也、走ニ入來院石見重頼于江戸ニ、奉_レ謝ニ
歸_レ國之辱ニ、進ニ上羅紗十間・御樽肴ニ矣、

態以飛札令啓達_レ、然ハ上使阿部豊後守殿ニ_レの、今日首
尾能御暇給被成、千喜万悦之至不可過之奉存_レ、御免
足御日限ハ追_レ可申越_レ、此等之旨御子様方へ可被仰入
_レ、猶期後慶之時_レ、恐惶謹言、

^{朱力}明曆二年 卯月廿六日 鎌田源左衛門 政有判

鳴津 中務 久茂判

- 町田勘解由殿
- 新納右衛門殿
- 鳴津筑前殿
- 伊勢兵部殿
- 鎌田筑後殿
- 嶋津圖書殿

人々御中

御文庫拾三番箱五拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ
御札令拜見ハ、公方様弥御機嫌能被成御座、去十八日御

明曆二年 閏卯月十六日
鎌田筑後殿

薩 广 守
綱久御判

松平大隅守殿

酒井雅樂頭
忠清判

綱久公御譜中

今度 (光久) 大隅様首尾能御帰國目出度存ハ、仍船中にて赤松
諸兵衛迄被申置儀、具ニ聞届甘心ハ、可様之儀向後幾度
も延慮有間敷ハ、於其儀老弥可為悦着ハ、謹言、

松平大隅守殿

酒井雅樂頭
忠清判

御文庫拾三番箱五拾四卷中

光久公御譜中ニ在リ

猶以阿部豊後守持病氣付ル不能加判ハ、已上、

御札令拜見ハ、公方様御機嫌能被成御座、目出度被存ハ、
弥御様躰為可被相同、被差越使者ハ、益御勇健御事ハ間
可御心安ハ、随ル戻子・御肩衣并御肴一種被獻之ハ、右
之通遂披露ハ處、一段之御仕合ハ、次其方儀去月廿七日
伏見迄被相越之旨承届ハ、猶使者可令演説ハ、恐々謹言、

明曆二年 五月十四日

松平伊豆守
信綱判

十三番五十四卷中 光久公御譜中ニ在リ

御用之儀ハ間、明十三日晝時分可有登 城ハ、恐々謹言、

明曆二年 閏四月十二日

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

酒井雅樂頭
忠清判

明曆二年 閏四月廿二日

松平伊豆守
信綱判

表ハ出御、参勤之衆并在府之面々 御目見有之儀相達、
目出度被存ハ由尤之事ハ、因茲被差越使者ハ、入念ハ段
可及 上聞ハ、恐々謹言、

封面ニ左ノ如シ、名ハ略
明曆二年卯月廿六日之状、閏四月十四日朝飛脚踏下、
一御眼御給之由ニ而候、

御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々神尾備前殿方、為御使家老室節次郎右衛門を以
被仰聞(元勝)ハ、金山明(元勝)ハ、兩替座之儀、備州御存知
之系屋十右衛門と申人、當分爰元銀座へ罷居(元勝)ハ、彼
人へ被仰付可被下(元勝)ハ、十右衛門儀

上様御金小判ニ漸々(元勝)ニなして上ハ様こと被 仰付
置(元勝)ハハ、銀二三千貫目程手前ニ在之ものにてハ、

前以各へも申入置(元勝)ハ様ことの儀(元勝)ニハ、是又可被聞召
置(元勝)ハ、以上、

追(神尾元勝)の申入ハ、然考金山御詔之儀、松隱岐守様・神備前
守殿別(神尾元勝)の被入御精ハ間、其元より以其御心得、被入御念
御礼被仰可然奉存(神尾元勝)ハ、此比御老中何もへ被成御逢(神尾元勝)ハハ、
御挨拶能御座(神尾元勝)ハ由、從御兩老市正殿拙者方へ被仰聞(神尾元勝)ハ、近
月中(神尾元勝)こも事能御返事被仰出(神尾元勝)ハハかしと折角待申事(神尾元勝)ハ、
惣(神尾元勝)のケ様之出合之様子、可致隱密之旨被仰聞ハ間、於其
元も沙汰無之様ニ御賢慮尤存(神尾元勝)ハ、挨拶も能ハる目出度存
ハ、就其御国試之金山へ多人數寄(神尾元勝)ハ儀、差合(神尾元勝)こも可成哉
と存(神尾元勝)ハ、内々其御心得ハる被仰付(神尾元勝)ハハ如何可有御座ハ
哉、存寄(神尾元勝)ハハ間如此ハ、近日中御吉左右可申入ハ、將又
御證人奉行衆より留守居兩人へ御手紙被下、今朝御用ハ

間、酒紀伊守殿へ可罷出之由ハ、三雲太郎右衛門罷出(酒井忠吉)ハ

處、内々被仰上置(久徳)ハ嶋津大膳儀、御詔之通達 上聞、

御望之通(久徳)ニ可然由被仰出ハ條、此旨其元へ可申下由被仰

渡(久徳)ハ、御口上書付差下ハ間、被成御覽可被仰上ハ、右之

御礼御四人へ御書參可然と令相談ハ、考時分相調飛札之

由(久徳)ニ差出可申ハ、先々此中被仰上置ハ通相達目出度ハ、
猶期後音之時ハ、恐惶謹言、

朱力キ
明曆二年 六月十二日 鎌田源左衛門 政有判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

嶋津中務殿

嶋津筑前殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

嶋津圖書殿

人々御中

633 御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

昨日七時分證人奉行衆御四人方名付(忠吉)ハる御用之儀ハ間、
今朝五ツ半時分酒井紀伊守殿へ兩人之内一人可致祇候之

旨、有川八右衛門・三雲太郎右衛門方へ御差紙参り、就其太郎右衛門罷出りへハ、紀伊守殿へ御四人ながら被成御揃、紀伊守殿被仰渡りハ證人嶋津大膳儀御訴詔之通達上聞外へハ、大隅守望之通ニ可仕旨被仰出り、其通薩广守殿へ可申由被仰、最前此方被遣り御書付、本多美作殿被成御讀、弥替儀無之哉と被仰り間、別儀無御座り、罷帰薩广守へ御意之段申聞、大隅守国元へも早々可申遣由申上りへハ、其通可然由被仰り、

明曆二年六月十二日 三雲太郎右衛門(定直)

634 御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々備前殿へ隠岐守様方之御返書此飛脚可持下り間、可被召上り、将又攝津守殿五日熱氣少差出被成御煩りへ共、方庵薬御用、昨日方すきくと御機嫌能り、可易御心り、以上、

態用飛札り、然者松隠岐守様御立前ニ被仰置りハ、御老中様へ折々兩人共伺公仕、金山御訴詔之儀御失念無御座様ニと申上可然由り、就其昨朝神尾備前守殿被召連、御老中へ罷出、右之通備前守殿被仰入り、御三人共御逢り而被聞召、何も能御挨拶ニ御座り、其段 大隅守様・

隠岐守様へ備前殿方以御状可被仰遣由り間、此飛脚申付り、豫州へ寄り而御返詞相濟其許之様ニ可罷通由申付り、備前殿殊之外被出御精り条、此度之御返詞ニも被入御念御禮被仰進り様ニ可被仰上り、急度被成御相談御返事可被仰出之由り間、其節御吉左右可申入り、恐惶謹言、

朱力キ 明曆二年 六月十七日 鎌田源左衛門 政有判

嶋津市正 忠弘判

- 嶋津圖書殿
- 鎌田筑後殿
- 伊勢兵部殿
- 嶋津中務殿
- 嶋津筑前殿
- 新納右衛門殿
- 町田勘解由殿
- 人々御中

封面名略ス、左ノ如ク
明曆二年丙申六月十七日ノ状七月スリキレ飛脚持来り、
一金山御訴詔之儀御老中へ被仰入候事、

635 御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以端午之御内書出申ハ間差下申ハ、御請於其地御調可被差上ハ、爰元ニの認可申ハへ共、幾度も同筆者にて調差出ハ事心遣之由、留守居衆被申ハ、尤之儀ニハ条申事ニハ、將又右衛門殿へ申ハ、先書ニ申ハ爰元銀子無之何とも手迫之儀ニハ、御立前ニ三千兩時借被成ハ、約束之月限越ハ故返弁之儀、金主ハ頃違ハ申ハへ共、物奉行衆可被致才覺様無之ハ、ケ様ニ首尾違ニハ、後日金子當用之時分時借ニも不能成仕合ニ有之ハへハ、にかゝ敷儀ニハ、大坂へも折ク申遣ハへ共、如何様之儀ニハ哉、銀子續不申ハ矣、其元よりも金子可被為召上ハ、三千兩之時借返弁并御家中衆之御賦銀さへ相續ハへハ、御留守中ニ別ニ銀子之入ハ事も有間敷と存ハ、其御心得可被成ハ、以上、

一書令啓入ハ、(光久)太守様先月廿七日佐土原へ被成御着、御機嫌能被成御立ハ之由、但馬守殿へ飛脚にて申参ハ由、被仰聞目出奉存ハ、左ハハ、追付其元へ被為成御着座ハハんと御吉左右奉待事ニハ、然者今度 公方様御抱瘡御快然其上被直御袖ハ為御祝儀、一昨廿二日於 御城御能御振舞被仰付、何れもの御大名衆 薩州様被成御登城ハ、

就夫御並之御在國衆方御祝儀之御使者可被差上之由、留守居衆被申下之由ハ、從此方も御使者被差上ハハてハト此方留守居衆被申ハ間、急度御使者可被差上ハ、使者物頭位可然ハ由出合ハへ共、輕キ衆被仰付ハハ、爰元ニハ騎馬ニ申付可差出ハ、以其御見合可被召上ハ、將又酒(金)并修理殿今月廿一日御移徒ニハ、何れも御見舞被成ハ、薩州様被成御見舞御祝儀被仰ハ、讚岐守殿下屋敷へ被成御移徙 薩州様御祝儀之御使者被進ハ、何れもの衆被成御見舞之由ハ間、兩日中ニ可被成御出との儀ニハ、先書ニ如申入ハ金山御訴詔之儀、未御返事無之、待かね申躰ニハ、御返詞次第可申下ハ、當御地何ぞ相替儀無之ハ、恐惶謹言、

朱力キ
明曆二年 六月廿四日

鎌田源左衛門
政有判

町田勤解由殿
新納右衛門殿
鳴津筑前殿
鳴津中務殿
伊勢兵部殿
鎌田筑後殿

嶋津圖書殿

人々御中

封面左ノ如シ、宛名等略ス

明曆貳年六月廿四日之状七月十日ニ内田治左衛門持下外、

一公方様御袍寶御快然并御袖直為御祝儀、於御城御能御振舞御座候事、就夫御使

者之事、

一銀子可被召上せ之由候事、

一端午之御内書被差下之由候、

光久公御譜中

夫薩州祁答院長野村金山者、寛永十七年許ニ始堀レ之、

同二十年之春令所レ輟レ之也、今茲明曆二年六月二十六日

縁ニ光久之訟一、賜ニ領内金山一、容下以ニ國中入夫ニ堀上レ焉

而后寛文二年許ニ自邦
他國之者共堀レ之

之、九月朔日久元登レ營拜ニ詔

將軍家一、頂ニ戴御時服一、

637 御譜中ニ無之

條々

一伴天連并貴理死丹宗門之族、吳國方日本渡海之沙汰近

年無之、自然相忍蜜々差渡儀可有之事、

一先年吳國に被差遣之南蛮人の子とも、はてれんに仕立

へき企有之之由、此以前渡海之はてれんとも申之条

本マ、

と理、漸伴天連に成へきの間、日本船をつくり日本人

之姿をまなひ、日本の詞をつかひ相渡儀可有之事、

一吳国船近年四季共ニ渡海自由たるの間、浦々の儀者不

及申、在々所々ニ至迄、常々油断なく心をつけ、見出

し聞出し可申出之、たとひ彼宗門たりといふ共申出

おひてハ、其科をゆるし御褒美の上、乗渡舟荷物共に

可被下之、万一隱置、後日ニはてれん又ハ同船之輩等

捕、拷問之上ハ、其かくれ不可有之条、不申出あひか

くす輩之義者不及沙汰、其一类又ハ其品により、一在

所之者迄急度可被行曲事、

右條々海上見渡之番之者之儀者勿論、獵船之輩其外

浦々者ニ至迄、切々念を入見出し聞出し、奉行所迄

可申出之者也、仍執達如件、

明曆二年六月日

奉行

638

従前々御禁止之伴天連并貴理死丹宗門之族、弥以可相改

之旨、今度被成下御符案外之間、國中之者共右御書出之

趣能々相守、常々無油断心を付致見聞可申出、勿論御褒
貶之通不可有相違之条、堅所申付置也、仍副札如件、

明曆二年七月日

大隅守

639

御文庫廿一番箱五拾卷中

御譜中ニ無之

一書令啓達_レ、然者昨昼爲_レ 上使多賀_{左近殿}^(常長)御出

薩州様_ニ御鷹之雲雀御拜領_ニあり、誠_ニ目出度仕合_ニ奉存_レ、

就夫從_レ 薩州様_以御書被仰上_レ間、此等之通_{太守様}^(光久)可被

達 御耳_レ、雲雀御拜領之刻、早晚以輕使御禮被仰上事

各御存知之前_ニ、御書も從其元御調參_レ、彼是以其御

心得被仰付尤御座_レ、猶期後音時_レ、恐惶謹言、

七月九日

鎌田源左衛門
政有判

嶋津圖書殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

嶋津中務殿

嶋津筑前殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

封面略ス

人、御中

御文庫拾三番箱五拾四卷中

光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見_レ、公方様御機嫌能被成御座、五月三日被直御

袖、同五日御表 出御、在府之面々、御目見有之儀相達、

目出度被存之旨得其意_レ、依之爲御祝儀被差越使者_レ、

被入念_レ段及 上聽_レ處、御喜色之御事_レ、猶使者可令

演說_レ、恐々謹言、

朱力キ

明曆二年 七月十三日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

641

全箱中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見_レ、公方様御庖瘡以後五月十四日二九_ニ始_レ

被遊 渡御、同十七日紅葉山御宮御參詣、打續御機嫌能

被成御座之儀相達、玆重之旨得其意_レ、因茲被差越使者

_レ、入念候之趣及 台聽_レ處、御喜色之御事_レ、恐々謹

言、

朱力キ

明曆二年 七月十八日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

640

御文庫拾三番箱五拾四卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様御機嫌能被成御座、五月廿六日酒井讚岐守下屋敷に渡御之儀相達、目出度被存之由得其意外、依之被差越使者外、入念外段及 台聴外、猶使者可令演説外、恐々謹言、

朱力キ
明曆二年七月十九日

松平大隅守殿

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

全箱中 光久公御譜中ニ在リ

御檄令拜見外、公方様倍御機嫌好被成御座、目出度被存之由尤之儀外、將又今度首尾能御暇、就國元に到着、以使者羅紗十間并御樽着被献之外、右之通遂披露候之處、御前に使者被召出入念外段御喜色之御事候、恐々謹言、

朱力キ
明曆二年七月廿三日

松平大隅守殿

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

図書頭久通譜中

茲歲明曆二年丙申

將軍家家綱公許ニ 太守光久主之在レ領國掘レ金山矣、

因レ茲欲レ述ニ其謝禮ニ、使ニ久通赴ニ武州江戸ニ、七月廿二日首ニ途於鹿兒島ニ、八月廿六日到ニ著於江戸ニ、則翌日候ニ于神尾備前守殿ニ、述ニ金山所レ拜領大慶ニ、同廿九日從ニ備前守殿ニ而候ニ大老之第二、達 太守之旨矣、九月朔日隨ニ大老之令ニ、遂登城於ニ黒書院ニ、拜ニ謁將軍家ニ也、其後有ニ衣服已下之恩賜ニ、珍戴而同月十五日辭ニ退江戸ニ、十月十九日下ニ着鹿兒島ニ、委曲反命者也、

御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々其元今月八日ニ罷立外、飛脚廿五日之晚到来御状相届、具得其意外、先以

太守様御機嫌能被成御座外由、目出度奉存外、爰元

ニ亦も奉始 薩摩様 虎壽様 御簾中様方皆々御勇

健之御事外、細々之御返事者後便ニ可申入外、將又

本田美作守殿御息女、今月廿五日佐久間權之介殿へ

興入ニて外、御證人奉行之事外間、此方よりも二種

壹荷にて御祝儀可申入覚悟ニ外、以御序可被入 御

耳外、以上、

一筆令啓達外、

一公方様被直 御袖外為御祝儀之御使、弟子丸右京被差

遣外へとも、先書如申外就延引伊東佐兵衛ニ取替、其

段最前申下外、右京儀老酒井讃岐守殿下屋敷へ御成、

御機嫌能被為成還御外、御祝儀之為御使、去ル十九日

御當番阿部豊後守殿へ差出申外、首尾能相濟御奉書出

外間差下申外、

一酒修理大夫殿御家督為御祝儀、御太刀・金馬代・帷子

単物拾、右京持参ニ被進外へとも、何方へも御断被

仰置、無御請由外被相返外、御返事参外間、もたせ

申外、

一讃岐守殿此中日光へ御越ニ、廿四日御帰宅外間、

廿五日御太刀并三種・二荷右京持参外へとも、是も御

断にて無御請相返り申外、

一公方様御庖瘡御快然為御祝儀、六月二日御能御振舞被

仰付、御在府之御大名衆御登城外、此御祝儀御使又

薩州様へ雲雀御拝領之御礼、端午之御内書御請之事先

書ニ申入外、御失念者有間敷外へとも、其元可御事繁

と存申入外、無御由断可被仰付外、

一糸屋与四郎金山明外ハ、兩替之儀神尾備前殿外被仰

外ニ付、先書ニ申外処、金山明外ハ、隠岐守様万事可

被成御差圖由外之間、与四郎兩替之儀被問召置とハ難

被仰外、能様ニ可申入之由外、余人ニ由外ハ、如何

様ニも可申離様可有御座外へとも、今度備前殿以御肝

煎御訴詔相叶為申儀外条、右之通ニハ難申外、彼与四

郎儀老備前守殿別被懸御目者之由外処、御無挨拶ニ

外てハ重カ金山之儀ニ付、又々御訴詔共可有御申刻、

障ニも可罷成哉、今少御相談被成為相究御返事御座外

ハ、備州御内室節次郎右衛門殿迄可申外、為御意得

外、恐惶謹言、

朱力平
明曆二年

七月廿八日

鎌田源左衛門

政有判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

嶋津中務殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

御報

覺

從韃靼琉球へ使船可差渡催ニ由、於福州大船造候風説御座由琉球人申候、就其長崎ニ付置候家来之者、當年参候唐船之船頭口柄承届外へハ、実事之由申越外ニ付、從国元右之通注進仕候、尤於琉球韃之使者如何様ニ可申渡儀者、未相知外得とも、多分如韃人位官衣服等迄も相改申儀も可有之候、左様ニ外ハ、琉球人迷惑ニ存、右之為躰ニ罷成間敷と可申儀ハ必定ニ候、雖然韃人押外申付外ハ、左も可有御座外哉、韃之旗下ニ罷成候儀さへ残多存候處、右之躰ニ外ハ、日本之御外聞惡儀とも外ハ心敷と氣遣ニ奉存候、此段如何可有御座外哉、為可得御指圖如此御座候、以上、

朱力キ
明曆二年 八月六日 松平大隅守

松平伊豆守殿へ中務持参候口上書之留、

647 御文庫拾三番箱五拾四卷中 光久公御譜中ニ在り

尚々其元大隅守殿御堅固御在國珍重存外、我々も無
吳ニ在之事外、御氣遣有間敷外、以上、

其元御領國金山之儀、数年御訴詔被仰上外之処、今度早

速相濟拙者式迄大慶存外、就夫為御礼御使者鎌田左京方

被遣忝存知外、併御懇懃存知外、此通大隅守殿へ可然様

被仰達頼入り、金山御仕置之儀、先度有増書付を以申入

外、其旨可然と被存外者急度御申付尤存外、委細之儀ハ

左京口上可被申外、恐々謹言、

朱力キ
明曆二年 八月十二日 松 隱岐守 定行判

鳴津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

648 久四郎忠清一流系図



慶安三年庚寅八月九日誕生、母救仁郷天神坊頼重女、

太守光久公之四男也、

明曆二年八月十五日 光久公賜_二御下之遺領_一 薩州伊佐郡 佐志三千石 於
虎松_一、公手自加冠而號_二又六久岑_一、島津市正忠廣爲_二
理髮_一、寛文八年戊申十二月十二日死、年十九、

649 御文庫拾三番箱五拾四卷中 光久公御譜中_二在_一 (宣脫也)

御札令拜見_一、公方様御庖瘡御快然、其上被御袖、旁以
爲御祝儀、六月廿二日御能御振舞被仰付、在江戸諸大名
登城之趣相達目出度被存由得其意_一、因茲被差越使者候、
入念_一外段及 上聴_一、恐_一、謹言、

朱力キ 明曆二年 八月十七日 阿部豊後守忠秋判
松平伊豆守信綱判

松平大隅守殿

650 綱久公御譜中

去夏国元_一に初_一致入部候、爲祝詞至麗府使毫殊御太刀_一
腰・馬一疋并土産之品々如目錄令受用、御懇切之段欣悦
之至候、猶期来喜之節不詳候、恐惶謹言、

朱力キ 明曆二年 八月廿八日 薩摩守綱久御判

謹上 琉球國司

651 御文庫拾三番箱四拾四卷中 光久公御譜中_二在_一

御札令拜見候、公方様弥御機嫌能被成御座_一之間可御
心安_一、將又金山之儀以國中入夫、先二三年可堀申之旨
被仰出、忝被存之由尤之事_一、依之爲御札被差越使者、
縹帙十卷并御看一種被獻_一、右之趣遂披露_一處、御前
に使者被召出_一、入念_一外之段御喜色之御儀_一、委曲使者
可令演說_一、恐_一、謹言、

朱力キ 明曆二年 九月朔日 阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判
酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

652 光久公御譜中

新年之慶賀以使書被示諭之處、令承知欣然之至_一、猶更
不可有盡期之瑞祥珍重_一、此等之爲祝儀任舊例太平布
五十疋・芭蕉布五十端・焼酎十壺到来令満悦_一、委曲屋
富祖可演說条不能詳候、恐惶謹言、

朱力キ 明曆二年 九月朔日 少將 光久御判

謹上 中山王

御文庫拾三番箱五拾四卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見^レ、去比以 上使同姓薩摩守御鷹之雲雀拝領之儀相達、忝被存之由得其意候、因茲被差越使者^レ、入念^レ之段及 高聞^レ、猶使者可爲演說候、恐々謹言、

宋カキ
明曆二年 九月二日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

光久公御譜中

正文在文庫

以上

急度令啓^レ、仍阿部對馬守殿方此方家來之衆昨朝可罷出

外由^レニ付、右衛門佐罷出^レ、御三老御出合^レハ諸大名

家來之衆同前ニ被仰出^レ御意趣者、南蛮宗御法度之儀每

度雖被仰渡^レ當年長崎へ参^レ唐船ニ唐人之きりしたん宗

御座^レ由、訴人有之ニ付強門被成^レ處、あま川ニおゐて

唐人を南蛮宗ニすゝめ入、大明へも日本へも可相渡たく
みをふかくしく仕^レ、先今度之者共ハ日本之御法度之
様子を為可承究つかハし^レ、其外あま川ニ罷居^レ日本人

之子共ニ南蛮宗門之学文、又唐之学文をさせ、唐人ニな

し、日本へ可渡用意を仕由申^レ間、自今以後者唐船ニて

も陸地ニつけず、海上ニて船中を相改宰領を付、長崎へ

可送届^レ旨上意^レ間、弥可被入御念^レ通被仰渡^レ、就其

即彼松田七左衛門へ道具衆一人相添、可指下之段任御意

如此^レ、今度被仰出^レ様子者前々長崎方被仰渡^レ意趣ニ

者相替^レ之間、長崎御奉行衆へ追付以使者右之ごとく従

江戸申来^レ、唐船之儀も陸地へ不着様ニ向後者可申付^レ、

定長崎へも可被聞召届^レへとも、最前之首尾ニ^レ間、御

断申入置^レ通達可被申達^レ旨御意ニて^レ、是又為御心得

外、恐惶謹言、

宋カキ
明曆二年 九月十二日

新納右衛門佐 久詮判

北郷佐渡守 久加判

山田民部少様

穎娃左馬頭様

川上因幡守様

久加判

鳴津圖書頭様

人々御中

655 光久公御譜中

去歲薩摩守始爲入國之祝儀、被差渡使札、殊御太刀一腰、御馬一疋并其邦土産之方物贈賜之欣然之至候、猶使者可爲口達之際不能一二候、恐惶不宣、

朱力キ

明曆二年

九月十五日

少將

光久御在判

謹上 琉球國司

656

去歲薩摩守始爲入國之祝儀、被差渡使札、殊御太刀一腰、馬一疋并其邦土産之方物贈給之欣然之至候、猶使者可爲口達之際不能一二候、恐惶不宣、

朱力キ

明曆二年

九月十五日

少將光久

謹上 琉球國司

(前文書ノ案文ナリ)

657

御文庫拾三番箱五拾五卷中

光久公御譜中ニ在リ

御檄令拝閲、公方様御機嫌之御様躰爲可被伺之被差越使者、倍御勇健之御事候之間可御心安、將亦氷砂糖二壺并御肴一種被獻之、入念、通遂披露、處一段之

御仕合、委曲使者可令演説、恐、謹言、

朱力キ

明曆二年 十月三日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

658

光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、爲帰国之御札最前被差越之使者、御前に被召出、其上時服拜領之儀、忝被存由得其意候、入念、段可及、上聽候、恐、謹言、

朱力キ

明曆二年

十月五日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

659

御文庫廿一番箱五拾卷中

光久公御譜中ニ在リ

猶、糸屋与四郎儀備前殿、被仰、時分、最早金山御訴詔不相叶、已前、之儀、ニ、處、ケ様、ニ、色、延引、成、事、如何、ニ、得、共、相違之御挨拶、ニ、成立、外、へ、ハ、

別而咲止ニハ故如此ハ、御使到着ハ、追付圖書殿へ御相談ハ、御究御返事被仰聞ハ、次郎右衛門殿迄御返事可申達ハ、爲御心得ハ、以上、御状得其意ハ、

一 薩州様に雲雀御拜領之爲御禮使、今井八左衛門被差遣ハハ共、參着前ニ別人ニハ相濟ハ故、八左衛門儀者入來院石見 御目見、時服拜領仕ハ爲御禮差出、御奉書出ハ間差上ハ、石見御目見之儀神備前殿御肝煎ニハ御條、御指圖無之儀ニハ共、御禮状相認もたせハ、御返詞參ハ間差下申ハ、

一 松平土左守殿御隱居、對馬守殿御家督并修理殿へ御知行分りハ御祝儀、任御指圖御進物留守居衆へ致相談、土左守殿ハ二種一荷、對馬守殿へ御太刀・金馬代・帷子単物拾、修理殿へ御太刀・金馬代・帷子単物五、何ハ表御書相調御使ニハ爲持ハ、土左守殿者御隱居之儀ニハ故、何方へも御断被仰由ハ無御請ハ、何れも御報參ハ間此節差下申ハ、

一 先書ニも申入ハ、御城御本丸奥作御普請、弥来年可被仰付由ハ、就其從諸大名衆御進上物可有御座由ハ間、留守居衆方ハ被承合ハハ共未相知ハ、究ハハ、追ハ可

申上ハ、先ハ可被聞召置ハ、

一 從紀伊大納言様、霧嶋つゝじ・唐桐御所望ニ付、永井弥右衛門殿方御状被進ハ、此返事もたせハ處、又々御状被進ハ間、此度差下ハ、右二色来春無御失念可被仰付ハ、

一 神備前守殿方被仰ハ糸屋与四郎金山兩替座望之儀、備前守殿方被仰事ニハ間、不被成御馳走ハて不叶儀ニハ共、他國人不入様ニ御禁止之上、兩替座とても他國人被入儀如何ニハ間、國中ニ之者へ右之座申付ハ由、室節次郎右衛門殿迄返事可申由得其意申ハ、尤其段々可申入と存ハ處、圖書殿御下前ニ備前守殿へ以覚書爲被仰御内意由ハ、其書付を見合ハハ右從其元被仰越ハ趣之御返詞にてハ指合ニ可罷成哉と存ハ、圖書殿可爲御着ハ、右之覚書之趣ニ御準、今少御相談ニて指合ニ表罷成ましくハ間、右之通ニ可申入と承ハ者、次郎右衛門殿迄可申入ハ、重畳申越ハ事、各如何ニ可被思召儀も可有之ハハ共、差合ニ成ハハ、後日悔ハ由も

無詮事ニハ故、諏方左右衛門・平田藤右衛門・相良新右衛門・有川八右衛門・三雲太郎右衛門など致相談ハハ、何ハ表同意ニ被存ハ間如斯ハ、

一 虎壽様御守衆當分兩人ニ有リ、今一人被相重ハ様ニト

諏方李右衛門被申ハ通先日申下リ、御幼稚之時分者兩

人ニ有濟ハ共、只今者被成御成人、二人ニ有罷成

ハ、三人ニ有被仰付ハハテハ阿多六郎右衛門被申出

ハ、李右衛門も尤ニ見及ハ故申上由リ、先書ニ巨細之

段不申入ハ條重而如斯御座ハ、

一 先書ニ申入ハ大猷院様御七年忌之御吊、御在國之御衆、

来春御參勤前御國元ニ有御法事弥被仰付由、方々之留

守居衆ハ申来リ、就夫千部之御法事、天台宗者國々ニ

左様ニ無之ハ間、真言宗ニ有も可被仰付ナト申来所

御座ハ、先内々可被聞召置リ、実儀究竟次第可申入リ、

一 久世宇右衛門殿首尾能被成御勤番、今月二日從駿府被

爲帰ハ、御状なと被進儀もハハんと存申上リ、以御序

可被達 上聞ハ、

一 先日伊勢左近持上リ御進上疏磯之請取、此度富山九右

衛門便ニ福屋助左衛門迄被差遣リ、則同便ニ有助左衛

門方此方へ被差下相届リ、巨細之様子追可申入リ、

一 當御地土屋敷・町屋敷疫病はやり申リ、此方御屋敷中

ニも士衆下々迄病人多リて念遣ニ有、併 上々様方ハ

別有御機嫌能被成御座ハ間可易御心ハ、

一 八左衛門儀早々石見御目見之御礼使ニ差出可召下之

處、八月十五日・廿二日爰元風雨夥敷、九州筋表大風

之由御注進被仰上方有之ハ付、其元之御左右を待居

ハテ、次介到来ニて風も吹不申由承、則指出ハ、右之

式ニ有故滞留仕ハ、爲御心得ハ、恐惶謹言、

鎌田源左衛門 政有判

明曆二年 十月九日

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

嶋津筑前殿

鎌田筑後殿

嶋津圖書殿

人々御中

明曆二申拾月九日之状同廿九日今井八左衛門被持下リ、

封簡ニ

660 御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見ハ、九條政所御方逝去之趣相達、被絶言語之

由得其意ハ、依之被差越使者ハ、入念ハ段及 台聞ハ、

恐々謹言、

朱カキ
明曆二年
十月廿日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

松平大隅守殿

661 御文庫拾三番箱五十五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、公方様御機嫌之御様躰爲可被相窺之被差越使者外、益御勇健之御事外之間可被御心安外、将又御道服五并其國之御着一種被獻之外、右之趣遂披露外處、入念之段御喜色之御儀外、猶使者可爲演説外、恐々謹言、

朱カキ
明曆二年
十一月八日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

662 光久公御譜中

明曆二年十一月十一日、執政阿部豊後守忠秋召ニ吾留守居者、有川八右衛門貞侶謁ニ于忠秋第一、忠秋謂曰賜御鷹之鶴諸光久一、是其奉書也、須レ送ニ于薩府一、驛路則隨レ例有三所レ令之書一、添レ鶴云々、光久拜ニ戴之于鷹

府一、則馳ニ家臣新納四郎左衛門久辰一奉レ謝レ之、獻ニ御肴一種一、

663 十三番箱五十五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御鷹之鶴被遣之候、委曲從息薩摩守可被相逢候、恐々謹言、

朱カキ
明曆二年
十一月十一日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

664 光久公御譜中

正文在文庫

猶以乍重言御禮之使者延引無之様ニ可被仰付外、遅外テハ爰元御仕合念遣ニ外間如此外、新介事八ツ半

時ニ罷立外、以上、

又申外、鶴御拝領ニ付、爲御祝儀 薩州様方

少將様江御書御進上外間、差上可被成外、

急度令啓達外、然者昨晚御當番阿部豊後守様方、以御切

紙今日八ツ時ニ留守居衆一人豊後守棟御宿へ可差出之旨被仰下りニ付、有川八右衛門罷出外之處、御鷹之鶴御拝領之由被仰出外間、則宰領堀新介御道具之者兩人申付差下り、誠以目出度御仕合ニ奉存外、追付御禮之御使可被差上外、中途無延引被仰付尤ニ存外、各如御存知鶴之送御手形早晚御返進外間、御禮使必持参外様ニ可被仰付外、恐惶謹言、

朱カキ
明曆二年十一月十一日
鎌田源左衛門
政有判

- 鳴津圖書殿
 - 鳴津筑前殿
 - 鎌田筑後殿
 - 伊勢兵部殿
 - 新納スリキレ(右衛門カ)殿
 - 町田勘解由殿
- 人々御中

正文在文庫

又申外、鶴御拝領之御奉書爲持申外有川八右衛門(貞傳)申外者、今度之御給様常ニ相替別のおもき御様子ニ外、一番(利常)小松中納言殿、二番めニハ此方様ニあり、何も留守居衆豊

後様へ詰り居外處、次第ニ御呼出被成御渡外由、八右衛門被申外、今日御給外衆書付もたせ申外、爲御心得外、恐惶謹言、

朱カキ
明曆二年十一月十一日
鎌田源左衛門
政有判

- 町田勘解由殿
 - 新納右衛門殿
 - 伊勢兵部殿
 - 鎌田筑後殿
 - 鳴津筑前殿
 - 鳴津圖書殿
- 人々御中

御文庫廿一番箱五拾一卷中 光久公御譜中ニ在リ
猶々 大御前様(光久) 若御前様(綱久)方御狀被進外間、松浦介へ爲持申外、可被成御上外、以上、

急度令啓達外、然者今日九ツ半時以

上使水野庄左衛門殿御鷹之鷹二(元重) 薩州様(綱久)に被成御拝領、

誠以目出度御仕合ニ奉存外、就其隅州様(光久)に以御狀被仰上外間、御使橋口松浦介申付差上外、從 隅州様御礼使之儀小荷駄位之人被遣外ハ、爰元ニ騎馬ニ申付可差出

ハ、將又今日鷹御拜領衆別紙ニ書付差上ハ、右之御衆御
 排之儀共ハ、承合御客人之儀松河州様・(松平定頼)神備前殿へ、
 被成御相談被仰入ハ様ニ可申上ハ、可被聞召置ハ、次彼
 松浦介事爰元無人ニハ間、急度可被爲召上ハ、恐惶謹言、

朱カキ
 明曆二年 霜月十三日

鎌田源左衛門
 政有判

鳴津圖書殿

嶋津筑前殿

鎌田筑後殿

スリハケ(伊勢兵部殿カ)

新納右衛門殿

町田勘解由殿

人々御中

霜月十三日

在別紙 光久公御譜中ニ在リ

御鷹之鷹御拜領衆

鷹二ツ

上使 水野庄左衛門殿

薩州 様

同二ツ

上使 荒木十左衛門殿

松平伊与守殿

同二ツ

上使 同

毛利美作守殿

同二ツ

上使 多賀左近殿

松平丹後守殿

同二ツ 上使 同 松平彈正殿
 同二ツ 上使 加藤平内殿 松平信濃守殿
 同二ツ 上使 石川弥左衛門殿 真田伊豆守殿
 同二ツ 上使 下曾根三郎殿 南部山城守殿
 同七ツ 上使 松植右衛門左殿 松平式部少輔殿
 同七ツ 上使 能勢小十郎殿 奥平美作守殿
 同七ツ 上使 川口頼兵衛殿 酒井攝津守殿

合十七人

末ニアリ

霜月十三日

御鷹之鷹御拜領之御衆

御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、清泰院殿御逝去之趣相達、絶言語被存由

得其意ハ、依之被差越使者ハ、入念ハ段及 台間ハ、恐

々謹言、

朱カキ
 明曆二年 十一月十三日 阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

669 御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、最前爲使者、嶋津圖書被獻之處、御前^ニ被召出、殊時服被下之、忝被存之由得其意^レ、依之爲御礼重^ク被差越使者^レ、入念^レ段及 台聽^レ、恐^ク謹言、

^{朱印} 明曆二年 十一月廿一日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

670 御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶^ク、神尾備前守殿へ之御返書鎌五太夫便^ニ御失念之由^ヲ、去ル四日之飛脚一昨晩致持参^リ、最早五太夫五日以前圖書老 御目見得時服拜領之御禮使^ニ差出相濟^レ間、後^方参^リ由^ニてもたせ可申^レ、然者備前殿御状之写二ツ此方御案紙被遣拜見^レ、あなた^ノ御状いかにも御懇切^ニ見得申^レ處、御返事之趣ハ餘大躰^ニ御座^レ、題目金山之儀なと可有御座事と存

外へ共無其儀^レ、爰元^ニの左様之儀者難書加^レ故、先右之分^ニてもたせ可申^レ、重^ク金山之様子とかく^ト被仰進^レハてハと存^レ、將又松河州^方御状被進^レ間もたせ申^レ、以上、

鎌田五太夫便之御返詞得其意^レ、爰許御遣銀相續^レ様^ニ申^レ付、其元何れも御差寄、色々御相談^レへ共、當分御藏へ金子拂底^ニ、何とそ相續^レ様^ニ御才覚被成^レ由、尤御油断被成間敷^レ、今度御拜領之御應之鷹御排^ニ付、爰元御藏へ金子一圓^ニ無^レ之外^ニ付、伏見屋四郎兵衛・久須見孫兵衛・三宅又兵衛へ時借之儀、以状申遣^レへ共、何れも無^レ之由^ニの借不申、何とも行迫申事可被成御推察^レ、ケ様^ニ時^ニ、其元之儀者万事被差置江戸相續^レ御相談專要^ニ御座^レ、銀子御手迫之時者右三人之衆へ申遣^レ者可相調^レ之内^ニ存^レ處、右之通之返詞^ニの弥念遣千万^ニ存^レ条、^(鑑)良子相續^レ様^ニ御肝煎可被成^レ、彼三人^方返書爲御一覽差下^レ、今度鷹御拜領之御衆何れ^ニ可被成御排物音^ニ付、松河州様・神備前殿へ御内意被仰^レへハ初^メ御應之鷹御拜領^ニの^レ間、御ひらき被成可然由御返詞^ニ付、備前殿^方御客衆御書付被遣^レ、又其外御一門衆常々御出入之

御念比衆此方ニ有書加、去ル廿一日之朝可被成御排由、前以御書被進何れも御出首尾能相濟_レ、御客衆之書付爲御一覽差上申_レ、備前殿御書立之御衆者御差合_レて無御出_レ、

一 神備前殿方何れ之御屋敷ニて可被成御排哉と御尋_レ間、當時下之屋敷被罷居儀ニ_レ間、彼屋敷へ可申請由被申_レ旨申_レへハ、下屋敷者遠方ニ有御出可被成と被思召之衆も不罷成儀も可有之_レ、上屋敷へ被仰入可然と被仰_レ、私御返詞ニ被得御内意儀ニ_レ、如何様にも御差圖之様ニ可被致と申上_レへハ、右之通可然由_レ故、其段達 上聞上御屋敷へ被仰請_レ、御書院覺表替も不仕破損迄をつくろ_レ相濟_レ、是又爲御存_レ、

一 先書ニ申_レ 虎壽様御守之衆一人相重_レ儀於調儀者當分者兩人ニて可相濟由_レへ共、前々ニ相替御成人被成、御屋敷中ニ有も方々被成、兩人ニ有ハ難續通、阿多六郎右衛門見及被申出_レ、諏方左右衛門も其段ニ見及_レニ付被申出事ニ_レ、物毎御省略之事ニハ_レ得共、是ハ別各之御事ニ_レ間、一人被相重餘事ニ有御省略被成_レハ如何可有御座哉、私存寄ハ如此_レ、又御留守ニ被召置_レ御步行衆八人 虎壽様何方へも御出_レ時之御供

又御番を被勤_レへハ、八人ニ有ハ餘不足ニ_レ、せめて十人者被召置_レハてハと左右衛門被申出_レ段申入_レへハ、御步行衆拾人程被相重_レ様ニ申下_レたる通之御返事ニ有_レ、二人相重儀ニ_レ、左様ニ可被聞召置_レ、

一 薩州様来年於御下向者、御供之騎馬・御步行衆去年之御供立方不足ニ_レ間、上屋敷在江戸衆替合之時分被召留、御供ニ被召列可然存_レ段申入_レ處、去年者初御入國ニ有旁結構ニ被仰付_レ、御部屋栖之儀ニ_レ間、大形調_レ者少々ハ御堪忍も御座_レ様ニ可致相談由御尤之御出合ニ有_レ、村田藤六近日被罷上_レニ、巨細被仰越_レ旨得其意_レ、併来年御供仕可被罷下芝之騎馬衆十二人有之_レ、内道中川越奉行兩人・御宿割奉行兩人・物奉行一人除_レへハ、御南_戸衆迄ニ七人有之_レ、是ニ有者萬事御事關ニ可有御座哉と存申入_レ、御步行衆も四拾四五人有之_レ内、彼是ニ相除_レ者不足ニ_レハんと出合_レ有爲申下事ニ_レ、御留守ニ居_レ人其元方被爲召上_レへハ、往來之入目御損ニ_レ故右之通ニ_レつる、爲御心得_レ、

一 玄益葉種代之儀先書ニ申_レ、當分御省略最中ニ_レ、其上此節方被仰付儀ニ_レ間、御相談之上ニ有追_レ御返事

可被仰越由御尤之御吟味ニ由リ、併堀四郎左衛門・喜入五郎兵衛如存之葉諸人へ然々不遣、醫者衆へも當度初爲葉種代銀子貳百目ツ、被下リ、玄益葉數之員數申下リ同前ニ無之由ハと何れもの衆へ致相談此節銀貳百目遣リ、可被聞召置リ、恐惶謹言、

朱力ナ
明曆二年 霜月廿三日 鎌田源左衛門 政有判

- 町田勘解由殿
- 新納右衛門殿
- 伊勢兵部殿
- 鎌田筑後殿
- 嶋津筑前殿
- 嶋津圖書殿
- 人々御中

末ノ對面ニ左ノ如シ、名略ス
申霜月廿三日之狀伊地知紋右衛門霜月七日ニ到着リ、

671 在別紙

- 鷹御排前ニ御見廻衆
- 兩度御見廻 松平河内守殿
- 右 同 木下左近殿
- 右 同 伊勢兵庫頭殿
- 一度御見廻 水野藤右衛門殿

御振廻之日御勝手迄も御見廻ニて候 一度御見廻
鈴木喜左衛門殿 長生院
度々御見廻 御振廻之日御勝手迄も御見廻ニて候
嶋津但馬守殿 神尾備前守殿

以上、 霜月廿三日

672 御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々御飛札にて可被仰上リへとも、節々之飛脚ニ御道具之者、差合無之由間、御陸衆下シ申リ、其元相濟早々可被爲召上リ、以上、

以先書如申入リ去ル十三日御鷹之鷹
薩州様御拜領リ、御同前ニ御拜領衆被成御排之由、物音ニ由故、松河州様・神備前殿へ被成御相談、一昨廿一日之朝上御屋敷へ御客人被仰請、御ひらき首尾能相濟目出度奉存リ、此等之段 隅州様へ爲可被仰上、爲御使伊地知紋右衛門被差下リ、其元可然様ニ可有御披露、御客前御見廻御念比衆書付差上リ、從其元御礼狀被進御尤御座リ、余者別紙ニ巨細申入リ、恐惶謹言、

朱力ナ
明曆二年 霜月廿三日 鎌田源左衛門 政有判
嶋津圖書殿

鳴津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

人々御中

(挿入)
光久公御譜中に在り

覚

一 御屋敷中に被相詰り衆、従前々被仰出り如御法度、折々外に被罷出間鋪り、御定之日數無相違様ニ堅可被相守り、自然其上ニ罷出人者、星帳を以可致其沙汰事、
一 夏冬共ニ衣裳内々規模を被相定可有着用り、御番之日并無御隔心御方に御供之時も、日野袖・郡内等之着物可然り、惣而結構成小袖上下着用仕儀可被致無用り、就中又被官之衣類、従先年如被仰出、日野袖木綿之間着用可然り、小袖一切被爲着用間鋪事、

付分限之衆之内小姓者公儀に被召仕儀多々有之り

間、衣類主人之勝手次第たるへき事、

一 傍輩中着合之刻、近年者殊之外内々奢之躰之由被聞召

上り、依其常々者洒看など取調被出儀曾可爲停止り、勿論互之振舞并音信物取遣儀、弥以令禁止り、若致結構人於有之者、横目を被付置り間、可有披露り、其意得尤外事、

一 在京・在江戸之輩、其旅中ニ有、古き訴詔被申出儀、向後在之間鋪り、尤旅中之儀者可爲各別事、

一 従前々相定り御賦之外、重り侘言被申出間鋪事、

一 右同御扶持方侘之儀、右同断之事、

一 御年寄衆御振舞之時は、小々姓衆に鬨斗目長袴拝領被仕御法ニ有、自今已後雖爲困人之御客人、鬨斗目長袴着用被仕り者可被下り、若兩度ニ及り者、長袴計可被出り、夏者帷子長袴其時々可被下り事、

一 従御國元被召列り御醫師并従前々江戸に被相詰り御醫師之外、新敷或木薬代或賦重之儀被申出間敷事、

右之條々御請合之上を以今度被仰出り間、此旨を堅可被相守り、頃日御供之在江戸衆、帰國前ニ銀子ニ手迫、御物銀過分ニ恩借被仕儀不可然り、向後者銀子借被下間敷り旨御相談相究り間、人々の相應ニ能々被致省略、御賦長ニ有相續り様ニ心得專ニ有、尤江戸町人之銀子如例年家老衆口入り以借用り被遣儀も有之間

鋪_レ、此等之通被承届銘々ニ判形可被仕者也、

明曆二年十一月廿五日

此等通御辭中組合誤ナン、

光久公御譜中

江戸下御屋敷人数被減趣仰出

一騎馬式拾人之内四人可召下事、

一奥御南戸役入間敷_レ間、赤松諸兵衛儀取次番之内ニ被相加、奥御納戸方へ佐多六郎兵衛・市來八右衛門可相勤事、

一小々姓衆廿一人之内五人者前髮取、此中之人数賦ニ_レ方々御供可仕_レ、六人者

虎壽様御近習ニ可相詰_レ、

残拾人者 薩州様御側ニ可被召仕_レ、御上下之時者右

之内五人可被召列、残五人者 薩州様御留守ニハ上御

屋敷へ可相詰_レ、勿論 薩州様御參勤之時分者下御屋敷へ御奉公可仕事、

一酒部屋手代御小者衆三人之内一人可被減事、

付此外ニも御小者衆、前ニ相替多_レ所於有之ハ、以吟味可被減事、

一宜庵事、書院坊主并ニ可申付_レ、自然難成旨訴詔於中

者御暇可被下事、

一御步行衆四拾七人之内十五人者可被召下_レ、其元被罷立時分之儀者、口上ニ申合_レ事、

一右之外御遣方御省略之儀者可多_レ間、表方之儀者諷方 李右衛門・村田藤兵衛相談にて可被申付事、

一奥方之儀者上御屋敷之規模を以萬事御部屋栖相應ニ相調_レ尤_レ、就其富源右衛門從此度納殿代官被相定_レ事、右条々被 仰出_レ、巨細之段者口上ニ申合_レ、以上、

明曆二年丙申十一月廿五日

町田勘解由

伊勢兵部在判

鎌田筑後同

嶋津筑前同

嶋津圖書同

鎌田源左衛門殿

御文庫廿一番箱五拾志卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札得其意_レ、然者 清泰院様就御逝去、御悔可被仰上

上原小十郎被差遣_レ、則御老中様迄御状相認、御當番阿部豊後守様へ去ル十日指出_レ、御返翰之御奉書出_レ間被

676

持下^レ、水戸中納言様・同中將様・紀伊大納言様・同宰相様へ御書被致持参御返事参^レ間差上^レ、尾張中納言様并奥方様へも右同断之筈^ニ、先書^ニ申^レ通奥方様若子被成御平座御祝儀半^ニ、御悔之儀遠慮^ニ存無用^ニ仕^レ、次神尾備前殿へ被進^レ御返事則小十郎致持参^レ、爲御意得^レ、恐惶謹言、

^{朱力キ}明曆二年 霜月廿六日

鎌田源左衛門 政有判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

御報

末ノ封面ニ

明曆二 十一月廿六日之状 明曆三正月十日上原小十郎持下^レ、

十三番箱五十五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、公方様益御機嫌能被成御座目出度被存由得其意^レ、将又如例年其國之蜜柑二箱被獻^レ、遂披

露^レ處、入念^レ段御喜色之御事^レ、恐^レ謹言、

^{朱力キ}明曆二年 十二月八日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

677

御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、公方様益御機嫌能被成御座、去比西丸下馬場始^レ御成、御馬 上覽之儀相達珎重被存之由承届^レ、入念示給之段可及 上聞^レ、恐^レ謹言、

^{朱力キ}明曆二年 十二月十三日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

678

光久公御譜中

大隅

(國分八幡)
正興寺住持職事、任先例可被執務之狀如件、

明曆二年十二月十七日

少將光久御在判

榮喜西堂

朱力_ナ
明曆二年十二月廿九日

阿部豊後守
忠秋判

679 十三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見_レ、今度御鷹之鶴拝領之儀忝被存之由得其意_レ、依之爲御札被差越使者并御肴一種被獻_レ、右之趣遂披露_レ處、入念_レ之段御喜色之御義_レ、恐々謹言、

松平大隅守殿

松平伊豆守
信綱判
酒井雅樂頭
忠清判

朱力_ナ
明曆二年十二月廿八日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

680 御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見_レ、去比同姓薩摩守御鷹之鷹拝領之儀相達、於其方難有被存之由得其意_レ、依之被差越使者御肴一種被獻_レ、右之趣遂披露_レ處、一段之御仕合_レ、恐々謹言、

御文庫拾三番箱五拾五卷中

光久公御譜中ニ在リ

松平大隅守とのへ 基熙

十三番箱五十五卷中 光久公御譜中ニ在リ

爲改年之祝儀、任佳例城中に令申入之序、啓一翰り、
在府弥可爲康健り、此方無恙り、境節調合之薰物一香合
可被試り、猶使者属口上り也、

朱カキ
明曆三年

青陽初三

(島津光久)
松平大隅守とのへ

(近衛基熙)
(花押 No.9)

(表紙)

光 久 公 明 曆 三 年

綱 久 公

追 録
舊 記 雜 録
卷 七

御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

鶴御礼使新納四郎左衛門、鷹之御礼使本田仲兵衛被差

遣之り、先書如申下り臘月廿八日兩使共登城、首尾好
相濟目出度存り、御奉書出り間、六日爰元罷立被致持

参り、

松平大隅守殿

正月十一日

阿部豊後守
忠秋判
酒井雅樂頭
忠清判

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
献之り、右之趣遂披露候之處一段之御仕合り、恐々謹言、

松平大隅守殿

朱カキ
明曆三年
正月六日

阿部豊後守
忠秋判
酒井雅樂頭
忠清判

御札令拜見り、去冬千代姫君御方御平産之趣相達、目出
度被存之由尤之事り、因茲被差越使者り、入念り段及
台聴り、恐々謹言、

一薩州様江御鷹之雁初る被成御拜領りニ付、從 隅州様

爲御祝儀、御樽肴可被進由各御口上ニ由仲兵衛へ被仰
渡由爰許にて被申外、各状ニも不相見外条如何と存外

へとも左様ニも可有御座事ニ由故、二種・一荷相調仲

兵衛被致持参り、忝被 思召上被成御祝り、御礼之御
服被差上り間爲持申り、爲御意得り、

一年頭之御祝儀御太刀如御舊例御進上爲御名代去ル二日

拙者罷出外、一番ニ被召出首尾好相濟り、

一松河内守殿御参府 御目見早々相濟、殊阿部備中守殿

へ御孫被爲出来り御祝儀状認爲持申り、御服参り間差

上り、猶兩使委曲可被申達り、恐惶謹言、

朱力下
明曆三年 正月六日 鎌田源左衛門 政有判

町田勘解由殿 (久則)

新納右衛門殿 (久詮)

伊勢兵部殿 (貞昭)

鎌田筑後殿 (政昭)

鳴津筑前殿 (久頼)

鳴津圖書殿 (久通)

御報

封面二

酉正月六日之状二月朔日ニ本田仲兵衛持下外、

一鶴御乳新納四郎左衛門、煙之御乳本田仲兵衛被差上、首尾能相濟申候事、
一松河内殿御参府御同名相濟、殊阿部備中殿へ御孫様被爲出来候事、

685 光久公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀以使者御太力一腰・御馬代黄金十兩被獻
之外、右之趣遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力下
明曆三年 正月十一日 阿部豊後守 忠秋判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

686 北郷作左衛門久精譜中

明曆三年丁酉正月十二日奉 高命相續家督、且補三千臺・
高城地頭職、父久加在三病牀、依三愁訴一也、

687 光久公御譜中

先年 大樹家光公諸家系圖被収官庫之後 太守光久主編
輯高祖以降之 繪旨感贖、以自正統至枝葉之系譜、可令

689

御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

當月十九日從新鷹師町火事出来、風強^レ故御本丸^ニ相移
悉令炎上^レ、雖然 公方様無恙西丸^ニ渡御、御勇健之御

明曆三年丁酉正月十九日失^レ火于江戸新鷹匠町一、暴風
吹^レ餓江城本丸炎上、餘妖覃^ニ吾之櫻田邸舎一矣、
同三年二月二日爲^レ參觀發^ニ鹿兒島^ニ而取^レ路於日州一、于
時執政以^レ奉書論^レ之、其詞曰、光久之邸舎亦罹^ニ池魚之
災一、依^レ焉緩^ニ參觀之期一、應^レ將^ニ六七月一窺^ニ其參觀之
期上也、縱然雖^ニ既發^ニ居城一、宜^レ歸^ニ居城一矣、光久得^ニ
之路一而歸^レ城、

688

光久公御譜中

平田清右衛門尉殿

(純正)

鳴津圖書頭 久通判

明曆三年正月十五日

鎌田筑後守 政昭判

正其糺纏之由被 仰附之處、日夜無怠慢多年勵勲勞之旨
達 貴聞 御感不斜、為加增高百斛^{目録在}被充行之、弥以
彼世録記可遂成功之通、所被 仰出也、仍執達如件、

690

御文庫廿一番箱五拾壹卷中 光久公御譜中ニ在リ

松平大隅守殿

酒井雅樂頭 忠清判

明曆三年 正月廿五日

阿部豊後守 忠秋判

明曆三年春正月東都火城邸民屢悉焼トアレハ此時カ、

事^レ間可御心安^レ、然者其方當地之屋敷類火^レ之間、參
勤之儀延引可任之旨被 仰出^レ、被得其意六七月時分可
被伺之^レ、其節可申達^レ、恐^レ謹言、
朱力キ
御文庫廿一番箱五拾壹卷中 光久公御譜中ニ在リ
猶^レ御參觀御延引之儀御在國之大名衆廿二三人之留
守居被召出被仰渡^レ、爲御心得申上^レ、以上、
急度用飛札^レ、然者明日御觸御座^レ者今朝四ツ時御用^レ
間、西之御丸へ留守居^レ人可罷上由^レ、三雲太郎右衛門
罷上^レ處今度之火事^ニ上屋敷炎上^レ、就其御參觀被成延
引、六七月時分可被相伺之由、御奉書并火事^ニ付仰出之
御口上書之写出^レ間差上^レ、此旨被成御承知^レ通かろき
騎馬を以御礼被仰上^レ、被仰出^レ刻御老中御兩人・大
目付衆三人御座^レ、目付誠御心^ニ付、忝儀^ニ御座^レと爲

被仰由り、御礼状ニ其御心持題目ニ出合申り、將又
御城炎上ニ付而之御使者、以兵部殿被仰上可然と先書ニ
申上り、定而其通ニ御座りハんと存り、御機嫌伺之儀も
常々ハ節々使者被差上可然と留守居衆被申り、左様ニ可
被成御心得り、恐惶謹言、

朱カ、
明曆三年 正月廿六日

鎌田源左衛門
政有判

- 嶋津圖書殿
- 嶋津筑前殿
- 嶋津中務殿
- 鎌田筑後殿
- 伊勢兵部殿
- 新納右衛門殿
- 町田勘解由殿
- 人、御中

御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々江戸拙者屋敷も類火ニ逢申り由申越り、不及是
非儀り、以上、

一筆令啓達り、先月廿日之御奉書昨朔日到来申り、去月
十八日未刻本郷方火事出来風烈神田臺・筋違橋内外・鎌

倉町・日本橋・中橋方東に靈巖嶋石川大隅守屋敷邊迄令
焼失、其上同十九日新鷹匠町より出火、水戸殿へ移り風
強りニ付、松平式部太輔屋敷類火、其の左馬頭殿・右馬
頭殿に移り御本丸悉致炎上り、雖然公方様西丸ハ被爲成
御安泰ニ御座、被成御機嫌被爲替御事無御座之旨、從御
老中被仰下恐悦之御事奉存り、麴町へも火移り、松平出
羽守・井伊掃部頭(直孝)其外櫻田筋之屋敷大形焼失申之由夥敷
儀存り、大隅守殿御屋鋪如何無御心元存り、右之段大隅
守殿へも申上りへ共、最早其元御発足被成、道ニ違可
申かと存各へも如斯ニり、恐々謹言、

朱カ、
明曆三年 二月二日

甲斐庄喜右衛門
正述判

- 嶋津圖書様
- 鎌田筑後様
- 新納右衛門様
- 町田勘解由様
- 御宿所

封面名略ス

明曆三年二月二日之御状同九日ニ山鹿弥介持參、江戸火事之
御到来同朔日有之り、喜右衛門様御屋敷も類火ニ被爲逢之由
也、

御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

追申入候、

一 公方様弥御機嫌能被成御座、去月廿八日にも御大名衆御目見御座外、朔日ニハ日光御鏡御頂戴ニ付御大名衆御登城無之外、日光御門跡様并出家衆如例年御目見之由外、

一 先月廿四五日之比迄ハ火付之用心ニ諸屋敷さハカしく外へとも、此比ハ世間静ニ成外、夜ハ四ツ過外へハ小路人通りも無之、今分ニ外ハ、御念遣之儀無之外、上野邊・芝口其外火事不参端外者、于今さハ外事不之由申外、

一 太守様御參勤外ハ、御供衆之宿無之、念遣ニ存外處、御參勤可被成御延引之旨被 仰出目出度外、只今之詰衆一宿ニ八九人宛召置難儀成躰ニ外、當分ハ借屋多も無御座外、中務殿息女被爲着外者借屋も有之間敷外、木屋作調外ても敷物調申事當分ハ畳一枚も不罷成念遣之儀可被成御推察外、

一 太守様御參勤六七月之比可被成御伺外由被仰出外、其使者六月初當御地へ被致着外様可被仰付外、御使者之人躰御使衆なと被差上可然外、留守居衆被申外、

一 御機嫌伺之使者一ヶ月ニ兩度程可被差上之由、諸留主

居衆被申合之由、此方留守居被申外間、内々其御心得を以御使可被仰付置外、大身之人者御造作入儀外、

小荷駄步行衆位之人被差上外ハ、此方ニ騎馬ニ仕立可申外、無調法ニ無之衆を御見合外、

一 水野監物殿(庄盛)・青山大膳殿(宗利)・小笠原壹岐殿(知忠)・井上河内殿(正利)

此御四人ニ屋敷奉行永井弥右衛門殿(直元)・城伴左衛門殿(朝忠)被

相添焼跡之屋敷方々被成御廻外、就其風聞外ハ、御大名衆者外堀之外へ御屋敷割御座外、堀方内ニハ御旗本

大名衆御屋敷ニ成外由沙汰有之外、於必定者鍋嶋孫平大殿屋敷五百兩ニ御買外儀公儀へ不相知儀外、如何

様ニ可相濟外哉念遣ニ存外間、永井弥右衛門殿へ内證

可申哉と承合外折節、先月晦日北条安房殿(正房)・渡邊伴右

衛門殿方之御書付焼屋敷間敷改繪圖被仰付ニ付、此方

屋敷へも間敷御うたせ外、家来衆可罷出之旨、大工鈴木修理手代上屋敷へ持来外間、此方權兵衛・竹宮内記

差出相濟外、別紙ニ巨細有之外、可有御覽外、右之仕

合ニ外時ハ、屋敷割之儀可爲必定と存、御使衆留守居

衆へ令相談、去ル朔日之晚永井弥右衛門殿へ罷出、内

證申入外ハ、被入御念被仰聞外間、覺書仕差上外、

被届御覽御相談^レて可被仰越^レ、

一 火付之大將廿四日^ニ被召捕^レ、別紙^ニ差上^レ、同廿八日^ニ御厩内にて北条安房守殿・渡邊伴右衛門殿御當^ニて拷問^ニて口柄爲被聞召由^レ、同類も次第可相知と風聞申^レ、

一 此中^ニ考、木屋作之雜木等迄不自由^ニ有^レ之^レ、此三日以前^ニ方少自由^ニ罷成^レへとも、上ふきの板角材木などハ一圓無^レ之^レ、次第^ニハ自由^ニ可罷成^レと申^レへとも、御城井大名衆御普請、町衆家作仕^レハ、諸材木高直^ニ可有^レ之と申^レ条、長かろき家等ハ御国^ニる木作大廻^ニ被遣、可然と出合申^レ、爲御心得^ニ、

一 八木よき時分參、田町藏へ入置^レて曳飯米今式ケ月考可相調由^レ、先^ニ之引飯米相續^レ様^ニ御相談專^一ニ^レ、
一 八木其外色々次第^ニ下直^ニ罷成^レ、仕合之儀^ニ、商場書別紙^ニ指下^レ、

一 金山明^レ間、仕上米従例年考被減上^レり可申^レ、然時考従大坂御仕銀被相續儀可難成^レ、其元^ニ方銀被召上^レハてハ罷成間敷^レ条、御談合專^一ニ^レ、銀子不參^レてハ御臺所如何様^ニ可相調哉、念遣千萬^ニ、我等無申迄^{（掛）}へ共如此^レ、先書^ニ如申^レ、前^ニ考御用物ともかけ

こゝ相調^レへとも、職人共道具悉焼捨着^レ之ま、出^レ故、かけ^ニハ罷成間敷由申^レ、此方見^レりも尤^ニ出合^レ、右之通^レ間、さし替^ニて無御座^レへハ何事も御用相達間敷^レ、銀子無御續^レハ、御機嫌伺之御使者之時分、御肴等上^レ儀も罷成間敷^レ、笑止之事^レ、題目上下御屋敷御臺所續間敷^レ、一大事^ニ存^レ間、無御由断御相談專^一ニ^レ、

一 上屋敷焼跡^ニ辻番所并うらの門内^ニ三敷四間^ニ木屋を懸、侍之衆御番被仕^レ様^ニ可申付覚悟^ニ、何方も其通^ニ御座^レ、御老中^ニ御觸状并使者上屋敷へ被參^レ間、如此申^レ付^レ、可被聞召置^レ、

一 何方之御屋敷もいまた家作など被仰付方只今迄ハ無御座^レ、
一 右如申^レ上屋敷へ被相詰^レ衆、衣類被焼捨^レれも迷惑之躰^レ間、替之衆早速可被爲召上^レ、世間爲替儀共^レハ、被罷下^レ様^ニ申渡^レても可被罷下^レ人も有間敷^レへとも、何ぞ相替儀も無^レ之^レ間、急可被爲召上^レ、
一 上下御屋敷へ被相詰^レ男女之書出爲御心得差下^レ、万事御見合^ニも可成哉と如此^レ、
一 上下奥方様御膳符其外諸事省略之儀、兩御局御代官伊

東孫兵衛・郷田源右衛門相談ニ有、火事以来三ヶ一ニ被減_レ、我等申_レハ一節之儀ニ_レ間、右之通ニ相談尤之由申_レヘとも、此時節ニ只今被減ニ見合、向後之物定被仰付儀ニ有者有之間敷哉、先日指_下天下之御条目ニも被減様子ニ相見得申_レ、爲御心得申事_レ、其通ニ被仰付儀_レハ、鎌田太郎右衛門・諏方左右衛門・村田藤兵衛上下之代官兩人へ相談ニ_レハ、可相調_レ、存寄之儀ニ_レ間如此_レ、

一屋敷焼_レ付ニ付、鍋嶋孫平太殿留守居柴權兵衛を以申出_レ、
外口上并彼方返事之覚書爲御一覽差下申_レ、

一覚書ニ申_レ、孫平太殿屋敷へ新網町屋敷替_キニ相談成_レハ、
ハセは_レ外条、此方_レ金子不出_レてハ調問敷_レと出合_レ、
是又爲御心得_レ、恐惶謹言、

朱カキ
明曆三年 二月三日

鎌田源左衛門
政有判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

嶋津筑前殿

693

鎌田筑後殿

嶋津圖書殿

人、御中

御文庫廿一番箱五拾卷卷中 光久公御譜中ニ在_リ

猶_レ評定所筆者竹内市右衛門・二渡藤左衛門是も火事ニ衣類等焼捨申迷惑ニ被存_レ間、替之人急度被召上_レ尤_レ、以上、

一筆令啓_レ、然者先書ニ申_レ様、上屋敷并鍋嶋孫平太殿方買添屋敷之儀、永井弥右衛門殿へ御内證申入置_レ處、去_レ四日御用之由被仰_下間罷出_レハ、買添屋敷之儀 菟角之書付なしニ此方屋敷一ツニ繪圖御調_レ有、御老中様被懸御目_レ間、鍋嶋殿_方前_ニ相談之様子とかく不被仰上様ニ、以使可申入_レ由被仰聞_レ、就其有川八右衛門・三雲太郎右衛門を差遣、彼方留守居へ申_レ外口上返詞弥右衛門殿_方被仰聞之趣、別紙ニ書付差_下間、可被成御覽_レ、鍋嶋殿_方相談之様子被仰上間敷由_レ間、口能有間敷と存事ニ_レ、

一下御屋敷騎馬四人・步行衆拾五人可召下由、村田藤兵衛便ニ上意之旨被仰越得其意_レ、則申渡可被罷下管_ニ外處、時分柄之儀ニ_レ故先留置申_レ、此段可被聞召

置外、

一赤松諸兵衛與御南戸役被差免、表へ御奉公可仕外、與御南戸ハ表御南戸衆同前ニ可承由申渡、其通ニ被相勸外、

一御小性衆五人前髪取當分之御賦ニ御近所へ相詰、御駕廻之御供可仕由申渡外、虎壽様御側へ被召置御小性之儀も同前ニ申渡外、

一納殿代官郷田源右衛門・物奉行代鎌田五太夫被仰付外儀、御酒部や手代御小者一人被減外、能勢宜庵事書院坊主并ニ被召仕外事、何表申渡領掌ニ由外、

一金山山大工并請役之者之儀、從松(松平定行)隱岐様、神備前殿へ

被仰進外へハ、先年金山へ口留外時分居残外金堀共七八拾人者、國中之金堀ニ相加苦間敷旨備前殿方申參之由、隱岐守様被仰越外哉、就夫先御飛札にて備前殿へ御禮之儀令承知外、只今左様之儀共可申時分ニ由も無之外儘令相談、能時分ニ御状相認可差出外、

一室節次郎右衛門殿・糸や与四郎へ圖書老方再報被遣外、其返事兩所方參外間、遣外手代一人必下外様こと申外へハ、世倅与兵衛来月初差下可申由申外、与四郎事備前殿方被仰付儀ニ由哉、此方御屋敷へ懇切ニ仕外、旧

冬も金子払底にて何とも逼迫外仕合ニ由處、兩度ニ金子三千五百兩程時借之御用ニ達、漸御屋敷之用達躰ニ由、可被聞召置外、便宜ニ各方以其趣禮状与兵衛方へ可被遣外、

一伊東源次御供立ニ被相替罷下善ニ由處、御參府御延引外、今度之火事ニ衣類焼捨外間、早々替被仰付可被下由被申外、尤ニ由間此段被仰上代之人可被差遣外、

一御道具之者火事ニ衣類焼捨御奉公難勤外間、替之人被仰付可被下由、東郷藤兵衛方被申出外、替之者人数之儀者藤兵衛方其元兵具奉行迄被申遣外間、於其元可被申出外、早々被仰付可被召上外、

一川野善兵衛十二月廿二日御屋敷罷出致欠落外、同宿へ問届外へハ借銀とも有之外、其外無首尾成儀共多有之由外間、右之仕合にて致欠落外ハんと存外、

一伊東源次被官十二月廿三日ニ相走、其後兩度御屋敷へ入外を見合、からめさせ拷問ニ由口柄爲聞外へハ、御屋敷へ火を付可申企仕外由申外、當分籠舎申付置外、爰元にて成敗可被仰付哉、又廻船ニ由下可申哉被得御意、早々可承外、口柄圖書并御屋敷へ入外て長屋へ參外所之下人口書、御門出入仕外時之當番之口書下外間、

可被成御覽^レ、御門番之者共ハ改大形ニ仕^レ間科可相懸と存^レ、其元御相談^レ可被仰越^レ、

一 兩日前三宅又兵衛・伏見屋四郎兵衛此方へ見舞^レ間、

當年中ニ材木自由ニ可有^レ哉と尋^レへハ、御城御作事之材木山入を被仰付^レ、左様成も當年來年中ニ調^レ事^レ中ニ不取覽^レ間、御大名衆御作事用之材木、猶以有之^レましく^レ、長屋作之麁相成材木ハ次第ニハ可有之と申^レ、長や材木其外麁相成道具者御國方調被遣可然と出合^レ、長屋之地割調遣^レ、被成御相談可然被思召^レハ、可被仰付^レ、

一 火事以後御大名衆之御作法いかにも御ほそり^レて見え申^レ、小路筋にて小歌をうたひ^レもの一人も無之、勿論諸屋敷中にもわめき^レ事とも無之、是者御城炎上、其上江戸中焼払、前代未聞之大火事ニ付^レ、御遠慮と見え^レ由其沙汰^レ間、爲御意得申上^レ、

一 先月十八九兩日之火事焼跡之繪圖爲御覽差上申^レ、可被達 高覽^レ、恐惶謹言、

朱カキ
明曆三年 二月十日

町田勘解由殿

鎌田源左衛門
政有判

694

在全卷中 光久公御譜中ニ在リ

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

人々御中

尚々御材木などハ御國ニ御座^レ共、終ニ御進上なく^レ間、御無用ニ可被遊^レ、右之通杉板子・杉戸板宜被存^レ間、早々御支度被成、出来次第目錄を以御進上被成御尤^レ旨隠岐守被申^レ、以上、

此度江戸大火事之儀ニ付^レ、從 隅州様隠岐守方へ御飛脚被遣^レ間、一書啓上仕^レ、先月十八日・九日兩日之蒸^(燒)猛夥敷様子定^レ其元へも可被爲聞召^レ、兎角可申様も無御座^レ、就其各御大名衆様方當座之御進上物可被爲指上御支度之由^レ、乍去當分ハ御進上物上り申間敷様ニ御老中様被仰渡由申來^レ間、定^レ江戸御屋敷御留守居中方可被仰上^レ、併御普請之時分者御作事ニ入申物者御支度被成御進上可然旨隠岐守被申^レ、此以前御普請之時分杉板子を御進上被成^レ事御座^レ様ニ隠岐守被覺^レ間、此度

も杉板子など之類を御上ケケテ可然被存知外、杉戸之廣板者猶以能可有御座外間、板子ニ被指添御進上衆様可然旨被申外、此度ハ夥敷御作事之事外間、杉板子・杉戸之板御進上外ハ、以前方沢山ニ御上ケ被成可然存外、將又御油断ハ有間敷外共、江戸之御上屋敷御作事など被仰付外者、江戸一偏之火事之事外条、中々江戸ニ材木者以來とるも大切ニ可有御座外間、御国元方御材木御支度外ハ廻シ被遣可然旨隠岐守被申外、右之趣拙者方各ハ以書状可申入由被申付外間如斯候、恐惶謹言、

朱力キ
明暦三年 二月十日

久松清左衛門
勝成判

嶋津 圖書様

嶋津 筑前様

鎌田 筑後様

伊勢 兵部様

新納右衛門様

町田勘解由様

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

追ふ令啓外、

一今度之火事ニ 御城富士見之御藏炎上外、是者御寶物

藏ニ有る名物之御腰物・御茶入・葉茶壺など御座外を悉致焼失外、呂宋之壺壺ツ相残外之由去御方咄ニ有外、世間之風聞も其沙汰外、

一松平越前守殿御女房衆三百人程爲被相果由申散外、去御方被仰外ハ六拾人程も相果外ハんと咄ニ有外事、

一御旗本衆之内儀餘多被爲果外、一門中不殘御果外衆も有之由申汰外、

一保科肥後守殿御息長門守殿今月朔日御死去之由外、此

中御煩之様子者不承外、

一能勢(頼房)小十郎殿先月廿四五日比被成死去外、御同名庄(頼水)左衛門殿・市十郎殿へ御悔状被進儀ニ有者有間敷哉、可

被成御相談外、恐惶謹言、

朱力キ
明暦三年 二月十日

鎌田源左衛門
政有判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢 兵部殿

鎌田 筑後殿

嶋津 筑前殿

嶋津 圖書殿

人、御中

御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

當月上旬其表火事出来之由風聞外、御手前宅無心元存爲見舞如斯外、かしく、

朱力キ 明曆三年 二月十一日 圓満院御門跡 常尊

松平大隅守殿

松平大隅守殿 圓満院御門跡

御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

一書申入り、然者先月十八日・十九日江戸火事致出来、境節風依烈 御本丸・二之丸へ移、御城内悉炎上仕外由外、定而相聞へ可申外、誠以絶言語申事外、然共 公方様西之御丸へ渡御被遊、御勇健之旨切く申来外間、被致氣遣間鋪外、江戸中大名小名屋鋪大形煙失之由外、依其大^光隅守殿上屋敷致類火笑止存外、我々上屋敷も焼外へ共、下々至迄無別条由申越外之間、可御心安外、先度大隅守殿に以飛札申達外へ共、其砌者取紛致延引外間、乍次而令啓外、恐く謹言、

朱力キ 明曆三年 二月十一日

松 隱岐守 定行判

御文庫廿一番箱五拾卷中 光久公御譜中ニ在リ

嶋津圖書殿
嶋津筑前殿
鎌田筑後殿
伊勢兵部殿
新納右衛門殿
町田勘解由殿

一筆令啓達外、去ル廿九日之御奉書今日到来申外、先以公方様倍御勇健被爲成御座外旨、御老中へ被仰下恐悦之御事不可過之奉存外、御機嫌之御様躰爲可申入如此外、將又今度火事ニ付、去月廿五日被 仰出趣悻方へ書付指越外間写進之外、大隅守殿江戸上屋敷若致焼失、作事之支度其許ニ有之外ハ、御意得外も可能成かと存写越外、萬人難有奉存被 仰出外御座外、大隅守殿へ可申入り得共、其元過御発足之由ニ外間、不能其儀外、未御國之内ニ御座外者、書面之通被仰可給外、次其元弥別条有之間敷と珍重存外、當地相替儀無之外、猶期後音之時外、恐く謹言、

朱力キ 明曆三年 二月十一日

甲斐庄喜右衛門 正述判

嶋津筑前様

鎌田筑後様

伊勢兵部様

町田勘解由様

699 御文庫拾三番箱五拾五卷中

尚々金山御赦免之爲御祝儀、砂金百兩被懸御意、

御心入忝存、委細ハ三右方可被申、以上、

旧冬居付之金堀七八拾人御免之旨被 仰出、忝被 思召

御札并請役之者人数被遂御穿鑿、神尾備前方へ御使者被

指遣ニ付、御札致拜見、去八月、金山へ人を被爲入

外へ共、御分国中之者ニ爲御堀、其上請役も無之外之故、

博々敷金子も出不申外へ共、公方様江爲御初尾、砂金

御進上被成度旨并御老中へも被進度由御尤至極、此以

前諸方之者被爲入置、時分ハ金子千兩程御進上、由承

外、如何ニ金出不申外も百兩か式百兩ハ御進上成間敷

外間、其通神尾備前殿へ申遣、定、江戸首尾能様指

引可被仕、委細之儀ハ村尾三右方へ申談、恐惶謹言、

明暦三年比方
二月十二日

松平隠岐守

定行判

松平大隅守様

御報

700 御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

態以飛札令申、今度其地就炎上類火之由承及驚入候、

爲御見廻如斯也、

朱力キ
明暦三年 二月十五日

(花押 No.10)
朱力キ
聖護院宮

松平大隅守殿

松平大隅守殿

聖護院宮

道晃

701 全上 光久公御譜中ニ在リ

其地火事ニ付、私宅焼失之由警入、爲御見廻以飛札如

此也、

朱力キ
明暦三年 二月十五日 道寛

松平大隅守殿

松平大隅守殿

照高院宮ノ事

道寛

702 御文庫拾三番箱五拾五卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様當春御機嫌之御様躰爲可被相窺
之、被差越使者候、益御勇健被成御座外間可御心安外、
因茲三種二荷被獻外、遂披露候之處一段之御仕合外、
恐々謹言、

朱力キ
明曆三年 二月十九日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

703 御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、先月十九日御本丸炎上之趣相達被警存外、
雖然 公方様西丸江渡御、御勇健被成御座此段珍重被存
之由尤之事外、依之被差越使者外、入念外之通可及 上
聞外、恐々謹言、

朱力キ
明曆三年 二月廿二日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

704 御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、公方様御機嫌之御様躰爲可被相伺之、
被差越伊勢兵部外、益御勇健被成御座外間可御心安外、
將又御肴一種被獻外、右之趣遂披露外之處一段之御仕
合外、次其方事爲參勤去二日國元発足、加治木迄被罷越
之旨得其意外、最前以奉書相達外通被守之歸國尤外、委
曲使者可爲演說候、恐々謹言、

朱力キ
明曆三年 二月廿八日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井雅樂頭
忠清判

松平大隅守殿

705 御文庫廿一番箱五拾一卷中 光久公御譜中ニ在リ

追而令啓外、仍長古と申御城坊主昨日有川八右衛門・三
雲太郎右衛門所參申外ハ、御城何ぞ無相替儀外、併今日
安藤右京進殿其外御奏者番衆被仰外者、國持大名衆ニあ
も瓦葺之長屋此節より不被成筈ニ相濟外、坊主衆なども

縁取く、ニ注進可申遣由被仰り間、被罷出り由爲被申由り、先日長屋之地わり遣り、瓦葺と小板葺ハ上道具相替之由り間、小板葺之長やニ被仰付道具被差越尤ニ御座り、巨細平田藤右衛門・相良新右衛門并普請奉行方被申越り間於其元其段可被仰付り、恐惶謹言、

朱力平
明曆三年 三月朔日
鎌田源左衛門
政有判

- 鳴津 圖書殿
- 鳴津 筑前殿
- 鎌田 筑後殿
- 新納 右衛門殿
- 町田 勘解由殿
- 人々御中

封而ニ
明曆三ノ三月朔日ノ状三月十五日之晚樺山権兵衛・市来大右衛門持下り、長屋瓦葺此節より被召留候由候事、

706
光久公御譜中

自從光久去年拜ニ領金山一所ニ掘出一之黄金五百兩以ニ使者ニ獻ニ上
家綱公ニ且副ニ獻御肴一種ニ執政以ニ奉書ニ報レ焉、

707
御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見り、其方領分金山明り以後、初る掘出り金五百兩并御肴一種被獻之り、右之通遂披露り之處之御仕合り、猶使者可令演説候、恐々謹言、

朱力平
明曆三年 三月八日
阿部豊後守
忠秋判

- 松平 伊豆守
信綱判
- 酒井 雅樂頭
忠清判
- 松平 大隅守殿

708
御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

今度其方當地之屋敷類火付り、參勤延引り様こと最前以奉書相達り通忝被存之由得其意り、依之爲御礼被差越使者り、入念り段可及 上聞り、恐々謹言、

朱力平
明曆三年 三月九日
阿部豊後守
忠秋判

- 松平 伊豆守
信綱判
- 酒井 雅樂頭
忠清判
- 松平 大隅守殿

御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々旧冬羊之儀申進外之處、大隅守殿へ被仰達、四
匹被懸御意外、遠路之所別々忝存知外、羊菜ニ入申
外間御無心申入外處、野牛と相見へ申外、不審存外、
委細者宰領之仁可被申外、以上、

大隅守殿方爲御見廻預懇札外之間令啓外、先以其元別
条無之由承珍重存外、大隅守殿御參勤六七月時分迄相延
外の緩々と御休息可爲御満足と存事外、江戸之御屋鋪之
作事急時出来仕事も無之外間、先々廻之囲之長屋を
ハ早々被仰付可然存知外、何表大名中屋敷之普請未取付
被申衆一軒も無之由外、併國元ニ有長屋之支度被申付、
舟を以被相廻由承外、左外ハ、懸る出来可申外、其元之
儀御油断有間敷外、此表無替儀外間氣遣有間敷外、猶自
是可申入外、恐々謹言、

^{朱力キ}明曆三年 三月廿八日 松 隱岐守 定行判

- 嶋津圖書殿
- 嶋津筑前殿
- 鎌田筑後殿
- 新納右衛門殿
- 町田勘解由殿

御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、御本丸御宮作今年者御延引条、下々屋
輕作事小屋懸等可申付之旨并献上物三ヶ年之間者可減少
之趣、最前以書付相達外通被承届之由得其意外、依之被
差越使者外、入念外段可及 上聞候、恐々謹言、

^{朱力キ}明曆三年 四月六日 阿部豊後守 忠秋判
松平伊豆守 信綱判
酒井雅樂頭 忠清判
松平大隅守殿

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々 太守様方方被進御状四通差上外、將又上御
奥方之納殿衆三人并中江方庵長々相詰外、替被爲召
上可被下由被申外、被仰付早々可被爲召上外、以上、
^{光久}一筆令啓外、先以 羽林様弥御機嫌能被爲成御座之旨、
上村茂兵兩日已前参着珍重奉存外、御當地御静謐 ^薩
州様 虎壽様御籠中方様益御勇健之御事ニ外、
一上様御祝言當夏中可有御座物沙汰御座外、伏見院殿御
息女様 院様之御子分ニ被爲成、院様御停へ御座外右

衛門尉江戸へ被爲下躰（兼輔）なされ、右姫君様来月初京都

御發足、野々山丹後守殿・青木遠江守殿御供道中（義経）方直

紀伊國様御上ヶ屋敷へ被爲入、五月末（光徳）に御城に御

興入申由（光徳）に、殊之外御隠密之由聞得申（光徳）、必定之儀（光徳）未

不承付（光徳）へとも、去月廿五日於 御城松平安藝守殿・

松平安波守殿・森内記殿留守居（長藤）なと有川八右衛門へ咄

被申（元徳）由（治昌）由（元徳）間申上（元徳）、委儀相知（元徳）へハ、可申上（元徳）、

一豊後爲御目付代石尾志广守殿・岡部外記殿（元徳）今月三日御

暇出、十日比（家光）に被爲立由（家光）、於其地も可被聞召合（家光）、

一大猷院様御吊之御法事當月十五日（忠守）方廿日迄於東叡山被

仰付由（忠守）、右之御使者（忠守）にハ桂外記差出可申由先書（忠守）こも

申（忠守）、弥其通可仕と令相談（忠守）、

一來年 御本丸御作事（忠恵）に付、從諸大名衆御材木可被成進

上物音（忠恵）に、松平對馬殿（忠恵）方材木を御軍役（忠恵）に可被差上由

御老中へ被仰上（忠恵）へハ可然由御返事有之（忠恵）、材木数（忠恵）未

究り不申（忠恵）と彼方留守居方八右衛門・太郎右衛門へ此

比手紙參由（忠恵）、

一火事（忠恵）に付御道具可被差上由并御普請御望之衆有之（忠恵）、

手紙写爲御一覽差上（忠恵）、

一鎌田太郎右衛門被申出（忠恵）者、今度御供立（忠恵）に世悴清二郎

御小姓役被仰付、太郎右同道（忠恵）に西目表罷上（忠恵）處、中

途方御小姓衆被召歸（忠恵）、清二郎儀も同前（忠恵）に歸し可申（忠恵）へ

とも俄之事（忠恵）に、被官等引分（忠恵）外事難成、爰迄自力

に召連（忠恵）、太守様御上洛被遊（忠恵）へハ、何れも並（忠恵）に可被

召仕（忠恵）、今度初（忠恵）る御奉公（忠恵）に取付申（忠恵）處右之仕合（忠恵）、御

上洛迄（忠恵）ハ

薩州様御傍へ被召仕（忠恵）様御任（忠恵）に奉存（忠恵）、左様（忠恵）にも（忠恵）ハ

、御奉公方（忠恵）に見馴申、御上洛之刻も御奉公可仕由（忠恵）、

尤之事（忠恵）間、各へ可申進（忠恵）、書物可被仕と申渡被差出

間下申（忠恵）、被成御相談右之通（忠恵）に被仰付（忠恵）様（忠恵）に（忠恵）てハ

如何可有御座哉、急度御返事待入（忠恵）、

一國分佐左衛門儀厩方（忠恵）に御奉公仕居（忠恵）、久々相詰（忠恵）處、

老母煩申由相聞（忠恵）に付

薩州様へ立歸之御暇申上被召下（忠恵）、其元隙明次第早（忠恵）、

可被爲召上（忠恵）、爲御心得（忠恵）、恐惶謹言、

朱力半
明曆三年 卯月七日 鎌田源左衛門 政有判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

御文庫式拾壹番箱五拾貳卷中 光久公御譜中ニ在り

鎌田筑後殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

人々御中

猶以江戸へ到着ハニハ女房衆馬乗物三手ニ分ハ、

尤夜ニ入田町御屋敷へ參申ハ、先日如被仰聞ハ女房

衆九人芝御屋敷へ遣申ハ、是又爲御心得御座ハ、以

上、

一筆令啓ハ、然者私親子今月三日御當地へ着仕、一昨五

日但馬守殿へ首尾能興入相調ハ、其段ハ委曲連署申入ハ

条不具ハ、大坂伏見道中忍申ハ可然之由被仰下ハ儘其

意得仕ハ、雖然桑名ニハ被聞召付、攝津守殿方屋形船

三艘御馳走ハ、又杉重・手樽一荷船へ御持せハ、道中随

分急申ハへとも娘持病之頭痛發ハ致療治ハ故、漸十三

日ニ道中罷通ハ、直ニ興入可仕ハへとも右ニ如申一日田

町御屋敷へ罷居頭痛之療治仕ハ、若御出合もハハ、可然

様ニ可被仰上ハ、猶期後音之時ハ、恐惶謹言、

朱力キ

明曆三年

卯月七日

嶋津中務

久茂判

御文庫廿一番箱五拾二卷中

鎌田筑後殿

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

人々御中

猶以私儀御弓被仰付之旨鎌田源左衛門へ被仰下之由

被申聞ハ条相勤申ハ、是又爲御心得ハ、以上、

態一筆令啓達ハ、然者 若御前様今曉七之頃 御姫様御

誕生ハ、殊御親子様御機嫌能御座ハ日日出度奉存ハ、先

以此等之御祝儀爲可申上伊東元右衛門申付ハ、委曲口上

ニ申含ハ間不詳ハ、恐惶謹言、

卯月十六日

嶋津中務

久茂判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

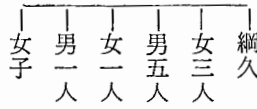
町田勘解由殿

人々御中

封面名ハ略ス、左之通

一若御前様御平並御姉様御誕生候事、
一中務御弓被仕候事、使伊東元右衛門、
明曆三 五月二日、

綱久公御譜中



於龜

明曆三年丁酉四月十九日誕生、母同于島津又十郎

新納志頼女也

忠興室

家臣入來院隼人重香室、
異本重治

按スルニ前文十六日ノ書面ニ今曉御姫様御誕生云々アリ、
十六日ヲ十九日ニ改ラレンモノナルヘン、

715 光久公御譜中

同四月十六日於三東叡山ニ被レ修ニ

大猷院殿七年忌之法會一、至三同二十日ニ闕、光久以三家臣
桂外記忠守一、爲三使者二、奉三獻御香奠銀三十枚于 尊
靈前一、

716 御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

就 (家光) 大猷院様御遠忌於東叡山御法事御執行外、因茲以使
者御香典獻上之外、則備御影前外、入念外段及 高聽外、
恐々謹言、

朱力年 明曆三年 四月廿一日

阿部豊後守 忠秋判
松平伊豆守 信綱判
酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

717 御札令拜見外、公方様弥御機嫌能被成御座目出被存外、

猶以御様躰被相同度付る被差越使者外、益御勇健之御事
外間可御心安外、随而其國之看一種被獻之外、右之趣遂
披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
明曆三年
四月廿三日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在り

猶以伊角ニ有 上意之通奉得其意ナリ、御省略之儀者

相談仕、伊角ニテ御返詞可申上ナリ、各方御書面追有

御報可申入ナリ、將又只今留守居衆被申ナリハ伏見院殿

御姫様一昨晚御輿入御座ナリ由風聞申通被申ナリ、雖然

御祝儀など被仰上物音無御座ナリ、爲御心得ナリ、以上、

追有令申ナリ、

一大猷院様御七年忌之御法事於上野今月十六日同廿日迄

御修行ナリ、廿日御正忌日ニ有 公方様被爲成御參詣、

御機嫌能被遊 還御ナリ、就其御在國之御大名衆方以使

者被仰上可然由諸留守居被申遣由ナリ、此方之儀者前々

鎌田源左衛門殿方御機嫌伺之御使者一ヶ月ニ兩度宛可

被差上由爲被仰下由ナリ間、其御使ニ有可相濟と存ナリ、

其故ハ此比留守居衆被申出ナリ者、前々七月ニ兩度宛

御機嫌伺之御使可被差上由申上ナリへとも、自今以後ハ
一ヶ月ニ一度敷、様子ニ有兩月ニ一度カ、考時分被差
上可然ナリハんと被申ナリ、左様ニナリハ、右之使ニテ相濟
可申と存ナリ、御機嫌窺御使者之儀向後其御心得ニテ可
被仰付ナリ、

一薩州様御事今度御誕生ニ付、御血忌差合御座ナリ故、御
法事中ニ不被成御參詣ナリ、勿論御法事御奉行衆御断
被仰入右之通ニナリ、其元よりの御使者ニハ桂外記差出
ナリ、委細彼人下ニ可申入ナリ、

一公方様御祝言御座ナリ由ニ有 伏見院殿御息女様今月十
九日當御地へ爲被成御着由ナリ、殊之外御隱密ニテ御城
へ御輿入之日限相知不申、水野石見守殿(忠貞)・青木遠江守
殿・野々山丹後殿京都方被成御供由ナリ、重有相知ナリ時
分細々可申上ナリ、

一長谷場伊角去ル十九日之晚到着ナリ、方々へ被進御書七
通檣相届ナリ、就其爰元ニテ出合ナリハ、ケ様之衆餘方へ御
立入之衆へハ類火ニ被成御逢ナリ、從御大名衆も何そ被
遣由ナリ、此方も御書計ニテハ如何可有之哉之由ナリ間、
何も令相談縮面三卷五卷ツ、相添、御書認直進之中ナリ、
今度其元方御状不參方へも被遣ナリて可然と出合ナリ衆二

三人相加^レ、爲御心得別紙ニ書付進^レ、可有御覽^レ、

右其元^方參^レ御書之内、永井弥右衛門殿へ被進^レ御書

上卷ニ 太守様御名無之、御名乗計御座^レ、不念之至

存^レ、向後被入念^レ様ニ堅可被仰付^レ、

一高力左近殿へ御返書被進由各状ニ見え申^レ、伊角へ尋

申^レへとも不持来由^レ、如何無心元^方、定^ル其元ニ

不被渡^レの^レハんと存^レ、

一久世宇右衛門殿御息女今月七日ニ根木五左衛門殿へ御

祝言相濟^レ、後便ニ御祝儀状被進^レハん哉、爲御心得

一御老中様取次衆へ例年今時分卷物之類被下^レ付、前

々之帳面見合ちりめん三卷ツ、遣^レへとも、此節者何

方^方被下^レも御断申上由ニて受不被申^レ、可被聞召置

外、

一土持段右衛門今月十四日到着^レ、御機嫌窺之御書相

認、今日御老中迄差出^レ、御奉書可出^レ間急度可被罷

下^レ、伊角事者今少見合、来月入^レて可差出と相談申

置^レ、

一京極信濃守殿・松平助之進殿^方御状被進^レ間差上^レ、

可被備 上覽^レ、恐惶謹言、

朱カキ 明曆三年 卯月廿三日 嶋津中務 久茂判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

人々御中

719 網久公御譜中

去々年我等官位昇進之爲御祝詞、預芳翰殊更御太刀一腰、

馬一疋被懸懇意^レ、珍重々々過分至極、謹到遠濤此等之

段別^ル令満悦^レ、猶使者可爲演説^レ間不能詳^レ、恐惶不

宣、

薩摩守網久御判

朱カキ 明曆三年 卯月廿四日

謹上 中山王

720

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶々了洩申^レハ脇々も借金なと仕^レ事罷成^レハ、才

寛可仕_レハ共、只今老協之借金一圓ニ無御座_レ、爲御意得_レ、以上、

又申_レ、了洩書物并御國元へ召連_レ人数付差出_レ間、爲御納得遣_レ、爰元ニる當日被下置_レ御賦之外過上人在_レ之、ケ様成ニも御賦可被下哉、御相談之通同前ニ御返事可承_レ、左_レハ、其様ニ可申達_レ、追_レ令啓_レ、

一長谷場伊角便ニ上御屋敷御進上_レ、返地(松平知行)隠州様御上

屋敷邊へ御申被成度由被仰_レ下間、三雲太郎右衛門・有川八右衛門へ致相談、方々上り屋敷尋申_レへ共不承立_レ、増上寺裏門通之小路毛利大膳殿屋敷被差上由_レ条、見せ申_レハ、此方上御屋敷_レ抜群狭_ク御座_レ、此外ニも折角承合_レて能屋敷御座_レハ、上御屋敷差上申、返地可申請_レ、前々鎌田源左衛門殿被申_レ哉、鍋嶋孫平(正茂)太殿屋敷替_レ罷成間敷と被申由_レ、此比又彼方_レ一二千兩新網町屋敷之上ニ遣_レハ、替可申と被申_レ、餘高直ニ_レ條最前半分御買入被成_レ時分之間賦を以相残_レ屋敷と新網町引合坪付仕_レハ、五百八拾兩餘ニ相當_レ、責_レる七八百兩も遺儀ニ_レ者、相談可仕と申_レハ無合点、右此方_レ申_レ一倍ニ_レるも_レハ、左

も可有之哉との返事ニ_レる_レ條、今少承合追_レ可令申_レ、一目黒不動之近所へ石河太兵衛殿屋敷在_レ之、可被爲賣之由三雲太郎右衛門迄被申_レ、是者御用ニ罷立時節も可有御座と存、爲見ニ遣申_レハ一段能さうニ見及申_レ由ニ_レ、直段三百兩と被申_レ、其内ニ少者入可申と申事ニ_レ、委曲太兵衛殿_レ太郎右へ被遣_レ書付進_レ間可有御覽_レ、

公方様御鷹野ニ被爲成_レ所にて_レ條、或御茶屋或長屋等被仰付儀ハ可難成かと申事ニ_レ、其段ハ能承_レる重_レ可申入_レ、其方_レ御返詞御座_レ迄者、待可申と被申_レ下間、先以被得御内意、御望ニ_レも_レハ、可被仰越_レ、其上にて随分相談仕見可申_レ、

一吉田了洩當_レ地へ參府之刻御状被相付_レ、彼人妻子召連可罷下時分ニ_レ、御賦其外前ニもケ様成衆へ如爲被下、諸事可申付之由見得申_レ、定_レる相良主計室・菱刈縫殿夫婦罷下_レ時節、御心付銀被致拜領_レ例相考、銀子可遣との御事ニ_レハ、雖然古帳致焼失分量不相知_レ間難定_レ、於其元御吟味_レて可被仰越_レ、了洩事も夏中ニ者罷下儀難由申_レ條其中御報承度_レ、其身_レ申出_レ者諸道具悉焼申_レ間、少々ニ_レるも取立_レハ、金子百

兩無之ハハ不調ハ間、右員數程無利ニ借可被下由申
出ハ、借金之事ハ堅御法度ニ被仰出ハ間相談不罷成
ハ、拜領銀ともハハ、其餘者自分ハ借金仕可相弘と
存ハ、何れとも可然御相談ハ尤ハ、恐惶謹言、

朱カキ

明曆三年
四月廿八日

鳴津中務

久茂判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

鳴津筑前殿

鳴津圖書殿

人々御中

721

御文庫式拾志番箱五拾貳卷中

光久公御譜中ニ在リ

猶々神尾備前守殿・矢部藤九郎殿ハ御状被進ハ間差

(忠政)

上ハ、可被備 上覽ハ、以上、

一筆令啓ハ、然者 大猷院様御七年忌之御法事於上野東
叡山先月十六日ハ同廿日迄御執行御座ハ、就其御使者之
儀先書如申ハ桂外記差出申ハ、御香奠前々之員數見合、

又者御並衆被承合 隅州様より銀子三拾枚、從 薩州様

同五枚御献上ニ首尾能相納、御奉書出ハ間、外記差下
申ハ、委細之段可被申達ハ條不能一二ハ、恐惶謹言、

朱カキ

明曆三年
五月朔日

鳴津中務

久茂判

鳴津圖書殿

鳴津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

人々御中

未ノ付面ニアリ

大猷院様御法事之御使杜外記被差出御香奠首尾能相濟候由、

明曆三年 六月廿一日桂外記持下、

722

光久公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀帳子單物數五到來悦覺候、猶酒井雅樂頭可
述ハ也、

朱カキ

明曆三年
五月三日

家綱
墨印

薩摩少將殿

御文庫廿一番箱五拾貳卷中 光久公御譜中ニ在リ

先度江戸へ被遣り村尾舎人殿御状致拜見り、則御紙面之通隠岐守ニ申聞り、

一御國元ニ 公儀へ御進上被成り檜・けや木無御座ニ付る、杉障子之板子并せり板先年御進上被成り間、此度五百枚程可被爲上之旨其通申聞りへ奉、せり板之儀、此度之御作事ニ入申木にて者御座有間敷り間、杉板之しりやう可然と被存事り、

一御國元ニ松木ハ御座りニ付る、大引物御進上可被成之旨被仰越り、大引物山出御手間入申物ニ御座り、其上松木大引物者江戸近邊ニ多ク御座り物ニあり間、松こふしさへ無御座りハ、角物ニ被成御進上可然と存り、左りハ、平物御作事ニ入申物ニ御座り間、是以角物被指添御上ケ御尤ニ被存り、寸尺之儀目錄指添令進り之間、此通御支度被遊式千本程ニあるも、三千本ニあるも御進上可然存り由隠岐守被申り、

一けや木御材木之儀者御門外御作事ニ入不申り間、御門ニ罷成り之様ニ御取せ御進上可被成り、御國元廣御座り間、定るけや木可有御座り条、御門六ツ七ツ程之御材木御用意り御進上可然と被申り、恐惶謹言、

朱力十
明曆三年 五月八日

久松清左衛門
勝成判

鳴津圖書様

鳴津筑前様

鎌田筑後様

新納右衛門様

町田勘解由様

人、御中

724

御文庫廿一番箱五拾貳卷中 光久公御譜中ニ在リ

覚

一松木角七寸方八寸迄長サ三間方三間間中迄

一松之平物三間方五間迄厚サハ柱同前

一先年御進上被成りせり板之儀ハ、此度之御作事ニ左而已入申木にてハ御座有間敷り間、杉板しりやう御上ケりて可然と存り、

一実々松木大引物御進上可被成と被思召りハ、左程長キ大引物ハ 御殿ニ入不申り、四間五間之内外御支度可被成り、長キ大引物ハ御臺所ニ六七間之引物拾本程之外ハ入不申り、

一御材木寸尺之儀ハ江戸御奉行中より此方へ被仰越り付、

様子と存り間書付りて進之申り、以上、

宋力キ
明曆三年

五月八日

久松清左衛門(勝感)

鳴津 圖書殿

鳴津 筑前殿

鎌田 筑後殿

新納右衛門佐殿

町田勘解由殿

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在り

猶く爰元 上々様方別の御機嫌能被成御座り間可易

御心外、以上、

應用飛札外、然者昨日 公方様方

薩州様江 上使石河弥左衛門殿ニ御鷹之鶴五御給、目

出度奉存外、先以此等之儀 少將様可被達 貴聞外、昨

日此方御同前ニ憐御拜領之衆、松平美作守殿・松平下野

守殿ニあり、就其右之爲御礼從御親様方輕キ使可有進上

覚悟ニりと留守居衆相談之由り、可被成其御心得り、猶

期後音之時り、恐惶謹言、

宋力キ
明曆三年

五月十四日

鳴津中務

久茂判

鳴津 圖書殿

鳴津 筑前殿

鎌田 筑後殿

伊勢 兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

人々御中

末ノ封函ニ

明曆三酉ノ五月十四日之状六月朔日ニ飛脚持下り、

薩州様へ御鷹之鶴御拜領之事候、

726

御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在り

御札令拜見外、公方様御機嫌能被成御座、目出度被存之

由得其意外、弥爲可被相同御様躰被差越使者外、益御勇

健御儀外間可被御心安り、随而白砂糖二桶并御肴一種被

獻之り、右之趣遂披露り處、入念り段御喜色之御事外、

猶使者可爲演説り、恐々謹言、

宋力キ

明曆三年 五月十六日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

727 綱久公御譜中

綱久
 | 男女十一人略
 | 忠顯

後忠智・幸壽丸・權十郎・市右衛門・筑後・齋
名香雲

明曆三丁酉六月五日誕生、母家臣玉利九兵衛女、初雖
爲三家臣島津又助忠清之後嗣、寛文十二年壬子春去三忠
清之家、爲三兄忠長之後嗣、相續北郷家、

忠長ノ事ハ正保二年六月三日ノ場ニアリ、

728 十三番箱五十六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、當四月於東叡山 大猷院様御遠忌之御法
事首尾能御執行、其上御参堂之儀相達珍重之旨得其意、
因茲被差越使者、入念、趣及 上聽候、恐、謹言、

朱力キ
明曆三年 六月十五日

阿部豊後守 忠秋判
酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

729 御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見候、公方様御機嫌之御様躰爲可被相伺之、
被差越使者候、雖酷暑、益御勇健之御事、間可御心安、
將又琉球布・焼酎并御肴一種被獻之、目録之通遂披露
、遠境入念、段御喜色之御儀、委曲使者可令演說
、恐、謹言、

朱力キ
明曆三年 六月廿三日

松平大隅守殿

730 光久公御譜中

明曆三年六月註三材木之目録、就レ執政ニ願、奉下獻レ之以
助、高城經營萬之一上也、同七月朔日投レ奉書容レ之、
依レ之翌年進三獻杉戸大坂・樟板・松挽物、

731 十三番箱五十六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、公方様御機嫌能成御座目出度被存
由承届、將又御本丸御作事可有之付、御材木被獻之

度之由得其意外、目錄之通遂披露外之處、入念外段御喜色之御儀外、尚使者可令演説外、恐々謹言、

朱力キ
明曆三年 七月朔日

阿部豊後守 忠秋判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

楠木之覺

一長 八尺 あつき六寸 は、壹尺六寸

一長 八尺 あつき五寸 は、壹尺六寸

右之通ニ木取被成外へ者、御用ニ立申候、以上、

朱力キ
明曆三年 七月三日

神尾備前様

鈴木修理 (長徳)

御文庫廿一番箱五拾貳卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以近日 公方様御祝言可有御座外由風聞外、定日

不相知外、究外ハ、尤御左右可申外、御并之衆御祝

儀之御使人躰之沙汰未無之外へ共、多分御名字之衆にて外ハんかと存事外、内々可被仰付外哉、又御元服も御座外由、是も実正不相知外、以上、

一筆令啓達外、然者昨日八ツ時迄

公方様御鷹之雲雀 薩州様へ御拝領外、上使川口源兵衛殿にて御座外、先以目出度御仕合外、此等之儀幸村尾舍人今日當地罷立外間令申外、尤從 太守様御札之御使御進上可被成外、右鶴御拝領御札之御使者程之人躰可然由留守居衆被申外、其御心得可被成外、恐惶謹言、

朱力キ
明曆三年 七月五日

嶋津中務 久茂判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

参人々御中

末ノ封面ニアリ 名ハ略ス

明曆三ノ七月五日状同十九日ニ村尾舍人被持下外、

外、外ニ前々之御差圖一通相添差上申外、

猶以去ル朔日之晚備州老へ嶋津中務・鎌田左京・鎌田太郎右衛門・諏方左右衛門・澁谷次郎左衛門・松

一御差圖之儀備州老別而御念、大工彦六被召寄被成御相談由外、御礼状可被進刻、能く被仰入可然奉存外、

元昌庵・留守居兩人被召寄御料理被下、別る御馳走忝仕合外、此等之儀若 太守様方御礼被仰入儀にて

一御普請被仰付外者多分右彦六頭取可仕かと存外、左様ニ外共備州老御意次第可仕外哉、是又御返事待入外、

も哉可有御座外、爲御心得申入事ニ外、以上、一筆令申外、然者材木御進上之儀目錄之旨被献可然之由被 仰出目出度奉存外、委曲御奉書ニ相見得外間、

一野津隼人ニ差下申外諸大名衆造作之書立のことく、弥何方も急ニ被仰付躰ニ外、尤右御人数之外、其後作事御取付之衆過分ニ有之外、別紙ニ書付差越申外、乍

不及口能外、

不申御作事急ニ被仰付外共、自餘之御方方も遅ク出来可仕外、其御心得にて御相談にて可被仰越外、恐惶謹

一右材木御天守道具ニ外条、間ニ不合儀も外へハ仕之事ニ外間、備州老被聞召合別紙ニ御書付被遣外、可被得

言、

其意外、兼るも如申入あせり板者弥補之木被仰付尤ニ外、

明曆三年 七月五日 嶋津中務 久茂判ナシ

一右之材木當地へ参着外儀者當暮ニても、求春ニても可然之由、此中より備州老被仰聞外、雖然調次第早く被

嶋津 圖書殿
嶋津 筑前殿
鎌田 筑後殿

召上外能可有御座と存外、

伊勢 兵部殿

一上御屋敷御普請御差圖備州老へ被成御頼外處ニ、去ル朔日彼方へ被召寄差圖出来外間、拜見可仕之由被仰聞

新納 右衛門殿
町田 勘解由殿

外条見届申持帰外、今度致進上外間可被備 上覽候、一右差圖三通ニ被成外、此内御勝手次第可被仰付之由ニ

鎌田 源左衛門殿
参入、御中

末ノ封面ニ左ノ如シ、宛名等略ス
 明曆三ノ七月五日状同十九日ニ村尾舎人被持下リ、

光久公御譜中

猶々御書ハ輕キ御使者ニ被遣_レハ、可然存_レ、又付状ニ我等之判仕_レヘなと、_レハ御延引ニ可罷成_レ間、御一人ニ難成_レハ、餘之家老衆と同前ニ三人之御判可被遊_レ、一刻も急参_レ様ニ御校量專一ニ_レ、扱又一昨日之飛脚昨日久見崎追付申_レ間判形仕_レ、是ハ今朝夜明時分ニ_レハ彼地へ参着可仕と存_レ、ケ様成一大事之役儀を被仰付、此益にも罷帰_レ心を仕居_レ、以上、

追_レ申_レ、宿元へ此地へ罷在_レ由可被仰聞_レ、此状御居可被下_レ、

以次飛脚申_レ、然者昨朝五前ニ大小路_(川内)へ致参着_レ、舟ニ_レ長崎へ可参格護_レ、久見崎へ相下_レ下_レ處ニ潮時悪_(出水郡)、夕汐ニ出船仕、長嶋へ今朝寅之刻ニ参着申_レ、承

外へハ昨日未之時分引出_レ、酉之刻ニハ阿蘭陀如沖爲走出由申_レ、質ハ一人取申_レへ共、長崎へ不志船ニ_レ、阿蘭問、無心元存_レ、彼船ニハ御道具衆五人迄乘申_レ、阿蘭陀ハ廿七人有之由_レ、偽事ヲ申をも不存_レ、改_レてハ見

不申と聞得_レ間、実正ハ不相知_レ、今少之儀ニ_レ不参會千萬殘多_レ、就夫相良主税長崎_(長崎)へ私_レ之使として差越申_レ、彼地へ入津_レハ、左右承_レ、_(有米)そ安堵可仕_レ、山田民部少も一昨日彼方へ参、萬事三原傳左衛門へ相談爲被申通承_レ、傳左衛門儀も夕船中ニ_レ違申_レ哉逢不申、尤出水之變衆迄も最早帰被申_レ、一人も居不被申_レ、併横目衆一人被殘置_レ、并彼嶋物頭子越左衛門と申人口状儘ニ承_レ、右之仕合ニ付_レ、從太守様無吳儀阿蘭陀入津仕_レ哉、無御心元通御書ニ_レ被仰遣御尤ニ奉存_レ、私儀者長崎へ入津之左右此元ニ_レ可承と存、阿久根川へ酉之刻ニ船入_レ、責_レ此地へ罷居_レハ彼方ニ聞召_レ、首尾能_レハんかと存_レ、甲斐少介・三坂宇左衛門儀も去七日ニ長崎出船之由_レ間、彼帰にも阿蘭陀入津之可申来かと存_レ、返々警固之御道具衆ニ今五六人相添乘せ不申_レ事後悔千萬ニ_レ、其上楫取をも載申_レハ、何之氣遣も無之儀ニ_レ、我等不参會程之無仕合ニ_レ無是非_レ、恐惶謹言、

朱力キ
 明曆三年 七月十三日 島 圖書 久通判

鎌 筑後様

人々御中

736

(挿入)

正文在御文庫三番箱六卷中

糺合ス

光久公御譜中ニ在リ

御判

掟

一領國之内郡代役儀嶋津筑前・新納右衛門(久懸)江申渡、郡奉行被相附(久懸)外条致相談、国中之儀諸事入念可申付事、

一國中耕耘之時節、收納方并起荒地・開新田・水廻等之見立可爲專要、郡奉行國中節々可行廻、依鉢郡代も差

越所々見計可致沙汰事、

一前代之檢地親疎有之由依有其聞、今度相改之際從郡奉行諸所之役人共ニ令對談可致沙汰、後日隨善要之(悪九)行、

必可加賞罪事、

一領國之百姓農人等至于女童迄、耕耘ニ可出之由幾度も可申渡、不用之族者稠敷其罪可申付事、

一右同断之者共家居衣食等、萬事不相應之驕無之様ニ堅

可申渡、百姓以下之分際程ニ可致格護事、

一百姓ニ可成者、或寺社家之内致居住、或号又被官、或

紛町人濱村之者隠住之由有其聞、此節急度致沙汰、百姓ニ可申定事、

一士之被官應分限可抱置事、

一不分藏入・給地、百姓之沙汰自郡奉行可承事、
右之條々聊不可有緩疎者也、
明曆三年七月十七日

737

御文庫拾三番箱五拾六卷中

光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、去比以上使息薩摩守御鷹之梅首鷄拜領

之儀相達、忝被存之由得其意外、依之爲御札被差越使者、

其國之御肴一種被獻之外、右趣遂披露外之處、一段之御

仕合外、恐々謹言、

朱力年 明曆三年 八月三日

阿部豊後守 忠秋判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿 (光久)

738

御文庫廿二番箱五拾一卷中

光久公御譜中ニ在リ

追ひ申入外、

一御進上御材木之内杉障子板百録御目錄ニ見得申外、其

内卅枚餘屋久嶋(熊毛郡)より直ニ當地へ参り、廣さ五六尺有之

外、尤御目錄ニ合申外、豎七尺二寸ニて外、就其西之

丸當時之御殿之杉戸堅之尺八尺有之由留主居衆被申

外、左外へハ八寸程短可有御座外、餘分之板ハ八尺ツ、
、被仰付尤外、併定る屋久嶋にて被相調外ハん間、
被仰遣儀も可難成外哉、(西諸風郡)須木山へも大形有之様ニ村尾

三右衛門被申外、彼方ニても可被仰付哉、何共御進上
物之儀外間、御用ニ不罷立外如何ニ外条令申外、

一 中屋敷長屋作可申付由被仰越外間、定普請方仁礼藤右
衛門ニ上井勘兵衛相加、近日取付申答ニ申渡外、就夫
御步行衆三四人付衆ニ申付外へハ、御步行衆御番相動
外人纒三人有之事闕ニ外間、功者之御步行衆四五人急
度被召上尤外、上御屋敷地引見廻又大廻ニ参外材木
受取衆等申付外故、右之通無人ニ外、爲御心得外、

一 三雲太郎右衛門依序の神尾備州老へ申上外者、參勤伺
之使者于今御返事無之外の滞留仕罷居外、爲何御出合
も不被聞召外哉と申入外へハ、諸大名へ御普請被仰付
儀ニ付る、御相談不相究外、大隅守殿より御進上之材
木も弥急度参外様ニ可申遣由被仰外由外条、其御心得
肝要ニ外、

一 松平伊豆守殿御氣色弥御快然之由外へ共、未御登城も
無之外、風説ニ承外ハ未すきくとも無御座外由申外、
是又爲御存外、

一 上御屋敷御方女房衆廿人餘被召下外、如御存拾人外外
者御手形出不申外、主從三十人ニ及申外間、三手ニ仕、
召下申答ニ外、就其申事ニ外、伊瀬知久左衛門相雪罷
下外刻、二手ニ女十四五人罷下外、其後丹世夫婦も罷
下外、今度相良左近・了淵・新納四郎右衛門罷下外へ
ハ事々敷外間、女房衆三手之内一手者留置、来月初爲
立可申外、新納四郎右衛門夫婦も来月中罷立外様ニ申
渡外、爲御心得申入置外、恐惶謹言、

宋力平
明曆三年 八月五日 鳴津中務 久茂判

- 鎌田源左衛門殿
- 町田勘解由殿
- 新納右衛門殿
- 伊勢兵部殿
- 鎌田筑後殿
- 嶋津筑前殿
- 嶋津圖書殿
- 人々御中

本ノマ、
明曆三年七月五日ノ状同十九日ニ村尾舍人被持下外、

十三番箱五十六卷中 光久公御譜中ニ在リ

爲八朔之御祝儀以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被献
之、遂披露候之處、一段之御仕合、恐、謹言、

朱力年
明曆三年 八月七日

阿部豊後守 忠秋判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶以松平助之進殿^(争忠)之御状兩通・石川弥左衛門殿御

状一通・坂井八郎兵衛殿御状一通・永井弥右衛門殿^(成念)^(直元)

御状一通進上仕内、弥右衛門殿御状ハ先日梅首鷄^{クイナ}

御拝領爲 上使御出之刻 薩州様御登城之處ニ、別

ゐ御懇志之由ニ付、三原九兵衛御使ニ参り節、御

書相調進入仕り御報にて、以上、

一筆申入り、然者上御屋敷方女房衆餘多被召下り、如御

存知十人之外者御手形出不申り故、三手ニ仕、今日伊藤

孫兵衛頭取にて一手被罷立り、二番立来ル十二日本田九

左衛門・山本帯刀同道仕等ニ、今一手ハ今月末来月初

ニ小嶋甚兵衛同道ニ立せ可申り、其故ハ夫婦被召下り

御文庫廿一番箱五拾二卷中 光久公御譜中ニ在リ

尚以如例年爲八朔御祝儀之御使、鎌田太郎右衛門差

出申り處、御奉書出申り間進上仕り、次ニハ上御屋

敷水繩仕り書物進入申り、可被御覽届り、以上、

衆打續罷下りへハ、節々御手形申受り儀如何敷り、殊ニ

先便ニ申り風聞共り、彼是ニ付如此留守居衆へ相談仕り、

若御出合も御座りハ、右之旨御取合尤り、委曲孫兵衛口

達可仕り、猶期後音之時り、恐惶謹言、

朱力年
明曆三年 八月十日

鳴津中務 久茂判

鳴津 圖書殿

鳴津 筑前殿

鎌田 筑後殿

伊勢 兵部殿

新納 右衛門殿

町田 勘解由殿

鎌田 源左衛門殿

人々御中

封面ニアリ

西ノ八月十日ノ状伊藤孫兵衛持下江戸御女房被下返り

御付状也、

名宛ハ略ス

伊地知及右衛門去ル十一日未明到着仕、去月廿六日之御

札井口状之趣得其意^(元應)、然者神尾備前守殿より 公方様

御輿入之儀御注進^レ、御返札及右衛門持參仕^レ、則持せ

進覽申^レ、尤御報無之^レ、將又上御屋敷惣様地形三尺程

土を可引下之由 上意之旨被仰越^レ付、普請奉行へ申

渡、大工衆さけす^レ爲仕^レ處^ニ、三尺下り^レへハ馬場よ

り或壹尺或五六寸ツ、低ク罷成^レ、左様^ニてハ御屋敷

より水はかせ^レ事可難成^レ、其上一尺七八寸堀^レへハ御

屋敷中何方も水出申^レ、旁以難成儀とも^ニ間御断申事

外、今一往被窺御意可被仰越^レ、乍不申急度御返事承度

外、随^レハ中屋敷作事可申付由先便^ニ被仰遣^レ条昨日よ

り取付申^レ、當分ハ諸事高直^ニ故、御困より参^レ材木

不足分ハ、雜木^ニて如何^ニも輕ク可相調由申付^レ、爲御

心得^レ、恐惶謹言、

^{朱カキ} 明曆三年 八月十三日

鳴津 圖 書 殿

鳴津 筑 前 殿

鎌田 筑 後 殿

伊勢 兵 部 殿

鳴津 中務 久茂判

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

人、御中

封面ニ左ノ通

明曆三酉八月十三日ノ状同廿八日ニ伊地知及右衛門持下^レ、

上御やしき地形ノ事也、

742 御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見^レ、去比以 上使同姓薩摩守御鷹之雲雀拜領

之儀相達忝被存由得其意^レ、依之爲御札被差越使者并御

肴一種被獻^レ之^レ、右之趣遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐

々謹言、

^{朱カキ} 明曆三年 八月十九日

阿部豊後守 忠秋判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

743 光久公御譜中ニ在リ

其方參勤之儀示預之趣達 上聞^レ之處、勝手次第當年中

可致參府之旨被 仰出^レ、可被得其意^レ、恐々謹言、

朱力^キ
明曆三年 八月廿三日

阿部豊後守 忠秋判

松平大隅守殿

酒井雅樂頭 忠清判

御文庫廿一番箱五拾二卷中

起請文前書

一奉對 光久様、不顧私無別心御奉公可申上事、
 一我等事今躰ニ被召仕、御高恩生々忝奉存外、若光久様
 萬々年過りぬ、自然之時老後生まで之御奉公可申上外、
 一於我等身上ニ聞召被掠儀外ハ、何時も御糺明被遂可
 被下外事、

右之條々於偽申上者

牛王神文略

明曆三丁酉年八月吉日

兄玉勘之助 家次判

御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

大隅守殿爲御見廻飛脚進置外間一書令啓外、其表弥無
 別条外哉、無御心元存外、先度老度々家来方迄預御状
 披見本望之至外、大隅守殿當年參勤被成外儀、江戸

御左右如何申来外哉、此表近國之大名中于今在國之事
 外、唯今迄參府相延外間、定る年内ハ御下有間敷かと
 存外、若左外ハ、大隅守殿緩々と御休息御満足察入存
 知外、我々事例之通来十月老下向可申と存外、併未御
 老中ハ何共不被仰聞外、御左右相待有之事外、
 一此度江戸御普請付ぬ、杉戸大板并楠あせり板・松大引
 物御進上可被成之旨、神尾備州迄爲内證目録を以被仰
 入外處、則御老中へ被申談外處尤之由にて御奉書被爲
 遣之由承外、弥目錄之通被入御念、御支度外ぬ来春早
 々御國元出船被仰付外様無油断可被申付外、
 一金山之儀首尾如何承度存外、去春比ハ雨繁外ぬ、間歩
 ニ水深外故、金掘大形在所へ罷帰外處、此比ハ金山人
 數六七千程も有之様先日大隅守殿外被仰聞外、一段之
 事外、乍去只今之人数にても不足外ぬ、御勝手向然共
 無之躰外ハ、様子可被申越外、我々致參勤外老備州へ
 遂相談御年寄中へ申入、人数増申様可致才覺外、万事
 之様子一々可被申聞外、

一大隅守殿江戸上屋敷御作事于今御手付も無之様相聞
 外、諸大名中屋敷長屋ハ大形被立外様承外間、大隅守
 殿御屋敷内之御作事ハ何時ニも不苦外、先長屋如何

様にも被仰付尤存り、餘延々々ハ、見苦敷可有之、

猶期後音之節、恐々謹言、

宋力キ
明曆三年
九月二日

松 隠岐守
定行判

嶋津 圖書殿

嶋津 筑前殿

鎌田 筑後殿

伊勢 兵部殿

新納 右衛門佐殿

町田 勘解由殿

鎌田 源左衛門殿

746
光久公御譜中

正文在文庫

爲重陽之佳事、小袖五到来歛、委曲酒井雅樂頭可述

外也、

宋力キ
明曆三年
九月七日

家綱
墨印

薩摩少將殿

747
光久公御譜中

定

一 運賃船送状之外、私荷物持渡りハ、以差出別ニ送状を取、鹿兒嶋役所に出之、以下知品物可取之事、

一 従前々琉球上下之船ニ女致往来儀禁制之間、弥可相守之、

附 刀・脇指・弓・鉄炮并玉薬・具足・とびなしの類
持下儀可爲停止事、

一 船頭水手かしもの之方地下人を内之者ニ召成儀堅令停止事、

一 船頭水主於嶋中萬買物かけニ入付儀禁止之事、

一 船頭水主之者致驕、或押買押賣仕儀曲事深重之間、堅可申付事、

一 船頭水主於嶋中女房を迎、所帶立儀前々より御禁制之處、頃日相背もの有之由不可然り、向後稠敷可致沙汰之間、堅可申付之事、

一 地下人就爲致祝儀、船頭水主或水かけ或祝物を遣、致酒宴儀令停止事、

一 船頭水主衣類御定之こと可爲木綿布、尤上帯下帯迄木綿布之外堅令停止事、

一 船頭水主法度相背、致寺領之由り、向後者奉行より糺

咎之輕重、或科物或籠舍可申付之事、

一 船頭水主博突うつ事堅可爲禁止、若相背族者船頭ハ致付状、鹿兒嶋江可爲差上り、水主者一節籠舍申付其上爲科料銀子一枚、勿論其船頭江及同断之科料可申付事、

一 在番衆交替之節、荷物乗せおろし者乗船之水主其外下り船之水主たるへし、地下人召仕間鋪事、

一 運賃船仕上せ米及不請取、前運賃取り儀雖爲御船令停止り、尤水手飯米於無之ハ、其船之應人数ニ可被相渡之事、

一 琉球より上國之人、不依何色、數寄道具持上りりハ、琉球奉行見届、於無御用者可致活却事、

一 諸船荷物積入、日和待之間、何方之湊ニおひても船頭水主猥ニ陸地へ下儀可爲停止り、勿論遊女之類通融一切禁止之事、

右條目之旨堅固可相守之、若違背之族者可及沙汰之条無緩様可申渡り、勿論奉行代合之節ハ儘可被継渡者也、

明曆三年酉九月十一日

(鎌田) 源左衛門

(町田) 勘解由

(新納) 右衛門

748

掟

一 南蠻船於来着者、以計策船道具并兵具等取置、南蠻人及不残此地江可被差渡事、

一 右之船着岸り而嶋江取懸り者、成程致防戦可討果、生捕之者者諸道具同前ニ此方江可被差上り、

付 不限南蠻人、吳國人来着りハ、早く此方江可被差上事、

一 吳國船致破損りハ、荷物入念不散様申付、乘来者同前ニ此地江可被差渡事、

一 唐船着岸之刻、唐人用物共地下人相達りハ、代銀差替ニ可取、若銀子無之、以別色於相濟者、其趣之書物相添可請取り、勿論諸事非法之扱ニ不遭通之書物取置、

其旨此方江可被申上り、

付 米代銀、来朝之船琉球立直たるへし、帰帆船者右

立直ニ三部上りニ可賣渡事、

(伊勢) 兵部
(鎌田) 筑後
(高津) 筑前
(高津) 圖書

一 往還之唐船破損ハ、乗船を出、荷物等及不隠様入念相改、唐人より無出入通之書物取置、荷物同前ニ鹿兒嶋ニ可被差上事、

一 唐船少ク致破損拵ハ、材木入具等地下より相達、相應ニ代物可取リ、尤楫櫓之類及可被賣渡事、

一 唐船着岸之時分きりしたん宗之道具入念、船中可相改事、

一 在番之奉行衆國司ニ爲禮儀可被差出儀、着津之時分年頭歸帆之節たるへし、進物者着津之砌青銅百疋、其外者一切令停止ハ、

付 付衆被差出儀可爲無用事、

一 國司右奉行所ニ見廻之儀惣ニ可爲無用ハ、奉行入津之時分、爲禮儀以使者被仰ハ、進物焼耐一壺、年頭又者歸帆ニ付、使者被遣ハ共進物可爲禁止事、

一 琉球ニ用段在之差越衆、無御用ニ國司ニ被差出儀可爲無用、

付 三司官にも同断之事、

一 奉行并付衆定置水夫之外、何色にて及被請問敷ハ、

但 水夫代物ニハ請取儀堅令停止事、

一 右之衆就私用、國司藏之錢申請儀堅停止ハ事、

一 奉行私ニ召列醫者諸事付衆同前ニ在之儀可爲停止、尤不依品物輕重雖地下人遣一切請問敷ハ、

但 致療治相應之禮物者制外之事、

一 在番衆上下之節、奉行付与力乗船老艘、付衆乗船老艘たるへき事、

一 荷物積入仕上船老艘にて及追付送状を出、出船可被申付、日和待之間、何方之湊におひても船頭水手猥に陸地ハ下儀可爲停止、勿論遊女之類通融一切禁止之事、

一 在番之面々衣類如御定、日野絹・紬・木綿布たるへし、又被官衣類上帯下帯まで木綿ぬの之外堅令禁止事、

一 琉球士之衣類、付又小者之衣類右同断、雖然位ニ付之支度者可爲各別事、

一 奉行并付衆、過其分限致時宜儀不可然ハ、自今以後應人躰可有覺悟事、

一 在番衆下人共ハ地下人以内談致仕繰儀堅可爲停止事、一 付衆致氣任、奉行之下知を背、聊尔之躰於在之者此方ニ可被差上ハ、追付代之人可召下事、

一 在番衆爲仕繰、國司藏米申請儀堅令停止事、

一 運賃取ニ遣御船逗留中、(たて草) ぼて竹・(帆手) ぼて木・網

之類水手可相調之間、所より出儀可爲停止事、

一 在番衆之下人并船頭・舟付水手之者致驕或押買押賣仕儀、曲事深重之間堅可被申付事、

一 奉行并付衆所ハ琉球衆公用之外節々之見舞可爲無用、

但 三司官其外役人者可爲各別、勿論不依誰人雖致見舞進物一切停止之事、

一 從國司在番衆ハ之振舞者二汁二菜引菜三色之外可爲無用ハ、尤檢物道具禁止之事、

一 在番衆之下人并船頭水手首里其外諸間切ニ參、致振賣儀かたく停止之事、

一 在番衆交替之節、荷物乘坐下者、乘船之水手其外下船之水手たるへし、地下人召仕間敷事、

一 八重山嶋・都之嶋ハ日本船運賃取ニ可參刻、差曳之儀者向後三司官計次第たるへき事、

一 船頭水手法度相背、致寺領由候、向後者從奉行糺科之輕重、或過物或籠舎可申付事、

一 船頭水手博突うつ事堅可爲禁止、若相背族船頭者致付状當地ニ可差上、水手者一節籠舎申付、其上爲過料銀子壹枚、勿論其船頭ハ表同断之過料可被申付事、

一 船頭水手於嶋中女房を迎、所帶立儀從前ニ禁止之處、頃相背者在之由不可然、向後稠可致沙汰之間、堅可被

申付置事、

一 在番之面々至下人等迄、酒女之戒專可相嗜事、

一 琉球衆位昇進、或口事篇、或地頭、或楮持方等之儀三司官被致差引儀ハ外間、縱至在番衆雖申出被構ましき事、

一 在番衆其外船頭水手於嶋中萬賣物かけに入付儀禁止之事、

一 地下人就爲致祝言、在番衆之下人、付船頭水手或水かけ、或祝物を遣、致酒宴儀令停止事、

一 運賃船仕上米表不請取、前運賃取ハ儀雖爲御船令禁止ハ、尤水手飯米於無之者愿其船之人數可被相渡事、

一 船頭水手借物之方ニ、地下人を肉之者ニ召成儀、堅令停止事、

一 在番之面々運賃船之船頭所ハ振舞ニ參、其上女を召列方々遊山ニ參儀、不可然ハ、自今以後堅可爲停止事、

一 奉行滯留中、必嶋廻在之由ハ、向後者可爲無用、若參ハ外ハて不叶時分者、いかにも小勢にて所之痛ニ不成様可被心得事、

一 運賃船積荷礙先次第可被相渡、或在番衆乘船、或琉球衆乘船、或國司荷物を乘来ハ、奉行荷物を乘来ハなど

、忠節之様ニ申成、碇先ニ召成荷物相渡儀可爲停止、

但琉球衆當地ニ渡海之刻者三司官望次第船可相渡

事、

一到在番衆、運賃船之船頭水手不依何色進物遣外共一切

被請問敷外、尤右之衆下人にも可爲同断、若此旨於緩

者奉行可爲越度事、

一於那覇商賣ニ可成竹木、道之嶋代官以見合伐調、下船

ニのせ那覇奉行へ送状相付可遣由申渡外条、着津之時

分可有首尾事、

一運賃船之船頭水手申分共可在之刻者、不移時付衆取次

奉行承届、以沙汰之上早速可相濟事、

一從前々琉球上下之船ニ、女致往來儀禁制之間、弥可相

守外、

付刀・脇指・弓・鉄炮并玉薬・具足・とびなしの類

持下儀可爲停止、但在番衆兵具者制外之事、

一御物之鉄炮、付玉薬以下之道具并所之衆格護之鉄炮、

御物ニ被召上置外、右之取あつかい、向後者在番衆奉

行所に受取置、修理等可被申付事、

一運賃船送状之外、私荷物持渡外者以差出別ニ送状を取、

鹿兒嶋役所に出、以下知品物可取事、

一從琉球上國之人不依何色敷奇道具持上外ハ、琉球奉行

見届、於無御用者可致活却事、

一船頭水手於嶋中鉄炮うつ事可爲停止事、

一在番衆之下人并船頭水手相撲取儀停止之事、

一流人不致氣任様ニ申付上、於相背者其旨鹿兒嶋に可有

言上事、

一在番之奉行宿者從前々相定所ニ可被居、

但交代之節者おやミせたるへき事、

一右付衆宿、地下より差圖次第たるへし、不可致勝手外、

敷畳等宿ニ敷付之外、所より雖出、請取ましき事、

一付衆就奉公之儀、方々檢者ニ可被參刻、日限相違外へ

ハ人足可爲費之間、向後者其心得肝要たるへし、

付右檢者に所より振舞停止之事、

一所より出置茶湯道具奉行宿可爲老所、其外停止之事、

右條日之趣其地在番衆に差遣之間、各以此心得嶋中諸

事堅固ニ可被申付外、聊緩疎有問敷者也、

明曆三年西九月十一日

源左衛門

勘解由

右衛門

三司官

兵部
筑後
筑前
圖書

749 光久公御譜中

爲改曆之嘉瑞、被差渡使札珍重々々、仍准恒例太平布五十疋・蕉布五十端・焼酎十甕到来、欣悦之至候、猶期後喜之時候、恐惶不宣、

朱力平
明曆三年 九月十六日 薩摩少將 光久御判

琉球國司

回答

750 御文庫廿一番箱五拾二卷中

御火事ニ付各御進上物覺

一 銅 貳万貫目

代 貳百四拾四貫目

一 漆 五百貫目

代 七拾六貫貳百五十目

合 三百廿貫二百五十目

(伊達忠宗)
右老松平陸奥守殿

一 角石 五十本

代 九拾一貫五百目

一 すみわき 五拾本

代 三十五貫目

一 平石 貳百本

代 十貫九百八十目

一 くり石 二百坪

代 四十八貫八百目

合 百八拾六貫二百八十目

(松平光通)
右老越前宰相殿

一 角石 十本

代 八貫三百目

一 角わき 十本

代 七貫目

一 平石 五百本

代 三十六貫八百目

一 ろくしやう 二千斤

代 四拾八貫八百目

一 壹間こ仁合 千間分

代 十八貫三百目

合 百廿九貫貳百目

右老松平長門守殿

大角石

但しやつと嶋石ミかけ石

代 四百五拾七貫五百目

一角わき

右同石

代 貳百四十四貫目

一 鉄

代 四十貫六百六十目

合 七百四十二貫百六十め

右老松平安藝守殿

一 材木

代 千貳百貫目

右老紀伊大納言様

一 材木

代 千貳百貫目

右老尾州大納言様

一 長さ九間半末之口四尺二寸

一 長さ六間半末之口三尺七寸

一 長さ右同 末之口三尺五寸

右老嶋津萬壽殿

九月十七日

751

御文庫廿一番箱五拾二卷中

光久公御譜中ニ在リ

猶以鎌田左京氣色無相替儀弥草臥被申、以上、

態以飛札令啓達、然者去廿八日稻葉美濃守殿御家老役

被仰付、就其御在國之御衆よりも爲御祝儀御使被遣之

由、御供衆之内騎馬ニ亦も小荷駄衆ニても、早々可

被差遣、將又紀伊宰相様御縁組、伏見院殿御姫ニ相究

外ニ付、御并之御衆より御祝儀之御使被遣之由、右

稻葉殿へ之御使者を以仕廻可申、此等之儀留守居中へ

も申談、爲御心得、恐惶謹言、

朱力キ 明暦三年

十月二日

嶋津中務

久茂判

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

752

封面二

一稻葉美濃守様ハ家老役御密之事、

一紀伊宰相様伏見院殿御姫ニ御縁与之事、

酉拾月廿三日飛脚持下、

鎌田筑後殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿
人々御中

御文庫廿一番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

(重長)

安藤右京殿御持病氣有、此比少御本復り処ニ、去ル廿

八日より致再發同廿九日御遠行有、是者御飛札にて相濟

可申有、爰許にて御書相認進覽可申有、

朱力キ

明曆三年

十月二日

嶋津中務
(久茂)

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

753

御文庫廿一番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

九條政所様御逝去之由有得共、今日迄者御隱密にて有、

是者 公方様御伯母様ニ有り間、御悔可被 仰上様と申

躰ニ有へ共右之通有、若替儀も有ハ、可申上り、恐惶

謹言、

朱力キ

明曆三年

十月二日

嶋津中務

久茂判

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

嶋津筑前殿

嶋津圖書殿

參

封面左ノ如シ、名略ス

九條殿并安藤右京殿死去之事、

酉十月廿三日飛脚持下、

754

光久公御譜中

同年十月六日爲ニ述職ニ首ニ途于居城一、解ニ纜乎薩西岸一、
著ニ船于大坂一、十二月十日到ニ江府一、家老新納右衛門久

詮・鎌田藏人政昭從_レ駕也、翌十一日賜_二

上使_一松平伊豆守信綱含_三 恩命_二來_レ矣、光久登_レ

城而奉_レ謁_二

將軍家_二述_三朝參之禮_一、進_二獻御太刀一腰、御馬一匹_一實金十兩

御時服_二十一也、蓋每_三參觀_一、所_三進上_一之方物者御太刀一

腰・御馬代銀千兩・狸々皮十間・羅紗十間也、然今減_レ

之者、今年正月江府大火故_二令減_レ却乎諸侯之進上物_一、

因如_レ斯家老取_二拜謁_一若_レ例也、

755

御文庫拾_三番箱五拾六卷中 光久公御譜中_二在_レリ

御札令拜見_レ、去_レ々年長崎_二來着之唐船風聞、韃王冠船

琉球_二雖可差渡之由_レ、去年以來當秋迄_レ者不致着岸之旨

得其意_レ、入念示給_レ之通可及 台聞_レ、恐_レ謹言、

朱力キ
明曆三年

十月十四日

阿部豊後守

忠秋判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

756

(挿入)
十八 正保二年ならん 西十月十五日御条書書拔

(兼書)
一 福屋助左衛門御犬追物_二付罷上_レ、當時伊賀守在江戶

仕罷居_レ付、留守無人_二の_レ間、御馬かし被_下付様御

詫被_申付、御馬かし可_被下_レ間、御國_二主從八人御

賦にて勿論馬不立_二罷登_レ事、

十九 慶安三年ならん 寅三月十五日之御条書書拔

(家久)
一 黃門様御時より被 仰出_レ趣不相替、諸士在國之時者、

衣裳等鹿相_二の_レ尤_レ、就中女房之小袖結構無之様可

致分別事、

二十

一 雖不新、比日諸御役人猥_二賄賂之進物を受、鼻肩かち

に有之由其聞得_レ、前_二の_レ申付置_レ神文一年_二の_レ度度_一

、仕、前書并條書之旨堅固_二相守相勤_一へし、勿論遠方

(諒也)
の用段之儀於申來者時日經さるやうに可致沙汰事、

以上

明曆元年十二月二十六日

757

二十一 御袖判写

今度家老衆與御物所奉行致相談、定置新規帳之面、向

後聊無相違之物一_二可申付之、若私_二令談合相替儀於

有之者、御物所奉行并諸役人可為曲事、自然依時宜可

相直儀者、家老中以相談於致言上者可相極之際、可有

其覚悟者也、

明曆三年十月朔日

鎌田政昭日記 御譜中ニ無之

猶々便船無御座外ニ付、借船を以阿久根迄遣申外、

阿久根方宿次ニ可被差上由阿久根御喫衆迄書状相

添遣申外、右之通昨日相増書状ニ申上外、相屈可

申と奉存外、以上、

態一書令啓上候、

一十月十一日之晩ニ大村丹後守殿御領内屋(肥前)つぎ村ニ罷居

申外兵作と申者、長崎酒屋町利左衛門と申者之所ニ参

外申外ハ、大村江能事御座外間、急度可参由申外、

右之利左衛門者兵作女房之弟ニ御座外、右利左衛門申

外ハ能事とハ如何様之様子にて外哉、承外可参由申

外得者、大村へ不思議成事御座外、何れも鬼利死丹宗

ニ罷成外へハ往々ハ能身上ニ罷成由申外、右利左衛門

申外ハ今晚分別仕外、可参由申外事、

一利左衛門右之通町中へ申出、則刻御政所へ罷出右之通

申上外、就夫兵作并宿主引地町之又右衛門御擲取被成

外、拷問を以様子御尋被成外得者、大村之内はスリハ

□^キいき村へ鬼利死丹宗を廣め外由細々申上外付、御政

所方大村へ様子被仰遣、頭七人御擲被成拷問を以御尋

ニ外、はさミ村・やつき村兩所ニ廿一竈頭分之者廿

六人男女九拾九人十月□^ム迄之御穿鑿ニ、御擲取被

成籠舎被仰付外、就夫大村丹後守殿御家老福田拾郎左

衛門殿長崎御政所へ被罷出、何れも鬼利死丹ニ相究申

外由被仰上外通承申外、

一右之兵作事も鬼利死丹ニ相究長崎へ籠舎被仰付外、右

之儀長崎御政所方大村殿へ被仰進外、大村江能事相知

右之通ニ御座外、大村殿御領内御緩之様ニ出合申外通

承申外、右之通ニ御座外ニ付、高木作右衛門殿へ内意

申外ハ、大村へ鬼利支丹之出合御座外、國元へ右之通

申遣、御使者など被進外ハ如何可有御座外哉、薩摩

之儀者海上遠御座外得者、申遣外も五日十日之内ニ

者長崎へ御使者被参外事不定ニ御座外間、御使者被進

外可然外哉、様子被仰聞可被下之由申外へハ、尤之

儀外間御國元より御使者被進外可然由被仰外、いま

た或方方も御使者無御座外得共、二三日之内ニハ近國

より之御使者可有御座由被申外間、御使者被爲越外

可然と奉存外、右之通可然様ニ被仰上可被下外、相替

儀御座外者急度可申上外、恐惶謹言、

明曆二年 西十月廿一日 萩原 三郎右衛門判

西八三年也 喜入五郎兵衛様

堀四郎左衛門様

參御足下

右同事件、外二式通 略

759 御文庫廿一番箱五拾三卷中 御譜中ニ無之

一筆致啓上外、其許御無吳御座外哉承度存外、然者昨日

黒川与兵衛様長崎方御状被下、大村因幡守様御領分ニき

りしたん宗門之者有之由、長崎之者申出ニ付而、則因幡

様御留守居衆へ被仰遣、宗門之者三拾四五人為御捕被成

之旨其外別条無御座外、若於爰元何角と致風説無心元可

存と思召被仰下之由御座外、尤於其許表様子可被聞召外

へとも先如此御座外、若又相替儀御座外ハ、互ニ可得御

意外、恐惶謹言、

十月廿四日

米田助右衛門

判

長岡式部少輔

判

760 御文庫廿一番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

長岡監物 有吉頼母佐 嶋津筑前様 嶋津圖書様 伊勢兵部様 鎌田筑後様 新納右衛門様 町田勘解由様 人々御中

御飛札令拝見外、然者大隅守様御船去ル十八日肥前平戸

御出船被遊外刻、御供船之内一艘瀬ニ乗上外處、當領之

荷船数多居合御荷物等取上申通 大隅守様被爲聞召届、

於江戸越中守ニ其段可被仰達外、皆其所へ者各方御禮可

被仰越之山、御船中方被仰遣外旨誠被爲入御念たる儀ニ

奉存外、ケ様之儀者相互之事ニ御座外處、御^{本マ、(怒カ)}慙之仕合

ニ奉存外、随而大村きりしたん宗門之もの在之被擲捕之

由御聞届外之通被仰越外、此儀ニ付頃自是も以書状得御

意外つる、弥相替儀外ハ、互ニ可得御意外、恐惶謹言、

朱カキ
明曆三年
十月廿九日

米田助右衛門尉
文
不分明判

長岡式部少輔
判

長岡監物
判

有吉頼母佐
判

鳴津圖書様

鳴津筑前様

町田勘解由様

鎌田源左衛門様

御報

御文庫廿一番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

追ふ申入外、然者上原小十郎去廿八日致到着外、先以
其御地御無吳之由玆重ニ御座外、

一去夏安海船ニ琉球仁七人乗来外、於長崎口能無之相濟
外而七人共ニ御方へ被相渡外旨、就其御奉行衆に御礼
爲可被仰入小十郎被差遣外、并御状一通右之儀ニ付神

尾備前殿・甲斐庄喜右衛門殿へ御状老通ツ、被差遣外、
(元勝)
(正述)

留守居中へ致相談近日差出可申外、御返事出外ハ、
追付小十郎差下可申外間、其節細々可申入外、

一上御屋敷御作事奉行之儀、鎌田太郎右衛門相役 太守
様御參勤之刻、筑後殿・右衛門殿へ可申談之旨得其意
外、

一普請方付衆之儀後日可被仰越之旨致承達外、

一御參勤之刻 上使御請待之御座造之儀能様ニ可申付之
旨 御意之通是又奉承達外、

一上御屋敷與造重可被仰付外、書院方取付可申之由心
得存外、猶期後音之時外、恐惶謹言、

朱カキ
明曆三年
十一月二日

鳴津中務

久茂判

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

伊勢兵部殿

鳴津筑前殿

鳴津圖書殿

人、御中

封面ニ

西十一月廿日家村李左衛門持下四通之内、

762
十三番箱五十六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見外、去夏唐船ニ乘来候琉球人七人之儀、於無紛

者其方に可相渡之旨、最前長崎奉行中に申遣り付、右
之通被請取之由得其意、依之被差越使者、入念、趣
可及、台聞、次爲參勤先月上旬國元可爲発足之段承届
、恐、謹言、

朱カキ
明曆三年 十一月五日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守

信綱判

酒井雅樂頭

忠清判

松平大隅守殿

御文庫廿一番箱五拾一卷中 御譜中ニ無之

猶以乍重言御禮之使者延引無之様ニ可被仰付、遅
りてハ爰元御仕合念遣ニ付間如此、新介事ハツ半
時ニ罷立、以上、

又申、鶴御拝領ニ付爲御祝儀 (編久) 薩州様方 (光久) 少將様

へ御書御進上付間、差上可被成、

急度令啓達、然者昨晚御當番阿部豊後守様方以御切紙、
今日八ツ時ニ留守居衆一人豊後守様御宿へ可差出之旨被
仰下、付、有川八右衛門罷出之處、御應之鶴御拝領
之由被仰出付間、則宰領堀新介御道具之者兩人申付差下

、誠以目出度御仕合ニ奉存、追付御禮之御使可被差
上、中途無延引被仰付尤ニ存、各如御存知鶴之送御
手形早晚御返進付間、御禮使必持参付様ニ可被仰付、
恐惶謹言、

十一月十一日

鎌田源左衛門 政有判

嶋津圖書殿

嶋津筑前殿

鎌田筑後殿

伊勢兵部殿

スリキル、

町田勘解由殿

人々御中

764 右同在別紙 此書御譜中ニ無之

又申、鶴御拝領之御奉書爲持申、有川八右衛門申、
者今度之御給様常ニ相替、別のおもき御様子ニ、一番

ニ小松中納言殿、二番めニハ此方様ニあり、何も留守居

衆豊後様へ詰り居付處、次第ニ御呼出被成御渡り由八

右衛門被申、今日御給之衆書付もたせ申、爲御心得

、恐惶謹言、

十一月十一日

鎌田源左衛門
政有判

町田勘解由殿

新納右衛門殿

伊勢兵部殿

鎌田筑後殿

鳴津筑前殿

鳴津圖書殿

人、御中

封面ニアリ

明曆三年十一月十一日ノ状同廿六日之朝堀新介持下、

765

御文庫拾三番箱五拾六卷中 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、公方様御機嫌能成御座儀目出度被存

之由得其意候、益御勇健御事、間可御心安、將又爲參

勤國元被相立、打續日和惡、去十一日到長州下、因着

船旨示預之通承届、入念、段及、台聽、恐、謹言、

朱力キ

明曆三年 十一月廿七日

阿部豊後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

酒井雅樂頭忠清判

松平大隅守殿

766

全上 光久公御譜中ニ在リ

御札令拜見、去月廿六日御能成 仰付諸大名登 城之

刻、息薩广守見物之儀相達、係被存之旨得其意、入念示

預之趣及、台聽、恐、謹言、

朱力キ

明曆三年 十一月廿八日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅樂頭 忠清判

松平大隅守殿

767

明曆三年丁酉

十二月四日内山平右衛門 阿多内膳忠榮臣にて、
殉死

768

御文庫廿一番箱五拾三卷中 光久公御譜中ニ在リ

猶、筑後儀爰許ニ名差合中御方共御座、付、相

替申、是又爲御存、以上、

態一筆令啓達、然者 太守様御事御機嫌好去ル十日、

被成御参府、一昨日上御屋敷ニ 上使松平伊豆守殿被成

御出、昨日 隅州様 薩州様被遊御登城、如何にも御側

近御参被成、御近所ニ酒井雅樂頭殿御座、金山御拝領

之儀迄御取合被成、御札相濟目出度奉存り、御前御仕合常々も一段首尾能りて御悦喜ニ被思召上候、此旨各中へ可申越由被仰出りニ付如此り、乍不申御子様方へも能様ニ御申可被成り、猶追々御吉左右可申入り、恐惶謹言、

朱カキ

明曆三年

十二月十三日

新納右衛門

久詮判

鎌田藏人

政昭判

鳴津中務

久茂判

鳴津圖書殿

鳴津筑前殿

伊勢兵部殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

人、御中

封面ニ左之如シ、名宛等略ス

西十二月十三日之状、戌ノ正月八日ニ飛脚到来、

一四ノ十二月七日ニ江戸へ被成御着、同十二日ニ御目見之事、